

# 「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫　21-3

ムーミン谷の夏まつり

トーベ=ヤンソン

下村隆一 訳

1981年6月10日　第1刷発行
1993年3月25日　第19刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-01
電話　出版部　(03)5395-3536
販売部　(03)5395-3625
製作部　(03)5395-3615

N.D.C. 993　222p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社



ISBN4-06-147046-9　(児庫)

＊著者紹介

トーベ=ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以降「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

下村隆一（しもむら りゅういち）

1928年，大阪市に生まれる。東京大学経済学部を病気のため中退。北欧児童文学の翻訳家として活躍したが，1969年没。主な訳書に，「ノロちゃんのおとぎ話」「長くつ下のピッピ」「ムーミン谷の夏まつり」などがある。




深くかみついてしまったのです。しかし、ヤンソンさんは、さるをしかりもせずに、こんどは、おなじコップのコーヒーを、口よせあって飲んでいました。そのあと、ふたりは四つんばいになって、床の上を遊びまわっていました。

植物・人間・動物にみせたこの対応の仕方をみれば、もはや、わたしが説明するまでもなく、ヤンソンさんは、生命あるものが自分らしく生きようとしている、というあたりまえのことに、感動せずにはいられない人のようです。かの女の作品にも、この感動がちりばめられています。雪の上に残された動物の足あとのつきぐあい、はちの羽音、草ものびるだけのびるがいいなどの自然描写から、そこに、新しい営みを感じて心おどらせているヤンソンさんをみる思いがしてなりません。

わたしたちをとりこにしてしまうムーミンたちの暖かさを生みだしている、あの思いやりだって、このほとばしるような感動があって、はじめて深みをますのでしょう。

こうした感動が、どこからもたらされるかについては、つぎの機会に考えたいと思います。(一九八一・四・十五)

の「暖かさ」は、いったい、ヤンソンさんのどこから生まれてくるのでしょうか。ここに、そのなぞの一端をうかがい知ることのできるエピソードを、三つ紹介しておきます。

はじめは、ヤンソンさんの友人で、フィンランドの代表的なさし絵画家、カルマ（M.KARMA）さんが、今年の四月四日にわが家をたずねてくださったときに聞いた話です。カルマさんが、ヤンソン島をたずねたとき、「こけは二、三度ふんだだけで枯れてしまうので、気をつけてやってね。」と、いかにもいいにくそうに、ヤンソンさんにいわれたことがあったということです。

つぎは、私事できょうしゅくですが、わたしがフィンランド文学の翻訳をしている渡部翠と結婚したとき、ふたりの友人であるヤンソンさんは、ヘルシンキから心のこもった手紙とともに、一まいの絵を送ってくれました。ムーミンたち全員が祝いの品々をたずさえ、喜んでくれている姿が、B5判用紙いっぱいに描かれていました（カット）。そのとき、わたしどもは、あまりのうれしさに、しばし言葉をうしなってしまいました。

三つめは、十年前に来日したおり、わが家をたずねてくださったときのことです。わが家でかっていた小さいさるが、ヤンソンさんの食べていたパイに、かじりついてしまいました。パイを持つ手にのったさると、にこにこ顔のヤンソンさんは、そのパイを、かわるがわる最後までいっしょに食べていました。そのときのこと、さるがヤンソンさんの指に

# 解説…ムーミン童話の二つめのなぞ

高橋静男
（フィンランド文学研究家）

ムーミン童話は、二十以上の言語に訳され、作者ヤンソンさんは、本国フィンランドはもちろんのこと、諸外国で数々の賞を受けています。日本でも評価が高まり、名作の仲間入りをはたしました。そればかりでなく、すでに三十年以上ものあいだ、主義や主張の異なる国の別なく、さかんに読みつがれてきています。

この人気の秘密は、読者がもっともよく知っているとおり、作品の登場人物たちがかもしだすユーモアまじりの暖かさにあると思います。かれらは、ひとり残らず弱点や欠点を持っているのに、おたがいに思いやりを深くすることによって、だれひとりとして傷つくことなく、だれもが、自由に、おおらかに、自分らしく生きていけています。これがムーミン童話の主題だと思いますが、ここに生まれる暖かさに、わたしたちは、心をうばわれ、いつのまにか、やさしい思いにつつみこまれて、深いためいきをついている自分を見いだすことでしょう。

民族をこえ、思想をこえ、時代をこえて、多くの人々をやさしい思いにつつみこむ、こ

ん。小さなふたさえも、貨物（かもつ）をいれるへやの上に、ちゃんとのっかっていました。

ムーミントロールは、庭（にわ）の中をとおって、家へかえりました。ひいやりした、おだやかな夕がたで、ぬれた花々がまえよりもつよくにおっていました。ママが玄関（げんかん）の前にこしかけて、まっています。

手になにかもって、にこにこしていました。

「これ、なんだかあててごらん！」

と、ムーミンママがいいました。

「小さなボートだ！」

ムーミントロールは、そういってわらいました。べつに、おかしいことがあったからではありません。とてもとてもしあわせに感（かん）じたから、ただわらったのでした。



「いや。だけど、日曜日だけは、これをすうんだ。」
「へえ、そう。」
ムーミントロールは、おどろいていいました。
「ああ、きょうは日曜日だったね。ぼく、もうねにいくよ。じゃ、おやすみ！」
「おやすみ！」
と、スナフキンもいいました。
ムーミントロールは、池のところまで歩きました。ハンモックをつるす木のうしろにある、あの茶色の池です。のぞきこんでみると、うでわもくるぶしかざりも、そのままありました。
それから、ムーミントロールは、草の中をさがしはじめました。
しばらくして、木の皮の船を、やっと見つけたのでした。うしろの柱が、一まいの葉っぱにひっかかっていました。けれど、ぜんぜんいたんでいませ

しく客間の家具を、できるだけ、まえのとおなじようにつくるよ。ふさも、赤いモヘアも、みんなつけてね。」

「目をつぶらなくても、わたしだいじょうぶですわ。」

と、ママは元気よくいいました。

「なくなってさびしいものは、一つだけですもの。それは、本式のまわり舞台なの。そしてね、こんどは色のあるモヘアにしたほうが、いいのじゃありません？」

その晩、ムーミントロールは、スナフキンのキャンプ地へ、おやすみをいいにおりていきました。

スナフキンは、川原にこしをおろして、パイプをくゆらせていました。

「きみ、必要なものは、みんなそろってる？」

と、ムーミントロールが、たずねました。

スナフキンは、うなずいていいました。

「ちゃんと、そろってるよ。」

ムーミントロールが、くんくんと鼻をうごめかしました。

「いままでとちがうたばこを、すいはじめたの？　ちょっと、きいちごみたいだね。それは、上等？」

と、ムーミンパパがいいました。

家までの、さいごのところは、みんな、かけ足でした。丘を横ぎり、ライラックのしげみのあいだをかけぬけて、玄関の石段まで、まっすぐにつきすすみました。ムーミン一家の人たちは、そこで足をとめて、安心となつかしさのまじったためいきを、ゆっくりと、ついたのでした。じっとたちどまったまま、わが家にいるというのがどんなことか、しみじみとあじわいました。なにもかもが、むかしのままでした。

こまかいもようのついた、みごとなベランダの手すりは、こわれていませんでした。ひまわりも、のこっていました。水おけもありました。そして、ハンモックは津波にあらわれて、ようやく気持ちのいい色になっていました。一つだけ水たまりが、まだのこっていて、空の色をうつしていましたが、これはちびのミイの手ごろなプールになることでしょう。

まるで、なにごともおこらなかったようでした。そして、もう二どと、おそろしいことが、みんなの身にふりかかりはしないだろうと思われました。

けれども、庭のとおり道は、貝がらでいっぱいですし、玄関の石段のまわりには、赤い海草のたばが、のこされていました。

ムーミンママが、客間のまどのほうを見あげていると、ムーミンパパがいいました。

「ママ、まだ中へはいっては、いけないよ。はいるんなら、目をつぶるんだね。わしが、あたら

せん？　たとえば、『はい虫たちは、レタスをすこしのこしておくこと』というような。」
と、ムーミンママがききました。
ヘムルはこまって、
「うん、まあ……それでも、かまわんじゃろう。それでは、おまえたちを釈放せにゃならんな。しかし、二どとああいうことをするではないぞ！」
といったのでした。
「もう、しません。」
みんなは、すなおに答えました。
「それで、おまえは家へかえるだろうな。」
ヘムルは、こういって、小さないとこの顔をきびしい目で、にらみつけました。
「ええ、わたしのこと、きらいでなかったら。」
と、むすめはへんじしました。
それから、ムーミン一家の人々のほうへむかって、いいました。
「あのあみもののこと、ほんとにありがとう。上ばきができあがったら、すぐにあげますわ。どんなところ書きで、おくったらいいのかしら。」
「ムーミン谷と書くだけで、いいですよ。」

「スナフキンは後悔して、おゆるしをねがっています。」
と、小さなヘムルは、はずかしそうにいいました。
「そんなこと、ぼくは……。」
スナフキンがいいかけました。
大きなヘムルは、ぎょろりとにらんだだけで、スナフキンをだまらせてしまい、ズックのノートをひらきました。ヘムルは、数をかぞえだしました。長いあいだ、かぞえていました。ヘムルがかんじょうしているあいだに、足の下まで水がひきました。やっと、ヘムルがいいました。
「まちがいない。『するべからず』と、ちゃんと五千回、書いてあるわい。」
「しかし……。」
と、スナフキンがいいだしました。
「どうか、なにもいわないで。」
と、小さなヘムルは、たのみました。
「わたし、ほんとにたのしかったの。ほんとに、ほんとに！」
「だが、たてふだを！」
と、いとこのヘムルは、いいました。
「この人、かわりに、わたしんとこのやさいばたけに、いくつかたてふだをたてることはできま

もう、川のまがりかども、青くぬってある橋も見えました。はやくも、ジャスミンは花ざかりです！　みんなは、あたりにジャブジャブ水をはねかえしながらいそぎました。そして、家へかえったらしようと思うことを、あれこれと元気よくしゃべりあいました。

そのときふいに、けたたましい警笛が、しずかな空気をつんざいたかと思うと、前にもうしろにも、いたるところに、ヘムルが、むらがってあらわれました。

スノークのおじょうさんは、ムーミントロールのかたに、頭をかくしました。だれも、しゃべるものはありません。もうほとんど、家へたどりついたとおなじなのに、そこで警官につかまってしまうなんて、あまりにもおそろしいことでした。

あのヘムルが、水の中をのっしのっしと近づいてきて、スナフキンの前で足をとめました。

「さあ、どうだ。」

と、ヘムルがいいました。

だれも、うんともすんともいいません。

「さあ、どうだ。」

と、ヘムルは、もういちどいいました。

すると、あの小さなヘムルが、せいいっぱいのはやさで、いとこの前にすすみ、えしゃくして、黒いズックのノートをさしだしたのです。



た。

小さなヘムルは、なにか、とってもだいじそうなものを、洋服の下へかくしていました。でも、それが、なんなのか、だれもききませんでした。

スナフキンは、いちばんうしろを歩いていました。いつもより、もっと無口で、たえずあたりを見まわしては、なにかもの音がしないかと、耳をすましています。

「あの人たちが、ここまでおっかけてきたら、わたし、その古ぼうしをたべてみせるわ！」

と、ミムラねえさんがいいました。

それでも、スナフキンは、くびを横にふっただけでした。

いまは、道もせまくなりました。きりたった山はだのあいだに口がひらいていて、そこにムーミン谷のなつかしいみどりが、のぞいていました。あかるい旗がひるがえっている屋根も……。

と、ムーミンママがいいました。
　ムーミントロールは、こっくりうなずきました。
「それは、いいね。そして、ホムサとミーサ……ね、ママ。ミーサは劇場へのこれることになったとき、とってもうれしそうだったよ！」
　ムーミンママは、わらいました。
「ええ、ミーサは、しあわせそうだったわ。一生、かわいそうな劇をやって、いつもちがった顔をするだろうね。そして、ホムサは舞台監督になって、ミーサみたいにしあわせになるわ。じぶんの友だちが、それぞれその人にぴったりしたことができるようになるのは、うれしいものでしょ？」
「うん、とってもうれしいよ。」
と、ムーミントロールはいいました。そのとたんに、ボートがとまったのです。
　ムーミンパパが、船べりからのぞきこんでいいました。
「草の中へ、船がはいりこんでる。もう、水の中を歩こうよ。」
　みんなは、ボートからおりて、水の中を歩いていきました。水がこしのところまでありますので、歩くのは、やっかいでした。だけど、底はやわらかい草ばかりで石もなく、いい気持ちでした。ときどき、地面がもりあがって、花さく丘が、天国の島々のように、水面にうかんでいまし

紙がついてるノートに、なんぎしながら、字を書いていたのです。——「するべからず」とね。「するべからず、するべからず、するべからず」と五千回も。そうやって、どのページにもいっぱい書いていくことは、この小さいヘムルにとって、たいへんうれしいことでした。
(やっぱり、しんせつにするって、ほんとにすてきなことね！)
ヘムルのむすめは、しずかにそう考えていました。
ムーミンママが、ムーミントロールの手をにぎって、
「なにを考えこんでるの。」
とききました。
「スナフキンの子どもたちのことを考えてるんだよ。ほんとに、あの子たち、みんな役者になるの？」
「なん人かはね。役者にむいていない子どもは、フィリフヨンカさんの養子になるのよ。あの人は、親類がなくちゃ、さびしくてやりきれないんだものね。」
「あの子たち、スナフキンがいなくて、さびしがるだろうなあ。」
と、ムーミントロールは、しみじみといいました。
「たぶん、はじめのうちはね。でも、スナフキンは、毎年、あの子どもたちに会いにいくし、みんなの誕生日には、手紙を書くつもりだって。絵のついた手紙をね。」

と、ムーミンパパ。
「そうともいえませんよ。」
と、スナフキン。
ボートのまん中に、水泳用のガウンをかぶって、へんにもりあがっているものが見えます。それが、もそもそとうごきました。ムーミントロールが、そのもりあがりの頭のはしっこを、こわごわ指でつついて、きいてみました。
「ちょっと、日なたへでてこない？」
「ありがとう。でも、ここがとってもいいの。」
水泳用のガウンの下で、やさしい声がへんじをしました。
「かわいそうに。あの子、外の空気に、すこしもあたってないの。こうやって、もう三日間もすわってるのよ！」
と、ムーミンママが、心配そうにいいました。
「小さなヘムルは、ものすごく気がよわいものなんだよ。この人は、あみものしてるんだと思うね。あみものをしてると、いつも気分がいいんだって。」
ムーミントロールは、こっそりと、そう説明しました。
けれども、あの小さなヘムルは、あみものなんかしていたのではありません。黒いズックの表

じぶんがいつもしていたように、海の水がじゃり道をきれいに手いれしておいてくれたかどうかと、それが気がかりでした。

ムーミンママにも、じぶんのいるところがわかってきました。「おさびし山」へいく道にそって、船はすすんでいるのです。そして、つぎのカーブのむこうに、ムーミン谷への入り口になっている岩が見えるだろうことを、ムーミンママは知っていました。

「みんな、かえってきたんだ。うちへ、うちへ、うちへ！」

と、ちびのミイが、ミムラねえさんのひざの上でうたいました。

スノークのおじょうさんは、ボートの前のほうにすわって、水中のけしきをのぞきこんでいました。たったいま、ボートは草地の上をとおりすぎました。ときには、いくつかの花が、そっと船底をなでるのでした。黄・赤・青と、色とりどりに水をとおしてうつくしいすがたを見せ、日光をしたって、うなじをのばしていました。ムーミンパパは、ゆっくり大きくこぎました。

「ベランダは、水の上へでてると思うかね。」

と、ムーミンパパが、たずねました。

「まあ、あそこへいってみなければ……。」

スナフキンは、そういって、さぐるようなまなざしを、かたごしになげました。

「ねえ、きみ。もうとっくに、ヘムルたちをひきはなしたぞ！」

イプにたばこをつめだしたのでした。

やっと、水がひきはじめました。あらわれたばかりの海岸が、ゆっくりとでてきて、日光の中に、ふたたび、なだらかなすがたを見せました。さいしょに顔をつきだしたのは、ほうぼうの木でした。ねぼけたようなこずえを、水面の上にふるわせ、それから、あんなひどいできごとのあとでも、なにもうしなわなかったかどうかたしかめるように、えだをさしのばしました。いためられた木々は、いそいで新芽をだしていました。小鳥たちは、もとのねぐらを見つけ、水のひいた丘の上では、人々が寝具を草の上にならべて、かわかしていました。

水がひきはじめたとたんに、みんな、わが家へむかっていそぎました。船をこいだり、帆で走らせたりして、昼も夜もいそぎました。そして、水がすっかりひいてしまうと、歩きつづけて、まえに住んでいた場所へいきつくのでした。

たぶん、谷間が海になってしまっていたあいだに、あたらしくまえよりもいい場所を、見つけた人もあったでしょう。けれど、それでももとの場所のほうが、みんなすきなのでした。

ムーミンママが、ハンドバッグをかかえながら、かわいいむすことならんで、ボートのうしろの板にすわっていました。ムーミンママは、エンマの劇場へのこしてこなければならなかった、客間の家具のことなんか、ちっとも考えません。考えるのは、わが家の庭のことばかりでした。



いそいでやらなきゃいかんぜ。ぼくは、みんなを知ってる。とちゅうで、ぐずぐずするなよ。こわがることはない。六月の夜は、おそろしくないんだ。」

ムーミントロールは、おとなしく、

「うん。」

と答えて、しばらくまちましたが、スナフキンがそれ以上なにもいいませんので、ボートからはいおりて、浜べを歩きだしました。

スナフキンは、ボートのうしろの板にすわって、コツコツとパイプから灰をおとしました。かがみこんで、木のえだの下でようすをうかがいました。あのヘムルは、ずっと海のほうへ、へさきをむけています。そのすがたは、月光の中に、はっきり見えました。

スナフキンは、わらいをかみころして、パ

もともと、いまのところは、どちらもしゃべる気がなかったのです。時間は、これからさきにも、たっぷりありますものね。これから夏がつづいて、したいことをいっぱいできるのです。いまは、ほんととは思えないようなめぐり会いをしたことと、この夜と、脱走するスリルとで、まったくじゅうぶんでした。ほかのことで、じゃまをされてはなりません。ふたりは、大きくカーブして、海岸のほうへもどっていきました。

スナフキンが、追っ手たちをまよわそうとしていることは、ムーミントロールにもわかりました。ヘムルの警笛が、はるかに暗やみの中で、けたたましく鳴りひびき、それに答える声が、いくつかきこえます。

ボートが、木の下のあしのあいだへすべりこんだとき、満月がのぼりました。

「さあ、ぼくがこれからいうことを、よくきくんだよ。」

と、スナフキンがいいました。

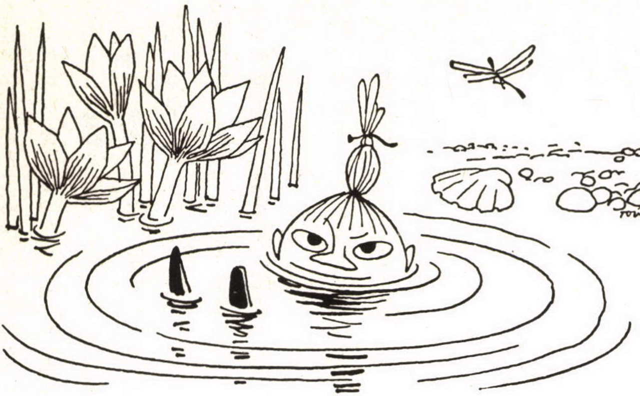
「うん。」

と、ムーミントロールは、へんじしました。冒険したい気持ちが、からだじゅうにわきたちます。

スナフキンがいいました。

「きみは、ほかの人たちのところへもどって、ムーミン谷のうちへかえりたい人を、みんなつれておいでよ。家具は、もってこさせないでくれ。ヘムルたちが、劇場の見はりをしないうちに、

# 第 13 章



## 罰とほうび

長いあいだ、スナフキンは、ものもいわないでボートをこぎました。ムーミントロールは、あの古いぼうしのなつかしいかたちが、夜空の中にくっきりうかんでいるのと、パイプのけむりが、しずかな大気のうちにぷかぷかとたちのぼるのとを見ていました。そして、

「いまに、なにもかもがよくなるんだ。」

と考えていました。

うしろできこえるさけび声も、拍手の音も、だんだん、だんだん小さくなり、やがてはオールをあやつる音しか、きこえなくなりました。

海岸の黒い線も、きえていきました。

「やあ、ひさしぶり！　ボートの中へ、はいれよ。どうやって、あのおまわりをまいてしまうか、見せてやるぞ！」
と、スナフキンは、へんじしました。
ムーミントロールは、船の上へはいあがり、スナフキンは、もみの木湾の入り口へ、水をきってこぎはじめました。
「さようなら、ぼくの子どもたちよ！　お手つだい、ありがとう！　きちんと、きれいにしているんだぞ！　タールがかわくまでは、屋根の上へのぼるなよ！」
スナフキンは、大声でどなってよこしました。
ヘムルは、やっとのことで、まわり舞台と、森の子どもたちと、よろこんで花をなげかけるお客さんたちから、はなれることができました。
そして、ぶつぶつ文句をいいながら、ボートにのりこんで、スナフキンをおいかけました。けれど、おそすぎました。スナフキンのすがたは、暗やみの中へ、きえてしまっていたのです。
すべてが、ふしぎなほど、しずかになりました。
「そうかい、おまえも、やってきおったのか。けども、劇場がいつもきらくな稼業だと思うでないど！」
エンマが、ずぶぬれになったフィリフヨンカを見つけて、ゆっくりといいました。



スナフキンは、フットライトをひらりととびこえて、からっぽのボートの一つに、とびおりました。ムーミントロールのボートが、波のうねりをくらっててんぷくすると、スノークのおじょうさんと、フィリフヨンカと小さなヘムルのむすめとは、舞台にむかっておよぎだしました。

「いいぞ！　いいぞ！　ダーカーポー！（もう一回やれ！　作者注）」

と、お客さんは、大はしゃぎです。

ムーミントロールは、水の上へ鼻をだせるとすぐに、スナフキンのボートのほうにむきなおって、そちらへおよぎました。そして、船べりに手がかかると同時に、さけびました。

「やあ！　きみに会えて、うれしくてたまらないよ！」

たばこのパイプにも、じぶんのからだから、火をうつせるでしょう。たまごをゆでるんだって、頭の上で……。」

ヘムルは、ひとことも口をききませんでした。ゆっくりと、スナフキンのほうへあゆみよりました。そして、えりくびをひっつかもうと、その大きな手をひらくと、どかどかと近づいて、さっととびかかりました。そのとたんに……。

まわり舞台が、ものすごいはやさで、うごきだしたのです。エンマのわらう声がきこえました。でも、いまは、ばかにしてあざわらう声ではなく、勝ちほこった、あかるいわらい声でした。

一どに、なにもかもが、めまぐるしくおこったものですから、お客さんたちは、なかなかついていけません。みんなをのせたまま、まわり舞台が、ぐるぐるまわったので、つぎつぎにからだのバランスをうしなって、ひっくりかえりました。二十四人の森の子どもたちは、なだれみたいにヘムルにとびついて、その制服にしがみつきました。



「あの罪人どもを、つかまえろ！　あいつらは、たてふだをぜんぶもやして、公園番を、ひとりで光るようにしたんだ！」

と、あの大きなヘムルが、どなりました。

お客さんたちは、しばらくのあいだ、すこしびっくりしていましたが、いまは、これは芝居のつづきなのだと、思いこみました。みんなは、コーヒー茶わんをはなして、フットライトのところへすわりこみ、見物しました。

「やつらを、つかまえろ！」

と、ヘムルは、たけりくるってわめいています。

お客さんたちは、大かっさいです。

「ちょっと、まってください。」

と、スナフキンが、おちつきはらっていいました。

「これは、どこかに思いちがいが、あるにちがいありません。あのたてふだをひきぬいたのは、このぼくですからね。公園番は、ほんとに、いまでも光っているんですか。」

ヘムルは、うしろをふりかえって、スナフキンの顔を見すえました。

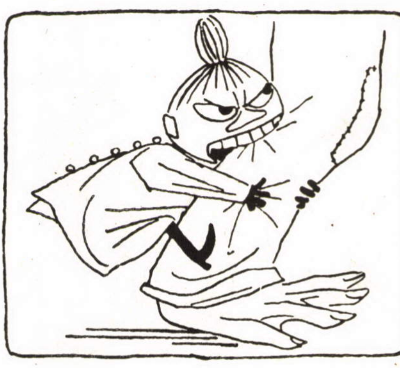
スナフキンは、フットライトのほうへ近づきながら、平気な顔でつづけました。

「考えてごらんなさい。あの公園番は、安くすむことになりますよ。電気代がいらないのです！

「ママ！」
と、だれかがさけびました。
「パパ！　ぼく、かえってきたよ！」
ヘムルが、声をあげました。
「あれっ。これはわしがつかまえたやつらじゃないか！　すぐに、つかまえろ！　こいつらが、劇場に火をつけんうちに！」
ムーミンママは、フットライトのところへ、かけよっていきました。ムーミントロールが、ボートのむきをかえようとして、海の中へ、かたほうのオールをおとしてしまったのが、ママの目にはいりました。ムーミントロールは、あわてて、もう一本のオールでこごうとしましたが、ボートは、おなじところを、ぐるぐるまわるばかりです。
ボートのうしろの場所に、やさしそうな顔をした、やせっぽちの小さいヘムルがすわっていて、なにかさけびましたが、だれの耳にもはいりませんでした。
ムーミンママがさけびました。
「おにげ！　おまわりさんがきてるよ！」
ママは、ムーミンぼうやがなにをしたのか知りませんでしたが、むすこのやったことはわるいことではないと信じてうたがいませんでした。

た。
「やあ、ムーミンママ！　ぼくのかわりに、この子たちの世話をしてくれませんか。」
芝居は、どんどん、たのしくなる一方でした。お客さんがみんな、ぼちぼちと舞台の上へあがって、芝居の中にくわわりました。ホールのテーブルにのっていた、入場料のたべものを、すっかりたべてしまうという役をしたのです。ムーミンママは、きゅうくつなスカートをぬぎすてて、いそがしく走りまわっては、コーヒー茶わんをくばっていました。
楽団は、ヘムル行進曲をやりだしました。
ムーミンパパは、大成功をよろこんで、顔をかがやかせていました。ミーサはミーサで、しあげの練習のときとそっくりに、しあわせでした。
とつぜん、ムーミンママが、舞台のまん中で足をとめたと思うと、コーヒー茶わんを、ゆかへおとしてつぶやきました。
「あの子が、くるわ！」
それと同時に、そこらがしいんとしずまりました。
暗やみの中から、しずかにオールをこぐ音が、近づいてきます。かすかにすずがチリンチリンと鳴っています。

みついたのです。
ライオンは、悲鳴をあげて、舞台のまん中でつぶれてしまいました。
ミムラねえさんが、ちびのミイをだきあげて、鼻の頭にキスするようすを、お客さんたちは見ました。そして、気がついてみると、もはやだれも詩のような調子でしゃべらないで、まったくふだんどおりに話しているのでした。そのことには、お客さんたちも、すこしも反対ではありませんでした。いまやっと、この芝居がなにをあつかったものなのか、みんなにわかってきたからなんです。
これは、洪水に流されて、いろんなおそろしいめにあったすえ、やっとじぶんの家を、もういちど、見つける人の話だったのです。いまは、みんな、すっかりうれしくなって、コーヒーをいれようとしているところでした。
「だんだん、よい芝居になってきたわい。」
と、あのヘムルが、つぶやきました。
スナフキンは、森の子どもたちを、ぜんぶ舞台へだきあげ、はじめてはればれと、さけびまし



た。
「これは、ばかげとる。わしがわかいときに見た、あのきれいな芝居と、ぜんぜんにておらん。おひめさんが、ばらのしげみの中でねむったんだったがなあ。この芝居は、どんなつもりなのか、一つもわからん。」
　スナフキンは、おびえきっている森の子どもたちに、いいきかせました。
「ほら、ほら、あのライオンは、古くなったベッドのカバーで、つくってあるだけじゃないか。」
　けれど、どの子もそんなことを信じません。目の前の舞台で、ライオンがミムラねえさんを、おいかけまわしているんですものね。ちびのミイは、けたたましく、わめきたてました。
「あたいのねえさんを、たすけて！　ライオンを、ぶちころして！」
　そして、だしぬけに、むちゅうで舞台にとびあがると、ライオンにとつげきして、そのするどい歯で、ライオンのあと足に、か



「しずかに、しずかに！　あれは、芝居の中だけのことさ。」

スナフキンは、うわのそらで、そういうのでした。

小さくてふとった女の人が、赤いベルベットをきてでてきて、とってもうれしいと、口ではいっていましたが、どこかに、いたいところがあるらしいようすでした。

そのほかにも、スナフキンの知らない人が、舞台のうらで、たえず「運命の夜」と、さけんでいました。

ムーミントロールのママが、舞台へでてくるのを見たときは、もっともっと、おどろいてしまいました。

スナフキンは考えました。

（ムーミン一家の人たちは、なにをしようというのだろう。たしかにあの人たちは、いつも、めいめいなにかの思いつきをしていたけれど、これは、いったいなんだ！　そのうちに、きっとムーミントロールもでてきて、しゃべるんだな。）

ところが、ムーミントロールは、でてきませんでした。そのかわり、ライオンが舞台へあらわれて、ほえました。

森の子どもたちがなきわめき、ボートはもうすこしで、てんぷくしてしまうところでした。

おまわりさんのぼうしをかぶったヘムルが、すぐそばのボートにのっていて、文句をいいまし

「ぼくにつかまってれば、だいじょうぶだよ。ほらね、いま幕があくよ。」
と、スナフキン。
息をのんでいるお客たちの前に、岩山の風景があらわれました。
右のほうに、ミムラねえさんが、うすぎぬのドレスに紙の花をつけて、すわっています。ちびのミイが、ぼうしのふちからのりだして、いいました。
「あれが、あたいのねえさんでなかったら、あたい、くびをやるわよ。」
「あんたは、ミムラさんと、きょうだいなのか？」
と、スナフキンが、おどろいてたずねました。
「あたい、ずっと、ねえさんのことを話してたじゃないの。ちっとも、きいていなかったの？」
ちびのミイは、あきれていいました。
スナフキンは、じっと舞台を見つめました。パイプの火も、きえてしまっていました。ムーミンパパが、左のほうからでてきて、たくさんの親類やライオンについて、なにかおかしなことを、しゃべりました。
とつぜん、ちびのミイがスナフキンのひざの上へとびおりて、ぷりぷりしながら、いいました。
「どうして、ムーミンパパが、あたいのねえさんに、おこってるの？　あの人は、ねえさんに、いじわるできるはずがないのに！」

いるものは、ひとりもありません。みんな、あかるくてらされた舞台の幕を、ながめていました。

そこへ、すこし年とったヘムルが、ひとり、ボートをこぎよせていいました。

「入場料をいただきます。」

スナフキンは、豆のはいった小だるを、もちあげました。

「これが、みなさんの入場料ですか。」

ヘムルは、こういって、子どもたちの数を、かぞえだしました。

スナフキンは、心配になってきました。

「これじゃ、たりませんか。」

「すこし、多すぎますよ。ものごとは、きちんとしなくちゃね。」

ヘムルはこういって、じぶんのおけに、豆をいっぱいいれました。

そのとき、楽団も音楽をやめ、みんながいっせいに手をたたきました。

まったく、しずかになりました。

そのしずかさの中に、幕のうしろで、ゆかを三回、ドンドンドンと、つよくうつ音がきこえました。

「ぼく、こわいよ。」

いちばん小さな子が、スナフキンのそでをつかんで、そっといいました。

古いぼうしの一つだったのです。）スナフキンは、においもかいでみました。

「日曜日にすう、きいちごの葉っぱですよ！」

と、いちばん小さな子が、鼻を高くしてさけびました。

スナフキンは、ひとりびとりに握手して、お礼をいいました。

「わたしは、ししゅうはしなかったわ。だけど、それは、わたしの思いつきなのよ！」

と、ちびのミイが、ぼうしの上からいいました。

ボートが、劇場のフットライトの下へすべりこむと、ちびのミイはおどろいて、顔をゆがめました。

「劇場って、どれでも、みんなおなじなの？」

「そうだと思うね。」

と、スナフキンが答えました。

「芝居がはじまると、あの幕があくんだ。そしたら、おとなしくしなきゃだめだぜ。なにか、おそろしいことがおこっても、海の中へころげおちるなよ。そして、すっかりおわったら、みんなで手をたたいて、芝居がよかったことを、しめすんだ。」

森の子どもたちは、かたずをのんで、見つめていました。

スナフキンは、そっと、あたりのようすをうかがいました。けれども、こちらを見てわらって

をやっていました。

　おだやかな、うつくしい晩でした。

　スナフキンは、二つかみの豆でボートをかりて、劇場へむかいました。

　とちゅうまできたときに、

「スナフキンおじさん！」

と、いちばん大きな子がよびました。

「なんだい。」

と、スナフキンがへんじをすると、

「ぼくたち、ここにおじさんへのプレゼントを、もっているんです。」

　こういって、森の子どもは、まっかになってしまいました。

　スナフキンは、こぐのをやめて、口からパイプをはなしました。

　その、いちばん大きな子は、せなかのうしろにかくしていた、なんともいえない色をした、しわくちゃのものを、さしだしました。

「これ、たばこ入れです。ぼくたち、みんなで、ししゅうしたの、こっそりと！」

　その子は、もぐもぐと口の中でいうのでした。

　スナフキンは、プレゼントをうけとって、中をのぞきこみました。（それはフィリフヨンカの

と、スナフキンはいいました。

ぜんぶのズボンと服を、やっとのことで、きれいにしおわったときには、もう日が西にしずもうとしていました。いうまでもなく、タールは、まだ、たくさんついていました。だけど、すこしはきれいになって、スナフキンが、さんざん苦労したことだけは、わかりました。

みんなは、すっかりわくわくしながら、一方また、かしこまったようすで、もみの木湾へでかけました。

スナフキンが、豆のはいった小だるをかかえて、先頭にたち、森の子どもたちが、ふたりずつ手をつないで、そのうしろについていきました。みんな、まゆのところから、しっぽのところまでもとどく毛を、きちんと、まん中でわけています。

ちびのミイは、スナフキンのぼうしの上にすわって、歌をうたっていました。夜おそくには、さむくなりそうなので、なべづかみに、くるまっていました。

浜べへおりていくと、芝居の初日らしいにぎやかさが、あふれているのに、すぐ気がつきました。もみの木湾のそこらじゅうに、船がいっぱいいて、どれもこれも、劇場のほうへむかっていました。

ヘムルの有志が、楽団をつくって、フットライトの下の船で、あかりにてらされながら、音楽

ほかの子どもたちが、さけびました。

スナフキンは、みんなの顔を見て、劇場へつれていかねばならないのを、さとったのでした。

（まあ、あの小だるの豆で、入場料ははらえるだろうな。あれで、たりるといいが——ずいぶん、たべちゃったからなあ。この二十四人の子どもたちを、みんな、ぼくの子だと思わないでほしいよ。……どうも、かってがちがうな。それはそうと、あしたは、この子たちに、なにをたべさせたら、いいだろう。）

スナフキンは、そう考えて、心をいためていました。

「劇場へいくのが、うれしくないの？」

いちばん小さな子が、スナフキンのズボンに鼻をすりよせて、たずねました。

「ものすごく、うれしいさ。このあまえっ子め。」

と、スナフキンはいって、

「それじゃ、みんな、きれいにしよう。うん、なんとか、いまよりきれいにだな。おまえたち、ハンカチをもってるかい？　これは、かわいそうな劇なんだよ。」

ハンカチをもっている子はいませんでした。

「まあいいや。シュミーズで、なみだをふくことだね。それとも、なにか、いまもってるものでね。」

と、苦心しました。
「声をだして、読んで！」
と、森の子どもたちは、さけびました。
　スナフキンが、読みました。
「一幕劇。ライオンの花よめたち、または……（ここは、一まいなくなったらしいな。）入場料……たべられるものなら、なんでもよろしい。……（ええと。）……今晩、日のしずむ……（日のしずむころ、だな。）……風や雨がなければ（なかなか、うまくいったぞ。）……定……るころ……（いや、どうもいかん。）……もみの木湾のまん中。」
「ふうん、そうか。」
といって、スナフキンは顔をあげました。
「おい、いたずら小僧たち。これはね、手紙じゃなくて――その、劇場のびらだよ。今晩、もみの木湾で、だれかが劇をやることは、たしかだよ。どうして、海の上でやるのかは、神さまだけがごぞんじさ。まあ、芝居の中で、海の波が必要なんだろう。」
「子どもが見たら、いけない芝居？」
と、いちばん小さな子が、たずねました。
「ほんとうのライオンが、でてくるの？　はやく見にいこうよ！」

ぎれてしまったのです。おまけに、なんまいかはえんとつの中へおちて、もえてしまいました。
「手紙がきたよ!」
森の子どもたちは、そうさけびながら、屋根からすべりおりたり、とびおりたり、ころげおちたりしながら、おじさんのところへ走っていきました。
スナフキンは、家のかどで、みんなのくつしたをあらっていましたが、こういいました。
「ばかなやつらだなあ! けさ、屋根にタールをぬったのを、みんな、わすれてしまったのか? おまえたちをすてて、海へとびこんじゃうか、おまえたちをぶちころすか、ぼくに、そんなことをしてほしいのか。」
「どっちもいやだあい!」
森の子どもたちは、大声をあげて、スナフキンの上着を、ひっぱりました。
「この手紙をお読みよ。」
「手紙って、たくさんあるんだな。」
そういって、スナフキンは、いちばん近くにいた子どもの毛で、シャボンのあわをぬぐいました。
「どれどれ。この手紙は、おもしろそうだな。はじめは、なにが書いてあったのかな。」
スナフキンは、しわくちゃの紙きれを、草の上にひろげて、びらののこりをつなぎあわそう

# 第12章



## ゆめのような初日興行

小さなヘムルが、じぶんの家でお茶をごちそうしていたあいだも、なんまいかの劇場のちらしが、森のほうぼうにひっかかって、ひらひらしつづけていたのです。その中の一まいが、ふわりと、あき地へおちてきて、タールをぬったばかりの屋根に、くっつきました。

二十四人の小さな子どもたちは、すぐさま、そのちらしをひろいに、屋根の上へよじのぼりました。どの子も、じぶんこそスナフキンおじさんに、飛行びらをわたす役になりたいと思いました。びらは、うすっぺらな紙でしたから、あっというまに、二十四まいの小さな小さな紙きれにち

いいました。
「いとこが、すごくがっかりしちゃうわ。」
「でも、わたしたち、なにもわるいことをしてないのよ！」
と、フィリフヨンカが、声をはりあげました。
「どうして、それを、すぐにいわなかったの。」
小さなヘムルは、ほっとしたように、こういったのでした。
「だったら、もちろん、劇場へいくほうがいいわ。でも、わたしがいっしょにいって、いとこに、すっかり話すのがよさそうね。」



りました。とうとうスノークのおじょうさんが、
「ざんねんだけど、わたしたち、もうかえらなくちゃ。お茶を、どうもごちそうさま。」
といってたちあがったときは、もう夕ぐれになっていました。
「あなたたちを、また、ろうやへいれなきゃならないのは、ほんとにかなしいわ。」
小さなヘムルは、あやまるようにいって、くぎにかけたかぎを、手にとりました。
「だけどね、ぼくたち、ろうやへかえるつもりはないんだよ。劇場(げきじょう)のうちへ、かえろうと思うんだ。」
こう、ムーミントロールが、口をだしました。
小さなヘムルは、目になみだをうかべて、



小さなヘムルは、長いあいだ、まよっていました。あみものを、鼻におしつけて、三人の顔をじっと見つめていました。

「もし、あなたたちが死んじゃったら……。」

その声は、ふるえていました。

「もし、あなたたちが死んじゃったら、いとこにはもう、見はりをするたのしみが、なくなっちゃうのね？」

「そうだと思うわ。」

と、フィリフヨンカがいいました。

「とにかく、わたし、上ばきをつくるのに、あなたたちの足の寸法を、はからなくちゃ。」

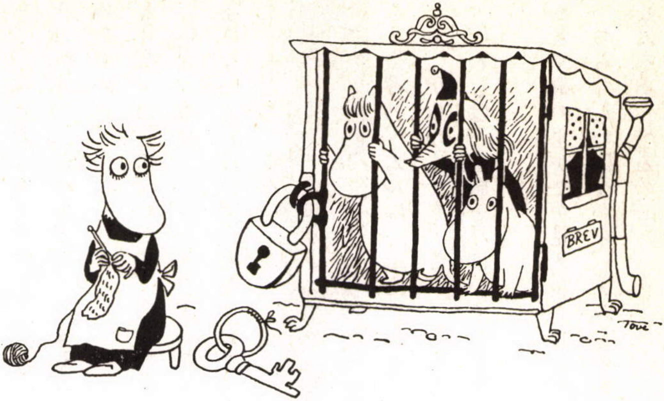
三人は、まっていましたとばかりに、大きくうなずきました。

すると、その小さなヘムルは、鉄ごうしをあけて、おずおずといいました。

「あついお茶を、ごちそうしてもいいでしょ？ ぶどうジュースをいれて……。上ばきは、できあがったらすぐあげるわ。上ばきのことを思いついてくれて、とってもうれしいの！ わたしの気持ちを、わかってくださるんだもの。あみものをするのにも、はりあいがあるわ。」

それから、みんなで、小さなヘムルの家へいって、お茶をのみました。そのヘムルは、これからビスケットをたくさん焼いてあげる、といってききません。そのためには、うんと時間がかか

しがよすぎるんだって。劇場にいるのは、おそろしいことね！」
「ここだって、風とおしがよすぎるぜ。」
と、ムーミントロールがいいました。
小さなヘムルはいいました。
「わたしのいとこは、それを考えなきゃいけなかったんだわ。ちょっとまっててね。あんたたちに、上ばきをあんであげるから。」
「できるまでまってたら、ぼくたち、こごえ死んじゃうな。」
と、ムーミントロールは、顔をくもらせました。
小さなヘムルは、心配そうなようすで、そろそろと鉄ごうしに近づいてきて、いいました。
「この上へ、毛布をつるしたら、どうかしら。」
三人はかたをすくめると、ぶるぶるふるえながら、身をよせあいました。
小さなヘムルは、びっくりしてたずねました。
「ほんとに、そんなにさむいの？」
スノークのおじょうさんは、ゴホンゴホンとせきをして、いいました。
「ぶどうジュースのはいった紅茶を、コップに一ぱいのめば、なおるかもしれないわ。よくわからないけど。」




スノークのおじょうさんが、やさしく声をかけました。

小さなヘムルは、びくっとして、心ぼそそうにつぶやきました。

「じぶんでもわからないの。でも、あみものしてると、いつも、気分がよくなるのよ。」

「それ、上ばきにできないかしら？　上ばきに、とってもいい色だけど。」

と、スノークのおじょうさんが教えました。

小さなヘムルは、あみあげたものを見て、考えました。

「知りあいに足のつめたい人はいらっしゃらないの？」

と、フィリフヨンカがたずねました。

「ええ、お友だちに、ひとりいるわ。」

するとフィリフヨンカが、したしそうにつづけました。

「わたしも、足をさむがる人を、ひとり知ってるのよ。劇場にいるわたしのおばなの。そこは、とっても風とお

てちゃったとたんによ！」

そこへ、ヘムルがもどってきました。おどおどしたようすの、すごく小さいやせっぽちのヘムルのむすめを、つれていました。

「どうだ、わしのかわりに、こいつらを見はってられるかな？」

と、ろうや番のヘムルがききました。

小さなヘムルは、そっとたずねました。

「この人たち、かみつく？」

と、小声でいってこまりきった顔をしました。これじゃ、とても役にはたたないでしょう。といっても、それはヘムルの立場からの話ですけれどね。

ろうや番のヘムルは、ふんと鼻を鳴らして、ろうやのかぎを、むすめにわたしました。

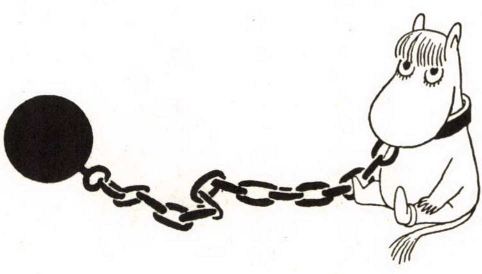
「ふん、かみつくとも。こいつらを外へだしたら、おまえのはらへ、がぶりとかみつくぞ。それじゃ、わしは、芝居を見にいくしたくをしてくるからな。あばよ！」

ろうや番のすがたが見えなくなると、すぐに小さなヘムルは、おびえた目を、ろうやのほうへ、ちらちらむけながら、あみものをはじめました。

「なにをあんでるの。」

ムーミントロールが、口をだしました。
「だけどねえ。あの劇場へいかなかったら、あなたは、一生、後悔しますよ。きっと、おひめさまがでてきますね。『ライオンの花よめたち』というんだもの。」
ヘムルはかたをすくめて、ためいきをつきました。
スノークのおじょうさんが、いいきかせました。
「いまは、よく考えなきゃ、だめよ。そのいとこを、ここへつれていらっしゃいよ。そしたら、あたしたち、見てあげるわ。しんせつなろうや番でも、だれもいないよりは、ましよ！」
「そうだな。」
と、ヘムルは、むずかしい顔でいいました。それからたちあがると、しげみのあいだへ、のしのしときえていきました。
「ほら！　夏まつりのイブに、ゆめを見たこと、おぼえているかい。ライオンのゆめだったじゃないか！　大きなライオンが、ミイ子ちゃんに、足をかみつかれたんだ！　だけど、家じゃ、みんな、なんてことをおっぱじめたんだ！」
と、ムーミントロールがいいました。
フィリフヨンカが、口をはさみました。
「わたしは、あたらしい親類が、うんとできたゆめを見たの。おそろしいわ！　古い親類を、す

と、スノークのおじょうさんがいいました。
「うん、いとこがおる。だが、あの子はあんまりしんせつすぎるわい。おまえらを、外へだしてしまいよるかもしれん。」
と、ろうや番はいいました。
「わたしたち、いつ、死刑にされるんです？」
と、フィリフヨンカがだしぬけにいいました。
「ううむ。おまえらは、死刑にされはせん。」
と、ろうや番のヘムルは、こまったようにいいました。
「おまえらは、じぶんのおかした罪を白状するまでは、ここにはいっておらねばならん。それから、あたらしいたてふだをつくって、『するべからず』と、五千回ずつ書かねばならんのじゃ。」
「だけど、わたしたち、なんにもわるいことをしてませんよ。」
フィリフヨンカが、いいはじめました。
「うん、うん。それは、きいたさ。どんなやつでも、そういいよる。」
と、ヘムルはいいました。



だけど、そのあいだ、だれがろうやの見はりをしたら、いいでしょうか。

手のあいているヘムルを、ひとりも知らないのです。このかわいそうなろうや番は、あれこれと、しあんしました。すぐうしろの、ろうやの鉄ごうしに、鼻をおしつけて、ろうや番はいいました。

「わしは今晩、劇場へいきとうて、たまらんわい。」

「劇場！」

そういって、ムーミントロールは、耳をぴんとたてました。

「うん、『ライオンの花よめたち』というんだ。しかし、だれにおまえらを見はってもらってたらいいか、わからんのでなあ。」

ヘムルはこういって、宣伝びらをろうやの中へ、さしいれました。

ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、劇場のちらしを見て、顔を見あわせました。

「きっと、おひめさんたちの話なんだ。わしが、かわいいおひめさんを見たのは、もう、おそろしくむかしのことだなあ！」

と、ヘムルは、さもつらそうにいうのでした。

「だったら、ぜったい、見にいかなくちゃならないわよ。あなたの親類に、そのあいだ、わたしたちの見はりをしてくれるような、しんせつな人はいないの？」

歌…エンマ

入場料

たべられるものなら、なんでもよろしい。

風や雨がなければ、今晩、日がしずむときにはじめ、子どもがねるころに、おわる予定。

場所は、もみの木湾のまん中。ヘムルたちがかしボート屋をします。

劇場主

「劇場だと？」

ヘムルは、考えこんでそういうと、めがねをはずしました。いままでねむっていた、ヘムルらしくない心のおくに、子どもの日の思い出の火が、かすかにともされたのです。そうでした。一ど、おばさんにつれられて、劇場へいったことがありました。ばらのしげみの中でねむっている、おひめさまの話でした。とってもきれいで、ヘムルは、大すきだと、思ったものでした。

きゅうにヘムルは、じぶんがもういちど、劇場へいきたくなっているのを知りました。

ヘムルは、はっとして、その宣伝びらをひろいあげました。
いまは、三人もの罪人を、ろうやにいれてあるのです。このヘムルが勉強して、ろうや番の資格をとってから、いまがいちばん、ろうやにいれられている人間の数が多かったのです。もう二年近くも、だれひとり、ろうやへいれられたものは、ありませんでした。だから、三人もの罪人のことを、どれだけ番人が気にかけていたか、だれにだって、わかるでしょう。
ヘムルは、めがねをかけると、ひとりで声をだして、びらを読みだしました。
「さあてと。なに、初日興行！」
それから、読みつづけました。

**〝ライオンの花よめたち〟**

――〝血のつながり〟

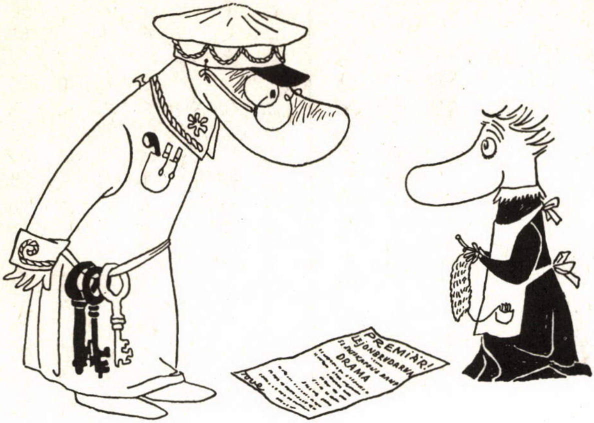
**一幕劇**　ムーミンパパ・作

**出　演**

ムーミンママ　ムーミンパパ

ミムラねえさん　ミーサとホムサ

# 第11章




## ろうや番をだます

あくる日の朝、宣伝びらが、くばられました。鳥という鳥が、もみの木湾をとびまわって、劇場の広告をまいたのです。ホムサとミムラねえさんが色をぬっておいた、あざやかなちらしは、森や海岸や草原の上にも、水の中にも、家々の屋根や庭の上にも、まいおちました。

その一まいが、ろうやの上へとんできて、ヘムルの前におちました。ヘムルは、おまわりさんのぼうしを鼻の上までずりおろして、日ざしの中でうとうといねむりをしていたのです。

「ははあん、こいつは、ろうやへいれられた罪人どもへ、ひみつの通信がきたらしいぞ。」

をこぎだしたのです。
「おわりじゃないですよ、まだ！」
と、ムーミンパパは、大声でどなりました。
「あなた。まだ、あしたがありますわ。」
と、ムーミンママはいいました。
「エンマさんがいうには、しあげの練習が、すこしでも失敗だったら、初日はきっとうまくいかないんですって。」
「そうか、エンマがそういってるのか？」
と、ムーミンパパは、おちつきはらっていました。
　そして、上きげんで、つけくわえるのでした。
「とにかく、みんな、なん回もわらってたぞ！」
　けれどもミーサは、ほかの人たちからすこしはなれて、どきどきと鳴っているむねをしずめようとしていました。かの女は、そっとじぶんにいいきかせるのでした。
「みんな、わたしに拍手を送ってくれたわ。ああ、このしあわせ！　これからは、いつまでも、そう、いつまでだって、こんなにしあわせでいられるんだわ。」



ムーミンパパが、心配そうにムーミンママの顔を見ました。
「ライオンをださせなさいよ。」
と、ムーミンママがたすけぶねをだしました。
「ライオンをだせ！」
と、ムーミンパパがくりかえしました。
それでもムーミンパパは、まだ安心できなくて、
「ライオンをだせ！」
と、もういちどいって、とうとうさいごには、
「ライオンをつれてこい！」
と、どなってしまいました。
舞台のうらで、すごい足音がして、やっと、ライオンがでてきました。
一ぴきのビーバーが、ライオンの前足になり、もう一ぴきがあと足になっているのです。お客さんたちは大よろこびで、がやがやいいました。
ライオンはぐずぐずしていましたが、フットライトのところへでてきておじぎして、それから中央へもどりました。
すると、お客さんたちが、パチパチと手をたたいたかと思うと、じぶんたちの家のほうへ、船

「さあ、ママ。はやく舞台へついてきておくれ！」
ムーミンママは、あわててスカートをつまむと、にこやかに、そして、すこしはずかしそうに、登場しました。
「おお運命よ、顔をおかくし！　わたしは、くらいくらい知らせをもってきたのだから。」
ムーミンママは、ほがらかにはじめました。
「あなたのむすこは、うらぎって家出してしまいました！　あなたの心を、うそでぬりかためたまま！」

「運命の夜
運命の夜
運命の夜じゃ！」

と、エンマがうたいました。

ミーサが、おしころした声で、やりはじめました。

「おお、なんと、うれしいことか！　おまえのくびが、くだかれるのを見て……。」

ミーサは、あらあらしく歩いたとたんに、ベルベットのドレスに足をとられ、フットライトをとびこして、はりねずみの小船の中へ、ころげおちました。

お客さんたちは、声をあげてよろこび、ミーサを、舞台へおしあげました。

「おじょうさん、まあ、おちつくことですよ。あいつのくびを、さっそく、はねてしまいなさい！」

と、すこし年とったビーバーがいいました。

ミーサは、おどろいてたずねました。

「だれのくびを？」

「あんたのまごのおばさんのくびさ、もちろん。」

ビーバーは、きげんよくいいました。

「わかっちゃおらんな、なんにも。」

と、ムーミンパパが、ムーミンママにささやきました。



あいだ、両手を目の上にあてて、じっとたったまま、プリマドンナになると、どんな気持ちがするものか、あじわいました。それは、すばらしいものでした。

ムーミンママは、ミーサがあがってしまったのだと思いこんで、小さい声で教えました。

「おお、なんと、うれしいことか、というのよ。」

「効果をあげるために、わたし、だまってるの！」

ミーサも、そっといいました。そして、フットライトのほうへよろめいていき、お客さんにむかって、両手をさしのばしたのでした。

「カチッ」と音がして、ホムサが、照明室の送風器をまわしました。

「あそこに、電気掃除機があるの？」

と、はりねずみの子どもがききました。

「しゃべっては、いけません！」

はりねずみのママはいいました。

をあらあらしくゆさぶり、ひもじさの中で、月にほえているわい！」

長いあいだ、しいんとした沈黙がつづきました。

「……月にほえているわい！」

と、ムーミンパパは大きな声でくりかえしました。

しかし、なんにもおこりません。

そこで、左がわをのぞきこんで、ムーミンパパはききました。

「なぜ、ライオンはほえないんだ？」

「ホムサが、お月さんをつりあげんことにゃ、わしはほえられんわい。」

と、エンマがいいました。

ホムサは、背景の中から顔をつきだして、こういいました。

「ミーサが、お月さまをつくるやくそくをしながら、つくらなかったのですよ。」

ムーミンパパは、あわてていいました。

「わかった、わかった。さあ、はやく、ミーサが舞台へでてくれ。とにかく、わしは気分がのらなくなったからな。」

ミーサは、赤いベルベットのドレスをきて、舞台の上を、しずしずとすすみました。しばらくの

使命とあれば　たたねばならぬ
ああ　いまは　わが王のくらいも
まごの姉妹の手に　うばわれるのか？」

ムーミンパパは、いいまちがえたのに気がついて、やりなおしました。

「ああ　いまは　わが王のくらいも
まごのおばの手に　うばわれるのか？」

ムーミンママが、そっと顔をだして、ささやきました。
「わが王のくらいも、むすこのよめの姉妹の手に、うばわれるか、ですよ！」
「そう、そう、わかってる。あそこは、もうとばすよ。」
ムーミンパパは、そういうと、鏡台のうしろにかくれているミムラねえさんのほうへ、一歩近づいていいました。

「このうらぎりもののミムラめ、ふるえおるか！　きけ、あのおそろしきライオンが、おり

わかき日のつゆをいだいた　このわたしは
うごかせぬ運命に
ようしゃなく　ひしがれていく」

とつぜん、エンマのしわがれた歌声が、背景の中にきこえました。

「運命の夜
運命の夜
運命の夜じゃ！」

ムーミンパパが、かたにマントをひっかけて、左がわからでてきました。そして、お客さんのほうへむきなおると、ふるえる声をはりあげました。

「血のつながりも　友との仲も



りかえりました。エンマのしなびたからだの中を、幸福な思いがつっぱしりました。かの女は、力をこめて、幕をまきあげました。

しあげの練習を見にきていた、まばらなお客さんたちが、感心して、ささやきあいました。たいていのお客さんは、いままで劇場へいったことなんか、一どもない人たちだったのです。

赤い照明にてらされて、ごつごつした岩山の風景が見えました。

黒いカバーのかかった鏡台のすこし右手に、ミムラねえさんがうすぎぬのスカートをはいて、すわっています。頭のまげのまわりに、紙でできた花を、いくつもかざっていました。

ミムラねえさんは、下にいるお客さんたちのほうを、おもしろそうにしばらくながめてから、早口でさばさばといいはじめました。

「天にそむく罪もないのに
今夜　死なねばならぬなら
高らかにさけびましょう
海よ　血にかわっておしまい
地よ　花さかず　灰になっておしまい
つぼみゆたかなばらのように　うつくしく

した。

「これじゃ、陽気すぎます！　わたしに、ちっともにあわないわ！」

　すると、エンマが、きびしくいいました。

「ミーサ、しずかに！　さあ、はじめますよ。照明の用意は、よいかのう？」

　ホムサが、黄色い照明をつけました。

「赤よ！　赤よ！　わたしがでてくるときは、赤だわ！　どうして、あの人、いつでも、まちがうのかしら。」

と、ミムラねえさんがさけびました。

　でもエンマは、

「だれとて、まちがいはするわい。みんな、よいかのう？」

と、おちついたものです。

「わしは、じぶんのせりふが、いえん。ひとことも、思いだせないんだ！」

　ムーミンパパが、うろたえて、口ばしりました。

　エンマが、パパのかたをたたいて、いいました。

「かまわん、かまわん。しあげの練習にはいりゃ、なんでもが、きちんとうまくいくもんじゃよ。」

　エンマが、舞台のゆかを三回、ドンドンドンとたたくと、外の小船の人たちはしいんとしずま

と、ホムサがいいました。
「そんなことは、みんな、どうでもいいんだ。それよりか、芝居そのものが、ぜんぜんだめなんだ！」
と、ムーミンパパはいいました。
するとエンマが、思いがけないことに、ものわかりのいいところを見せました。
「もうこうなりゃ、くそおちつきに、おちつくことさ。そしたら、ひとりでに、うまくいくわい。それにな、お客ちゅうもんは、なんにもわからんのじゃ。」
「ねえ、エンマさん。ドレスが、わたしには小さすぎて……ずっと、せなかでずりあがっちまうんですよ。」
と、ムーミンママが、うったえました。
エンマは、安全ピンをたくさん口にくわえたままで、こういいました。
「よう、おぼえとくのじゃよ。おまえさんは、うそでぬりかためとったむすこのことを、舞台でしゃべるときに、うれしそうな顔をするでないど！」
「ええ、きっとかなしそうな顔をしますわ。」
と、ムーミンママは答えました。
ミーサは、じぶんの役のところを読んでいましたが、きゅうに本をほうりだして、声をあげま

　ムーミンパパは、いらいらしてどなりました。
「わかった、わかった。ライオンは、あんたをくいころして、それから、ミーサをたべちゃうんだ。しかしな、じゃましないでくれ！　わしは、ヘクサメーターを考えてるんだから！」
「親類の関係は、どうなるんです？」
と、ムーミンママは、そのことが心配そうでした。
「きのうは、家出したあなたのむすこと、ミムラさんが、結婚したんですよ。いまじゃ、ミーサなんですか、むすこと結婚するのは？　そして、わたしは、ミーサの母親なの？　ミムラさんは、ミスでいるわけ？」
「わたし、結婚しないでいるのは、いやよ。」
と、ミムラねえさんは、すぐにいいました。
「ふたりは、きょうだいになったらいいんだ！」
　ムーミンパパが、やけっぱちで、どなりました。
「だから、ミムラさんは、おまえのむすこのよめだ。わしにとってもな。つまり、おまえのおばってわけだ。」
「そうはいきません。ムーミンママが、あなたのおくさんだったら、あなたのむすこのよめが、ママのおばさんになるはずがありませんよ。」

ました。それらの小船の人たちは、日の出からまちうけていて、晩ごはんの用意もしてきていました。しあげの練習というものは、いつも、時間がかかりますからね。

「ママ、しあげの練習って、なあに。」

と、小船の中で、びんぼうなはりねずみの子が、ききました。

「それはね、役者さんが、いちばんしまいのけいこをして、ぜんぶちゃんとできるってことを、たしかめることよ。あしたは、ほんとに劇をやるから、見るのにお金がいるの。きょうは、わたしたちみたいなびんぼうなはりねずみのために、ただなのよ。」

はりねずみのおかあさんは、こういって説明しました。

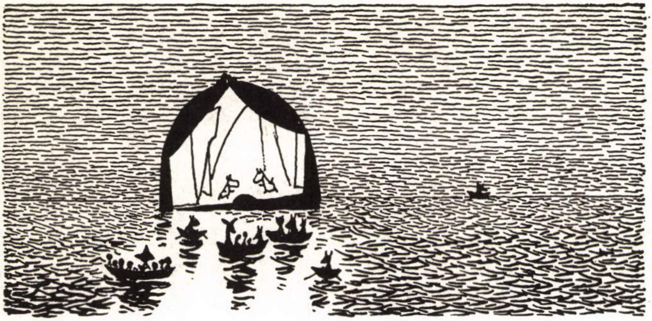
けれども、幕のうしろにいた人たちは、ひとりだって、ちゃんとできるという自信がなかったのです。ムーミンパパは、いっしょうけんめいに、芝居を書きなおしていました。

ミーサは、ないていました。

「でも、わたしたちふたりとも、しまいに死にたいって、いったじゃないの！　どうして、ミーサだけが、ライオンにたべられちゃうのよ？　ライオンの花よめたちといっといたでしょ。おぼえてないの？」

と、ミムラねえさんがいいました。

# 第10章



## 劇の練習

ムーミンパパの芝居の、しあげの練習の日がきました。日がくれるまでには、まだだいぶ時間があるというのに、ランプというランプが、ともっていました。

あくる日の初日興行に、無料の入場券をだすというやくそくで、ビーバーたちが劇場をおしあげて、いくらかまっすぐになおしました。けれども、舞台はやはりすこしかたむいていて、ちょっと、やっかいでした。

舞台の前には、赤い幕がつりさげられていて、なにかひみつをつつんでいるようでした。外には、ものずきな小船が、いくつか、むらがってい

だけど、フィリフヨンカは、じぶんの家にお客がきているなんて、ゆめにも知らなかったのです。かの女は、法律にそむいたというので、ろうやへいれられていましたからね。



た。ゆげをたてている豆が、大ざらにいっぱい、テーブルのまん中にでていて、外では、どんよりくもった空から、雨がびしょびしょふっていました。

みんなは、屋根を流れおちるしずくの音と、パチパチともえる火の音をきいていました。

「やれやれ、おまえたち、どんな気持ちがするね？　あのすな場で、あそびたいものがいるかい？」

と、スナフキンがいいました。

森の子どもたちは、スナフキンを見て、わらいました。それから、みんな、フィリフヨンカのいんげんまめをたべはじめました。

前に、あき地がぽっかりとひらけたのです。あき地のまん中には、小さな家がたっていて、えんとつと門柱のまわりに、色あせたかざりのテープがつってありました。スナフキンは、よろよろと、そこの戸口にたどりつくと、ドアをノックしてまちました。

だれも、あけにきません。

もういちど、ノックしました。やはり、へんじがありません。そこで、ドアをおしあけて、その小さな家の中へはいりました。だれも、家にはいませんでした。テーブルの上の花も、色あせているし、とけいはとまっていました。

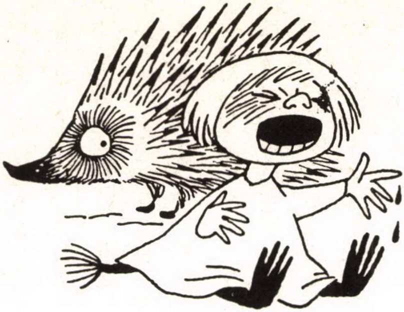
スナフキンは、子どもたちをおろすと、ひえきったストーブのところへ近づきました。そこは、フィリフヨンカのパンケーキが、のっかっていたところなんです。スナフキンは、たべものべやのほうへ歩いていきました。子どもたちは、だまって、見おくっていました。

しばらくは、しいんとしていました。やがて、スナフキンがもどってきて、豆のはいった小さなたるを、テーブルの上へおきました。

「さあ、みんな、おなかいっぱい、豆をおあがり。ぼくはしばらくここにいて、みんなの名まえをおぼえながら、いっぷくすることにしたからね。ぼくのパイプに、火をつけておくれ！」

子どもたちは、みんな、あらそって火をつけにいきました。

そのうちに、ストーブに火がもえてきたので、服やズボンをぜんぶつるして、かわかしまし



「そんなことやったって、どうにもならないわよ。」

と、ちびのミイがいいました。

みんな、歩きに歩きました。

雨は、ふりにふりました。

森の子どもたちは、くしゃみをしたり、くつをなくしたり、どうしてパンをもらえないのか、とたずねたりしました。中には、けんかして、とっくみあいをはじめる子どももいました。ひとりが、もみの木の葉を、いっぱい鼻につめこんだかと思うと、ひとりは、はりねずみにつきさされてしまいました。

スナフキンは、いまさらながら、公園番のおかみさんを、かわいそうに思いだしたくらいでした。それでも、ひとりの子を、ぼうしの上にすわらせ、ふたりをかたにのせ、もうふたりを両手にかかえて、こけもものしげみのあいだを、びしょぬれになり、うちのめされたようになって、つまずきながら、歩いていきました。

みんなのかなしみが、最高になったちょうどそのとき、目の

「雨がふってる。」
と、ひとりの子がいいました。
「おなかが、すいたよ。」
と、もうひとりの子がいいました。
スナフキンは、こまりきって、ちびのミイの顔を見ました。
「モランのことをいって、おどかしなさいよ！　わたしのねえさんは、そうするわ。」
と、ちびのミイが教えました。
「それで、あんたは、おとなしくなるかい。」
「もちろん、ならないわよ！」
と、ちびのミイはころげまわって、わらいました。
スナフキンは、ためいきをつきました。
「おいで、おいで。さあ、みんな、おきるんだよ、はやく！　いいもの見せてやるからな。」
「なにを、見せてくれるの。」
と、森の子どもたちは、たずねました。
「いいもの……。」
スナフキンは、あいまいにいって、手をかざして見せました。

の中へはいって、おしゃべりをして……。）

そのとたんに、ひとりの子が、なにかこわいゆめを見て、なきだしました。ほかの子どもたちも、みんな目をさまして、同情してなきさけびました。

「おお、よしよし。あばばのばあ、ぷるぷるぷる！」

と、スナフキンがいいました。

だめです。なんのききめもありません。

「この子たちは、あんたのこと、おもしろいと思わないのよ。」

と、ちびのミイが説明しました。

「わたしのねえさんみたいにするのがいいわ。なきやまないと、たたきころしちゃうぞ！　っていうのよ。そのあとであやまって、キャンデーをやるの。」

「そうすりゃ、ききめがあるかい？」

「ないわ。」

と、ちびのミイはいいました。

スナフキンは、もみの木小屋をもちあげて、ねずの木の林の中へ、なげこみました。

「用がなくなっちまったら、家はこうするのさ。」

森の子どもたちは、すぐになきやんで、しとしとふる雨の中で、顔をしかめました。

（あれが、かぶらばたけだったらいいのになあ。）
と、こんなことを考えて、むねがしめつけられるのでした。
（親ともなれば、こんなふうになってしまうんだなあ。きょうは、あの子たちに、なにをたべさせたものだろう？　ちびのミイは、豆がすこしあればそれでいいけれど、あの子どもたちは、ぼくのリュックサックをからっぽにしちゃうぞ！）
　スナフキンは、こんなことを考えて、うしろをふりかえると、こけの上でねむっている森の子どもたちの顔を、しみじみとながめるのでした。
「もうじき、あの子たちは、雨でかぜをひいてしまうぞ。だけど、それよりも、もっとこまったことになるかもしれん。あの子たちをたのしませるものは、たぶん、なんにも見つけられまい。あの子たちは、たばこもすわないし、ぼくの話は、みんなをこわがらせてしまう。そうかといって、一日じゅう、さかだちしてやってるひまはないしな。そんなことをしていたら、夏がおわるまでに、ムーミン谷へかえれなくなっちゃうもの。ああ、ムーミンママが、あの子たちのめんどうを見てくれたら、ほんとにたすかるんだがなあ。」
　スナフキンは、くらい気持ちで、そんなひとりごとをいいました。そのうちに、きゅうになつかしさがこみあげて、考えました。
（ムーミントロール！　また、月の光をあびて、いっしょにおよごうね。そのあとで、ほらあな

# 第9章



## ふしあわせなパパ

　ムーミンパパが、あのお芝居を書いた日、そして、ムーミントロールが、ろうやへいれられてしまった日のことです。そのおなじ日に、スナフキンは、もみの木小屋の中へおちてくる雨のために、目をさましたのでした。

　スナフキンは、二十四人の小さな子どもたちをおこさないように、うんと気をつけて、雨にぬれている森をながめました。

　外には、きれいなみどり色のしだの中に、白い星のような花がいちめんにさいて、花のじゅうたんのようにひろがっていました。けれども、スナフキンは、

なっているとき、そばへキャンデーの箱をそっくりおいといていいですわ。」
と、ムーミンママがいいました。
「うん、そうか。しかし、ライオンは、ぜったいだぞ！」
と、ムーミンパパがいいました。
「もちろんですとも。ライオンがいなくちゃね。」
そう、ママもいいました。

ムーミンパパは、書いて書いて書きまくりました。だれも、しゃべりもしませんし、うごきもしませんでした。一まいを書きおわるごとに、パパは、すぐにそれを読みあげました。ムーミンママは、キャンデーの箱を、いつもいっぱいにしておきました。みんな、きんちょうして、まちかまえていました。

その夜は、みんな、なかなかねつけませんでした。

エンマは、しなびたからだに、力がわいてくる思いがしました。そうして、考えることといえば、しあげの練習のことばかりだったのです。



と、ミーサ。
「そしたら、わたし、ミーサをたたきころす役になれない？」
と、ミムラねえさんがいいました。
「ぼくは、ムーミンパパが、探偵物を書くと思ってたのになあ。どいつもこいつも、みんなあやしくて、考えるのにいい手がかりが、うんとあるやつをね。」
ホムサは、がっかりしていいました。
ムーミンパパは、心をきずつけられてたちあがると、芝居を書いた紙を、かきあつめていいました。
「わしの芝居が、気にいらんのなら、じぶんたちで、すきなのを書くがいいさ。」
「あなた。」
と、ムーミンママがよびました。
「わたしたち、あなたのお書きになったのを、すばらしいと思ってますわ。ね、そうじゃない？」
「思ってますよ。」
と、みんながいいました。
「それごらんなさい。みんな、すきなんですよ。中身と書きかたをすこしだけ、かえてくださったらいいんですわ。だれもじゃましないように、わたしが気をつけますし。それから、お書きに

と、エンマは、口ずさんで、きかせました。
ムーミンパパが、顔をかがやかして、たずねました。
「じゃあ、こうですか。わしはラ――イオンなん―ぞおそれ―ずライ――オンのく――びをはねる?」
「まあ、よいじゃろ。」
と、エンマがいいました。
「さあ、ぜんぶヘクサメーターで、お書き! それにな、むかしからのちゃんとした悲劇は、でてくるもんが、みんなが親類のものじゃちゅうことを、おぼえていなされ。」
「でも、みんな親類なのに、どうして、にくみあえるんでしょう?」
ムーミンママが、おずおずとききました。
「それに、あれには、おひめさまがひとりもいませんね? おしまいが、もっとよくならないかしら? でてくる人たちが死んでしまうのは、あんまりかなしすぎますわ。」
「まあまあ、ママ。これは、悲劇なんだよ。だから、しまいには、だれかが死ななきゃ。ひとりだけをべつにして、みんな死ぬのがいいんだ。いや、ひとりのこらずだろうな。エンマさんも、いわれたよ。」
ムーミンパパは、そういいました。
「いいわ。わたし、しまいには死にますよ。」

とうとう、エンマがいいました。
「いかん、いかん、とても、だめじゃ！」
「そんなに、いけませんか。」
ムーミンパパは、がっかりしました。
「そうとも。まあ、ききなされ。こうじゃ。
『わしは　ライオンなんか　こわくない、わしは。
わしは　ライオンなんか　なげころす、わしは。』
あきれたもんじゃ。」
こう、エンマはいいました。しかしムーミンパパは、
「どうしても、ライオンをつかいたいな。」
と、気をわるくしていいました。
「ヘクサメーターで、お書きよ！　ヘクサメーターで！　ことばじりなんか、そろえないで。」
「ヘクサメーター？　いったい、そりゃなんです。」
と、ムーミンパパがいいました。
「うん、こんなふうじゃ。タムタ—ラタム—タララ—タラ—タム—タム—タムタラ—タム—タム。」

と、ママはいいました。

「そしたら、わたしたちみんな、ちゃんとそらでいえるようにしますわ。わたしたちが劇をやったら、みんなが見にくることよ。うんと、うんと、人がきて、どんなにすばらしかったかを、かえってから、知り合いの人たちに話しますわ。
しまいには、それがムーミントロールの耳にもはいって、あの子がここを見つけますのよ。だれもが、ここへやってきて、なにもかもが、うまくいくの！」

ムーミンママはこういって口をつぐみ、うれしくなって、手をたたきました。

みんなは、どうなることかと、顔を見あわせ、それから、エンマの顔を見ました。

エンマはあきれて、両手をひろげました。

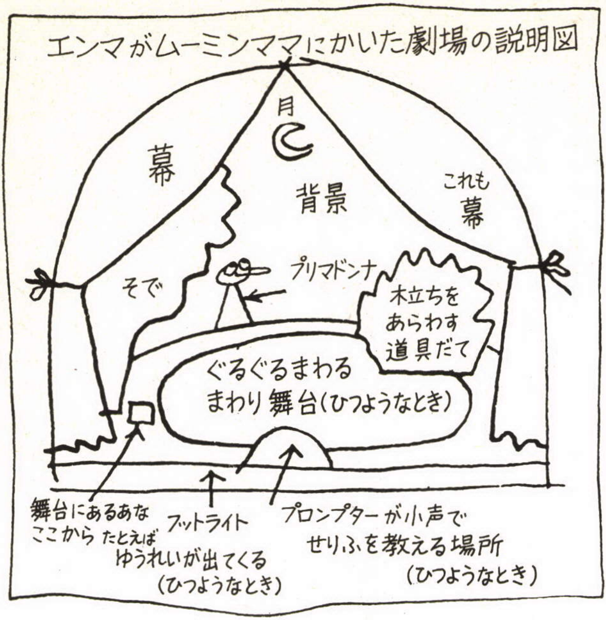
「それは、ひどうおそろしいことになるじゃろ。しかしな、どれほどできがわろうても、ぜひともやりたいと、みながいうんなら、教えることは、できますど。ちょいちょい、ひまのあるときにな。」

それから、エンマは、劇というものはどういうふうにやったらいいか、話しつづけたのでした。

その晩、ムーミンパパは芝居を書きあげて、みんなに読んできかせました。だれも口をだすものはありませんでした。ムーミンパパが読みおわっても、おしだまったままでした。

苦労したんでしょうね。』って。」
「じゃ、あんた、ぼくたちのために、芝居をやってくれますか。」
と、ホムサがたずねました。
「わたしが、お芝居を？　みんなのために？」
ミーサは、小さな声でいって、なみだぐみました。
「そのときは、わたしも、プリマドンナになりたいわ。」
と、ミムラねえさんがいいました。
「で、おまえさんたち、なんちゅう芝居をやるんじゃな？」
エンマが、けげんそうにききました。
そのとき、ムーミンママが、ムーミンパパの顔を見て、いったのです。
「エンマさんにたすけてもらったら、きっと、お芝居を書けますわよ。あなた、思い出の記を書いていらっしゃるでしょ？　調子をととのえるのは、それほど、むずかしくないんじゃありません？」
「いや、わしにゃ芝居は書けんよ。」
といって、ムーミンパパは赤くなりました。
「書けますとも、あなた。」

「ああ、レクビシータちゅうのは、小道具べやじゃな。芝居をするのにいるもんが、ぜんぶ、はいっとるへやじゃ。わしらのプリマドンナは、ほんまにきれいな、黒いかみの人で……。」
「プリマドンナって？」
と、ミーサがききました。
「うん、いちばん中心になる女の役者じゃ。いつでも、いちばんよい役をやる役者で、ほしいものは、なんでも手にはいる。なんとも、はや……。」
「わたし、プリマドンナになりたいな！　だけど、かわいそうな役がいいわ。わめいたりないたりする役が。」
と、ミーサが口をはさみました。
「じゃあ、おまえさん、悲劇をおやり。かなしい芝居をな。そして、しまいの場面で死ぬのさ。」
と、エンマがいいました。
「そうよ！」
　ミーサは、ほおをかがやかして、さけびました。
「じっさいとは、まるでべつの人間になれるなんて、なんてすばらしいんでしょ。そしたら、『あそこをミーサがいくよ。』なんて、もうだれもいわないで、みんな、いうわよ。『あの赤いベルベットをきた、かみの黒い女の人……たいしたプリマドンナね……あの人、きっと、ずいぶん




をつけておいた。そいで、幕があがるまえに、舞台のゆかを、三回たたいたのじゃ。こんなぐあいに！」

「どうしてなの。」

と、ミムラねえさんがききました。

「効果のためじゃわ。」

そういって、エンマは、その小さな目玉をきらきらかがやかせました。

「運命のひびきじゃ、おわかりか。幕があがる。赤い照明が、クレオパトラをてらし――お客さんたちは、息をのむ……。」

「レクビシータも、そこにあるんですか。」

と、ホムサがききました。

でいちばん、だいじなものじゃ。そこへいけば、だれでも、じぶんにどんな生きかたができるか、見ることができる。してみる勇気はのうても、どんなのぞみをもったらよいか、それからまた、ありのままのじぶんは、どうなのかを、見ることができるでのう。」

「教育の施設。」

ムーミンママは、びっくりして大声をあげました。

エンマは、しんぼうづよく、くびをふりました。それから、一まいの紙きれをとると、ムーミンママのために、ふるえる手をおさえて、劇場の絵をかいたのでした。どこになにがあるかを、すっかり説明して、ママがわすれてしまわないように、字で書きいれました。（その絵を、この本にのせておきます。）

エンマが図をかいて説明しているところへ、みんなやってきて、まわりできいていました。

エンマが、しゃべっています。

「クレオパトラの芝居をやったときは、こうだったど。ホールじゅうが、お客でいっぱいじゃった。ホールちゅうても、おまえさんたちのいう客間ではないのじゃ。そいで、みな、しいんとしておった。なにせ、初日じゃでな。初日興行ちゅうのは、その芝居をやる、いちばんはじめの日のことじゃ。わたしゃ、いつものとおり、日ぐれどきに、フットライト（舞台の下からてらす照明）

「このわかい女の人が、クレオパトラという名まえですの。」
エンマは、頭をかかえました。すっかり、閉口したようです。
「クレオパトラとは、芝居の名まえじゃ。このわかい女は、フィリフヨンクさんのめいでな。フィリフヨンカという名まえじゃが、気どりやで、ほんまにおもしろうない女じゃ！ 毎年、夏まつりに招待状をよこしよるが、わしゃ用心して、へんじせんようにしとるよ。あいつは、劇場へはいりたいだけなんでな。」
「それなのに、いれてあげないの？」
と、ムーミンママは、とがめるようにいいました。
エンマは、ほうきをかたづけて、こういったのでした。
「もう、わしは、しんどうなったよ。おまえさんは、劇場のことを、なんにも知らん。小指ほどもな。なんにも知らんより、もっとひどい。もう、これ以上は、おことわりじゃ。」
「でもエンマさん、わたしに劇場のことを、すこし教えてくださいません？」
と、ムーミンママは、おずおずとたのみました。
エンマは、どうしようかとまよいましたが、しんせつにすることにしました。そこで、ムーミンママとならんで、ベッドの上にすわって、こういいました。
「劇場というもんは、おまえさんがたの客間でもないし、船つき場でもないわさ。劇場は、世界

「頭へ鉄のどんちょうがぶつかってな。両方とも、ぶっこわれただ。」
「まあ、お気のどくに！」
ムーミンママが、声をあげました。
エンマは、ポケットの中をごそごそやって、黄色くなった一まいの写真をだしました。
「フィリフヨンクさんは、わかい時分、こないじゃった。」
と、エンマはいいました。
ムーミンママは、その写真をながめました。舞台監督のフィリフヨンクさんは、しゅろをえがいた絵の前にすわっていました。かなしそうな顔をして、頭に小さなぼうしをのっけた女の人が、その横にたっていました。




「まあ、りっぱなかただこと！　うしろの絵は、わたしも知ってますわ。」
ムーミンママがこういうと、エンマはすましていってのけました。
「クレオパトラの背景じゃよ。」

はないかと、ムーミンパパは、心配しました。でも、ホムサはそう思いませんでした。みんなが、しばらく、反対のほうへ歩けば、そんなことにはならない、というのです。

エンマは、いままでどおり、そうじをしました。

ほうきを前へおしやっておいてから、よたよたと、ゆかをのぼっていくのです。ところが、エンマがとちゅうまでたどりつくころに、ほうきはまたすべりおちてしまいます。だから、はじめからやりなおさなければならないしまつでした。

「もっとべつのはきかたをなさったほうが、いいんじゃありません？」

と、ムーミンママが、見かねていいました。

「ここじゃ、わたしのそうじのしかたについて、とやかくいわんでほしいね。舞台監督のフィリフヨンクさんと結婚してから、わたしはずっとこの方角へ、舞台をそうじしてきたんでね。死ぬまで、わたしゃ、こないにそうじするつもりよ。」

エンマは、そういいました。

ムーミンママがたずねました。

「それで、エンマさんのご主人は、どこにいらっしゃいますの。」

「あの人は、なくなりましたど。」

と、エンマが、しかつめらしくいいました。



「ミイ子は、ひとりでやっていくことになれています。わたし、あの子にであった人のほうが心配だわ。」

こう、ミムラねえさんはいいました。

ムーミンママは、外を見ました。雨がふっています。

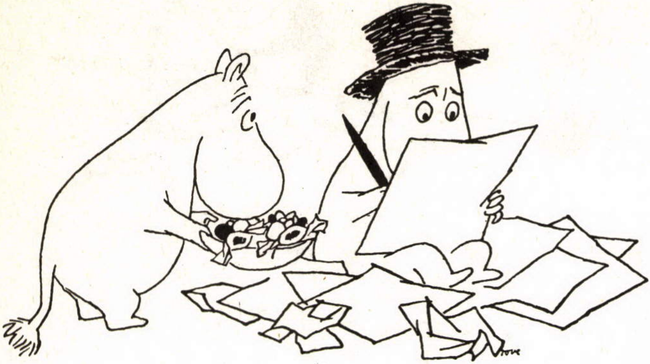
（あの子たちが、かぜをひきませんように。）

ママはこう思いながら、ベッドの上で、ゆっくりとからだをおこしました。ゆっくりやらないわけにはいかなかったのです。浅瀬にのりあげたあの日からというもの、ゆかがすごくゆがんでしまったために、ムーミンパパは、家具をかたっぱしから、くぎでうちつけなくてはなりませんでした。

いちばんこまるのは、食事のときです。だって、おさらがずるずるすべりおちてしまうからです。そうかといって、おさらをくぎでうちつけたら、まあ、たいていはわれてしまうでしょうよ。

だれもかれも、山のぼりをしているときのような気持ちでした。いつでも、片足をちょっと高く、片足をちょっとひくくして歩くわけですから、みんな、足がかたちんばになってしまうので

# 第8章



## どういうふうに劇をつくるか

もし、ムーミンママが、夏まつりの日に目をさましたとき、ムーミントロールがろうやにいれられていると知ったなら、どうだったでしょう！　またもし、ちびのミイはスナフキンのもみの木小屋で、アンゴラ毛糸にくるまってねむっていると、だれかがミムラねえさんに話すことがあったら、どうだったでしょう！

いま、みんなは、なにも知っていません。でも、みんな、希望はもっていました。あの子たちは、いままでだって、もっとふしぎな事件にぶつかっても、そのたんびに、事件はいつもうまいぐあいに、はこんだではありませんか。

る、とてもいやらしいヘムル！

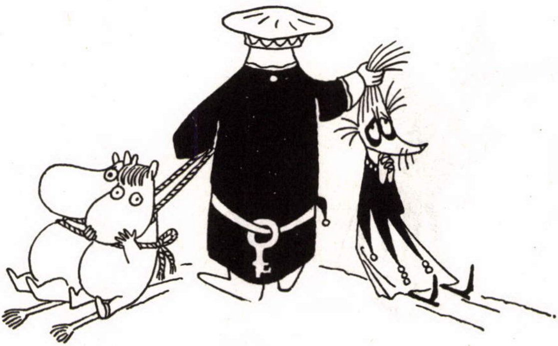
ちょうど、ムーミントロールが、九つめの花をひきぬいたとき、おそろしいさけび声がきこえたのでした。とんでいってみると、大きなヘムルが、片手でスノークのおじょうさんを、片手でフィリフヨンカを、ひっつかんでゆすぶっているところでした。

「さあ、おまえたち三人とも、ろうやへいくんだ！」

と、そのヘムルはどなりました。

「けしからん火つけどもめ！　よくも、たてふだをぜんぶひきぬいて、もやしおったな！　いえるものなら、ちがいますといってみろ！」

けれども、「ちがいます。」といえなかったのは、いうまでもありません。みんなは、ひとことも口をきかないとやくそくしていましたものね。



しまいまでつづけねばならないのです。そうしないと、なにがおこるかしれませんものね。むねをどきどきさせながら、うしろむきに、井戸のところまで歩いていって、足をとめました。

スノークのおじょうさんは、フィリフヨンカの手をかたくにぎりしめました。

東の空に、太陽のすじがひろがって、夏まつりの火からたちのぼるけむりが、もも色にそまりました。

ふたりは、さっとむきなおって、水の中をのぞきこみました。

そこには、じぶん自身のすがたが、うつっていました。井戸のふちと、あかるくなっていく空も、見えました。

ふたりは、ふるえながらまちました。長いあいだ、まちました。

すると、だしぬけに——もう、話すだけでもおそろしいことです——まったくだしぬけに、ふたりは見たのです。水の中にうつっている、じぶんたちのすがたのうしろから、大きな頭が、ぬうっとあらわれるのを。

それは、ヘムルの頭でした！

おまわりさんのぼうしをかぶって、かんかんにおこってい





それから、ふたりは井戸を見つけました。

　フィリフヨンカは、耳をぴくぴくさせました。スノークのおじょうさんも、青ざめてうなずきました。

　ふたりは、すぐに、おまじないをとなえだして、足ぶみしながら、ぐるぐるまわりはじめました。七回めは、だいぶ時間をかけて、まわりました。いまは、ふたりとも、ほんとにこわくなっていたからでした。けれど、夏まつりのうらないは、ひとたびはじめたら、

スノークのおじょうさんは、そっとあたりをうかがってから、フィリフヨンカのぴんとのびた耳に口をよせて、こうささやきました。
「はじめに、おまじないをとなえて、足ぶみをしながら、ぐるぐると七回まわるの。それから、うしろむきに井戸のところまで歩いていってから、むきなおって中をのぞくのよ。そしたら、結婚するあいての人が、水の中に見えるんですって！」
「それで、その人を、どういうふうにしてひっぱりあげるの。」
フィリフヨンカが、せきこんでたずねました。
「あらっ、もちろん、顔が見えるだけよ。男の人のまぼろしだわ！」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
「だけど、まず、花を九種類つみましょうよ。一、二、三。さあ、もう、ひとことでもしゃべったら、あなたはぜったいに結婚できなくなるのよ！」
だんだん火が小さくなっていき、朝風が草地の上をわたりはじめるころ、スノークのおじょうさんとフィリフヨンカは、それぞれひみつにつつまれた花たばを、つみあつめていました。ふたりは、ときどき顔を見あわせて、にっこりしました。わらうことは、禁止されていませんものね。

「ぼく、もうねむくなっちゃった。つむ花のかずは、九つだったかねえ？」
「そう、九つよ。そしてね、あんたは、もうひとことものをいわないって、やくそくするのよ。」
こう、スノークのおじょうさんはいいました。
ムーミントロールは、かしこまって、うなずきました。それから、
「おやすみ。また、あしたね。」
というのを、いろいろのゼスチュアでやって、つゆにぬれた草の中へ、はいっていきました。
フィリフヨンカが、けむりの中から、すすだらけになって、うれしそうにぴょんぴょんとびはねながら、でてきました。
「わたしも、花をつみたいわ。うらないごとなら、わたし、どんなのでもすきよ！　あんた、もっと知らない？」
「わたし、それこそこわくなるような、夏まつりのうらないを、一つ知ってるわ。」
と、スノークのおじょうさんが、声をひそめて、いいました。
「だけど、それ、口でいえないくらいこわいのよ。」
「今夜は、わたし、なんだってやってみせるわ！」
フィリフヨンカはそういって、いきおいよく、すずをひびかせました。

たき火のぐるりをおどりまわり、小えだで、火をかきたててまわりながら。

おじさんなんか、もういらない！
おばさんなんか、もういらない！
ビビデー　バビデー　ブー！

ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、かたをならべてこしをおろし、みちたりた思いで、火を見つめました。
「いま、うちのママは、なにをしてると思う？」
と、ムーミントロールがききました。
「もちろん、お祝いしてるわよ。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
たくさんのたてふだからあがる火花が、花火のように夜空をかざると、フィリフヨンカはさけびました。
「ばんざあい！」
ムーミントロールがいいました。

「なんだか、ニョロニョロみたいなにおいがするぞ。いつもいまごろは、あいつら、海の上にいるはずなんだけど。」

そのとたん、スノークのおじょうさんが、なにかにつまずいたのです。見ると、「草原でとびはねるべからず」と書いたたてふだでした。

「なんだ、ばからしい！ 見てごらんなさい。ここには、もういらなくなったたてふだが、うんとこさとあるわ。」

「まあ、すてき！ なにをしてもいいのね！」

と、フィリフヨンカが、大声をあげました。

「いい晩だわ！ このたてふだを、みんなもしちゃわない？ これで、夏まつりの火をたいて、それがもえつきるまで、おどりましょうよ！」

夏まつりの火が、もえあがりました。ごうごううなりながら、火はたてふだにおそいかかりました。「歌をうたうべからず」とか、「花をつむべからず」とか、「草の上にすわるべからず」などと書かれた、たてふだの山に……。

黒々とした大きな文字が、パチパチと気持ちよくはじけ、火花が一団となって、うすあかるい夜空に、高くとびちりました。ふといけむりが、草原の上に長く尾をひいたところは、空にうかんだ白いじゅうたんのようでした。フィリフヨンカは、うたいました。すんなりとほそい足で、

ントロールのために、夜空にむかって、かんぱいのグラスをあげていましたっけ。「ムーミントロールの帰宅をいのって！」と、パパは、おごそかにいったのです。それから、「スノークのおじょうさんと、ミイ子ちゃんのために！」って。）

三人とも、おなかがいっぱいになり、いい気分になりました。

「さあ、夏まつりのたき火をしましょうよ。」

フィリフヨンカはそういって、ランプをふきけすと、マッチをポケットへつっこみました。

外はまだあかるくて、地面の草の葉も、一まい一まい見わけられました。もみの木のてっぺんのむこうで、太陽はしばらくやすんでいましたが、あすの日をまって、赤いすじだけはのこしていました。

三人は、しずまりかえった森をぬけて、海べの草地にでました。夜の光は、そこがいちばんつよくあたっているのです。

「今晩は、花がすばらしくにおうわね。」

と、フィリフヨンカがいいました。

焼けたゴムのにおいが、かすかに草原へ流れてきました。草が、電気でパチパチ音をたてました。

ムーミントロールが、びっくりしていいました。

「ええ、ありませんとも！」

と、スノークのおじょうさんがいいました。

「そして、これからもずっと、わたしがだれかすきな人とお祝いをしても、だれの気持ちもきずつけないかしら。その人たちとは、親類じゃなくても？」

「ぜったいに、だれをもきずつけやしませんよ。」

ムーミントロールが、たいこばんをおしました。

するとフィリフヨンカは、ほっとして顔をかがやかしながらいうのでした。

「そんなに、かんたんなことだったの？　まあ、すばらしい！　さあ、これからわたしたちで、わたしがいままで知らなかったような、たのしいたのしい夏まつりを祝いましょう。はじめるのよ！　ね、いいから、わたしに、すてきな思いをさせて！」

ところが、夏まつりは、フィリフヨンカがのぞんだよりも、ずっとずっとたのしいものになったのです。

「パパとママのために、かんぱい！」

と、ムーミントロールがいって、じぶんのグラスをのみほしました。

（そして、ちょうどおなじ時間に、ムーミンパパも、あの水にうかんだ劇場で、むすこのムーミ

「じゃ、あなたは、それをたのしいことだとは、お思いにならないんですの？」
と、スノークのおじょうさんが、たずねました。
「もちろん、思いませんよ。わたしのおじもおばも、まるでたのしくない人たちですもの。」
と、フィリフヨンカは、ぐったりした声でいって、テーブルの前にこしをおろしました。
ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、そのそばにすわりました。
スノークのおじょうさんが、こういいました。
「きっと、おじさんやおばさんのほうでも、おもしろくないと思っていらっしゃるんじゃないかしら。だったら、かわりに、ゆかいなわたしたちを、招待してくださらないこと？」
「なんですって！」
フィリフヨンカは、おどろいてさけびました。
でも、フィリフヨンカがしあんしているのが、よくわかりました。それからきゅうに、かの女のぼうしのさきが、ゆっくり上へあがって、すずがあかるい音色をたてました。
「ほんとうはね。」
と、フィリフヨンカはゆっくりゆっくりいいました。
「わたしたちみんなが、たのしくないと思っているんだったら、あの人たちをよぶ必要は、ちっともないわけね。」

「どうか、たのしいパーティーをね。」
そのとたんに、フィリフヨンカの顔がくしゃくしゃとゆがんで、もういちど、なきだしました。
「パーティーなんか、たぶんないのよ！　パンケーキはこちこちにかわいてしまうし、花はしおれて、時間はどんどんたっていくけど、だれもこないの。あの人たち、ことしもこないわ！　なんて、人情知らずの人たちでしょう！」
フィリフヨンカは、なみだ声でいうのでした。
ムーミントロールは、同情して、きいてみました。
「いったい、だれがこないんですか。」
「おじさんとおばさんなのよ！」
と、フィリフヨンカは大声でさけびました。
「夏まつりには、毎年、ふたりに招待状をだしているのに、ちっともこないの。」
「だったら、だれかほかの人を、まねいたらいいですよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ほかには、だれも親類がないんです。」
と、フィリフヨンカが説明しました。
「だって、お祝いの日の晩さんには、親類の人をよぶのが義務ですものね。」

フィリフヨンカは、がっかりしました。

「夏まつり、おめでとう！」

と、スノークのおじょうさんがいいました。

「どうも、ごしんせつさま。夏まつり、おめでとう。」

と、フィリフヨンカは、どぎまぎして、いいました。

「ちょっと、おききしたいんですが。このごろ、このへんで、なにか家――ほんとは劇場なんですけど――を見ませんでした？」

ムーミントロールがたずねました。

「劇場？」

と、フィリフヨンカは信じられないように、くりかえしました。

「いいえ、そんなもの――ぜんぜん。」

ちょっと、話がとぎれました。

「そうですか。じゃ、ぼくたち、もっとさがしてみます。」

と、ムーミントロールがいいました。

スノークのおじょうさんが、食事のしたくのしてあるテーブルと、ドアの上の花かざりに目をとめて、おあいそをいいました。

りすわって、とけいがコチコチと時をきざむのをきいていたのでした。かの女は、ときどきまどべに近づいて、あかるい夜をのぞいてみました。すると、フィリフヨンカのぼうしについている小さなすずが、チリンチリンと鳴ります。ふつうなら、そのすずが鳴ると、フィリフヨンカは気がせいせいするのですが、その音色も今晩ばかりは、いっそうふかいかなしみをあたえるのでした。フィリフヨンカは、ためいきをついて、ぶらぶらと歩きまわったり、こしをかけたり、またたちあがったりしました。テーブルの上には、なんまいかのおさらと、コップが三つと、花たばがならべてありました。ストーブに、パンケーキが一つのっていましたが、まちくたびれて、まっ黒になってしまっていました。

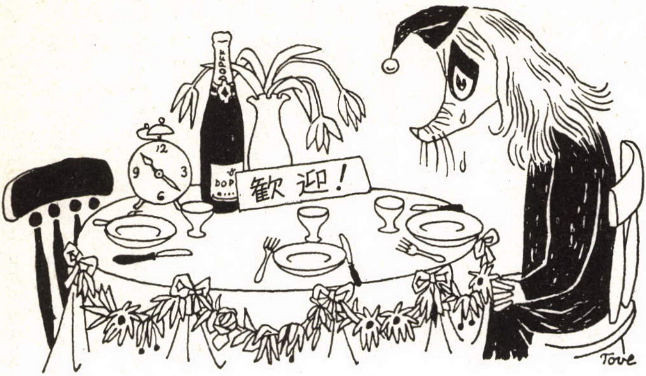
　フィリフヨンカは、とけいを見ました。ドアの上にかけた花かざりを見、かがみにうつったじぶんのすがたを見ました。そしてそれから、うでをテーブルにもたせかけてないたのです。ぼうしが鼻の上へずりおちて、またすずが鳴りました。チリンと一回だけ、かなしそうに鳴っただけでしたけれど。なみだが、からっぽのおさらの中へ、ゆっくりと流れおちました。

　フィリフヨンカであるということは、人が思うほど、らくなことじゃありませんものね。

　ちょうどそのとき、ドアをノックする音がきこえたのです。フィリフヨンカは、はっととびあがって、いそいで鼻をかむと、ドアをあけました。

「あらっ！」

# 第7章




## 夏まつりのイブのこと

夏まつりの前の晩の十時半でした。ちょうどその時間に、スナフキンは、二十四人の小さな子どもたちのために、もみの木の小えだと葉で、小屋をたててやりました。それから、まえに話したように、ムーミントロールとスノークのおじょうさんが、この森の中のほかの場所で、耳をすましていたのも、やはりこの時間だったのです。

きりの中で鳴った小さなかねの音は、もうきこえませんでした。森はねむっていました。あの小さな家は、黒いまどガラスをこちらにむけて、かなしそうに、ふたりを見ていました。

だけど、その家の中にはフィリフヨンカがひと

どもたちをつれて、野原を歩いていきました。心の中で、
(この子たちが、おなかをすかしたり、足をぬらしたり、はらいたをおこしたりしたら、どうしたものだろうな。)
と思いなやみながら。

こうスナフキンがいうと、
「きっと、この子たちには、ママがないのよ。」
と、ちびのミイがいいました。
スナフキンは、おどろいてしまいました。
「なにしろ、ぼくは、ぜんぜん子どもには、なれてないからなあ！　この子たちが、すきかどうかも、ぼくにゃわからん！」
「でも、この子たちのほうは、あんたがすきなのよ。」
ちびのミイは、にやにやしていいました。
スナフキンは、足もとにまとわりついてくる子どもたち、ものもいわずにしたってくる一団の子どもたちを、じっと見つめました。
「どうも、こいつら、まだなにかふそくみたいだな。まあいいや。じゃ、いっしょにおいで。だけど、こまったことになっても、ぼくは知らないぜ。」
スナフキンはこういうと、二十四人のまじめくさった子



を、やっつけました。それから、
「わらったり、口ぶえをふいてはいけない」
にとびかかり、つづいて、
「とびはねるべからず」
を、ふみつけました。
小さい森の子どもたちは、ただただあきれてしまって、スナフキンを見つめていました。
それでも、子どもたちは、
(このおじさんは、じぶんたちをたすけにきてくれたんだ。)
と、だんだんわかってきました。すると、みんな、すな場からでて、スナフキンをとりまきました。
「さあ、みんな。きらくにおやり！　すきな場所へいっていいんだよ！」
と、スナフキンがいいました。
ところが、だれもいきません。みんな、スナフキンのうしろに、どこまでもついてくるのです。いちばんしまいのたてふだも、ひきたおしてしまい、こんどは旅をつづけるために、スナフキンがリュックサックをかつぎあげても、子どもたちは、やっぱりついてきました。
「さあさあ、みんな。ママのところへおかえり！」

においかけられながらね。
　おかみさんのほうは、さっきから、公園のかこいをのりこえようとしていました。子どもたちだけが、びっくりぎょうてんして、すな場の中にすわったままでいました。
「すかっとしたわ！」
　ちびのミイが、感心していいました。
「そうだろ！」
　スナフキンは、ぼうしをおしあげて、いいました。
「さあ、これからたてふだを、ぜんぶひきぬいてやろう。もう、草もすきなだけのびるがいいんだ！」
　スナフキンは、じぶんのしたいことを、ぜんぶ禁止しているたてふだを、のこらずひきぬいてしまいたいと、これまでずっと思いつづけてきました。ですから、（さあ、いまこそ！）と思うと、考えただけでも身ぶるいがするのでした。
　まず、
「たばこをすうべからず」
のふだからはじめました。つぎには、
「草の上へすわるべからず」


Tove

せん。じっと子どもたちばかり見はりつづけているからです。まわりのしばふには、なん百というニョロニョロがつきでて、いまは、足が地面の中にのこっているだけでした。いおうとゴムの焼けるにおいが、公園にただよいました。おかみさんが、くんくんと鼻をうごめかしていいました。

「なんのにおいだろう。子どもたち、こんなにくさいのは、どの子だ？」

いまは、かすかな電気のショックが、地面を走っています。

公園番もおちつきなく、足をうごかしだしました。公園番の制服の金ボタンが、スパークをおこしはじめました。

とつぜん、おかみさんは悲鳴をあげてベンチの上へとびあがると、ふるえる指で、しばふをさしました。

ニョロニョロは、もうふつうの大きさになっていて、四方八方から、公園番のほうへ、おしよせてきます。電気をおびた金ボタンに、すいよせられてくるのです。いちめんに、小さないなびかりが、いくつもとび、金ボタンは、パチパチとスパークしました。ふいに、公園番の耳に火がつきました。かみの毛が火花をちらし、それが鼻へひろがったと思うと——ぱっと公園番のからだぜんたいが、光りだしたのです！

公園番は火の玉のようになって、出口のほうへつっぱしりました。一団となったニョロニョロ

スナフキンは、こういうと、ゆっくり身をかがめて、かきねのあいだのしばふへ、たねをなげこみはじめました。かれは、公園のまわりをすっかりまわって、ここと思うところへ、ニョロニョロのたねを、まいたのです——大きくなってから手がからみあわないように、ちゃんとあいだをあけてね。

ふくろがからになると、こしをおろして、やすみながらまちました。

太陽はしずみかけていましたが、あいかわらずあたたかくて、まもなくニョロニョロが、芽をだしはじめました。

かりこまれているしばふのあちこちに、白いきのこのような、まるい小さなものが頭をもたげてきました。

「あれをごらん！　もうじき、ニョロニョロの目玉も、土の上にでるよ！」

こう、スナフキンはいいましたが、まったく、そのとおりでした。やがて、白い頭の下に、まんまるい目が二つ、見えてきたのです。

「ニョロニョロたちは、生まれたてのとき、とくべつに電気をもってるんだよ。ほら、こんどは手がでてきたぜ！」

スナフキンは、話してきかせました。

ニョロニョロは、ゴソゴソ音をたてながら大きくなりました。公園番は、ちっとも気がつきま

「あの人を、どうするつもり？　くびをつるしてやるの？　かまへいれて、たいちゃうの？　どこかへ、とじこめるの？」
と、ちびのミイがききました。
「あいつを、おどかしてやるだけさ！」
スナフキンはそういって、パイプをぎゅっと、かみしめました。
「ぼくの大きらいなやつが、ひとりだけいるんだ。それが、あの公園番さ。『べからず、べからず』と書いてあるたてふだなんか、ぜんぶひきぬいてやるぞ！」
スナフキンは、リュックサックの中をごそごそやって、大きなふくろを一つ、ひっぱりだしました。それには、つやつやした白い小さなたねが、いっぱいはいっていました。
「それ、なんなの？」
と、ちびのミイ。
「ニョロニョロのたねさ。」
と、スナフキン。
ちびのミイは、びっくりして、ききました。
「まあ！　ニョロニョロは、たねから生まれるの？」
「そうとも。かんじんなのは、夏まつりのイブにまかねばだめだってことなんだ。」

は、高いかこいがしてあって、どこにもかしこにも、黒い大きな字で、なにかが禁止だと、書かれていました。

こんなひどい公園にも、毎日、二十四人のおとなしい子どもたちがきます。その子たちは、なにかわけがあって、おきざりにされたり、まいごになったりしたのでした。みんな森の子どもたちで、毛がたくさんはえていますが、その公園もすきではありませんし、すな場であそぶことも、すきではありませんでした。木のぼりや、さかだちや、しばふの上を走りまわったりしたいのです。

でも、公園番も、そのおかみさんも、そんなことはわかってくれません。そして、ふたりともすわりこんで、見はりをしているのでした。

子どもたちに、どうすることができたでしょう？　できることなら、こんな公園番たちは、すなの中にうずめてしまいたいくらいでした。だけど、みんな小さいのですから、そんなことができるわけがなかったのです。

この公園へ、いま、スナフキンが、ちびのミイをポケットにいれて、やってきました。スナフキンは、かこいのまわりをこっそりうろついて、むかしからのにくいかたき、あの公園番のようすをうかがいました。

「そのわるもの、大きい？　それとも、小さい？」
ちびのミイは、そうたずねました。
「小さいよ。」
と、スナフキン。
「そりゃ、いいわ。小さいわるものは、すぐつぶれるから、ずっといいわね。」
ちびのミイは、いい気持ちで、アンゴラ毛糸の中へまたもぐりこみ、スナフキンは、長いかこいにそってそろそろと歩きました。そこここに、たてふだがたててあって、そこにこう書いてありました。

**公園内にたちいること**
**かたく禁止**

公園番とそのおかみさんが、公園の中でくらしているのは、いうまでもありません。このふたりは、木をどれもこれも、まるくかったり、四角くかったりしてしまうし、道はぜんぶ、学校の先生がもっているむちみたいに、まっすぐでした。すこしでも草の葉が頭をつきだすと、すぐさまかりとられて、もういちどはじめから、のびなおさねばならないのでした。しばふのまわりに

ミーサもうたおう　なかないで！
家のまわりの赤いチューリップ
朝の光に　ゆれている
ゆっくりきえるよ　あかるい夜が
ミムラはひとりでぼうしをさがす！

「あんた、それをどこできいたの。だいたい、そのとおりだけどさ。おどろいた子だなあ。」
と、スナフキンは、びっくりしていいました。
「おどろいた子は、あんたのほうよ。それに、あたいはひみつがあるんだもん。」
と、ちびのミイがいいました。
「ひみつ？」
「そう、ひみつよ。あらしではないあらしと、ぐるぐるまわる客間（きゃくま）のことよ。だけど、いわないわ！」
「ぼくも、ひみつがあるのさ。このリュックサックに、はいってるんだ。もうちょっとしたら、見せてやるよ。あるわるものを、やっつけちゃうんだ！」
と、スナフキンがいいました。

スナフキンは、あのハーモニカをとりだして、

すべてちっちゃな動物は
しっぽにリボンをつけなくちゃ

という、ムーミントロールの大すきなメロディーをふきはじめました。
ちびのミイが、すぐに目をさまして、ポケットから顔をだすと、
「それだったら、わたし知ってるわ！」
とさけんで、かぼそくてかん高い声をだして、うたいだしました。

すべてちっちゃな動物は
しっぽにリボンをつけなくちゃ
そう　リボンをね　しっぽにさ！
ヘムルはみんなかざってる
かんむりと花輪をね
月がしずめば　ホムサがおどる

「そうかい。たいせつなのは、じぶんのしたいことを、じぶんで知ってるってことだよ。」
スナフキンは、そういって、ちびのミイをポケットの中へいれてやりました。
ちびのミイは、中へはいるときに、アンゴラ毛糸を、すこしもっていきました。
それから、スナフキンは、浜べの草原をこえて、歩きだしました。
あの大洪水も、この湾の入り口では、力がよわっていました。そして、ここでは夏が、いつにかわらぬうつくしさを見せていたのです。
火山の爆発を知らせるものといえば、雲になった灰と、うつくしい朱色の夕空だけでした。スナフキンはどうもおかしいなと、ときどきそれをふしぎがったものです。ムーミン谷の友だちの身の上におこったことを、なにも知りませんから。
（みんな、じぶんの家のベランダで、のどかに夏まつりをいわっているだろうなあ。）
とか、
（ムーミントロールが、ぼくをまっているだろうな。）
と考えるだけでした。
でもスナフキンは、ムーミン谷へかえるまえに、公園番とのたいせつな用事をかたづけなくてはならなかったのです。しかも、それは夏まつりのイブだけにできることでした。あすは、それもかたづくことでしょう。

や、こまったことになりました。
「あんたのママは、どこにいるの。」
と、スナフキンがたずねました。
「たべられちゃったの。」
ちびのミイは、そんなじょうだんをいってから、いきなり、たずねました。
「なにか、たべものをもってない？」
スナフキンが、パイプでさしたほうを見ると、豆をいっぱいいれたなべが、キャンプのたき火の上で、ぐつぐつにえています。すぐそばには、あついコーヒーもありました。
「でも、あんたは、きっとミルクしかのまないんだろう？」
スナフキンが、こういってたずねると、ちびのミイは、ばかにしたように、わらいました。そして、まばたきもせずに、コーヒーをスプーンに二はいのんで、そのうえ、豆を四つぶ以上もたべたのでした。
スナフキンは、火に水をかけながら、ききました。
「もう、いいかね？」
「あたい、もう、またねむくなっちゃったわ。いつも、ポケットの中が、いちばんよくねむれるの。」

「おやおや、これは小さいミムラじゃないか。」
スナフキンは、そういって、パイプを口からはなしました。それから、ちびのミイをかぎばりで、そっとつっついて、やさしく声をかけました。
「こわがらなくて、いいよ！」
「わたし、ありだってこわくないわ！」
と、ちびのミイはいって、おきあがりました。
ふたりは、顔を見あわせました。
ふたりが、このまえ会ったときは、ちびのミイはうんと小さくて、目に見えないくらいでした。だから、いまおたがいにわからなくても、おかしくありません。
「そうか、まいったな。」
といって、スナフキンは頭をかきました。
「まいったでしょ！」
と、ちびのミイがいいました。
スナフキンは、ためいきをつきました。ここへは、だいじな用事で、きていたのです。それに、ムーミン谷へもどるまえに、もうすこし、ひとりでいたくもありました。ところが、どこかのだらしのない女が、じぶんの子どもをさいほうかごにのせて、流してしまったのです。いやは



の箱には、おかしがすこしのこっていましたから、ちょっとまよいましたが、ちびのミイはさいほうかごのほうをえらんで、その中へよじのぼりました。

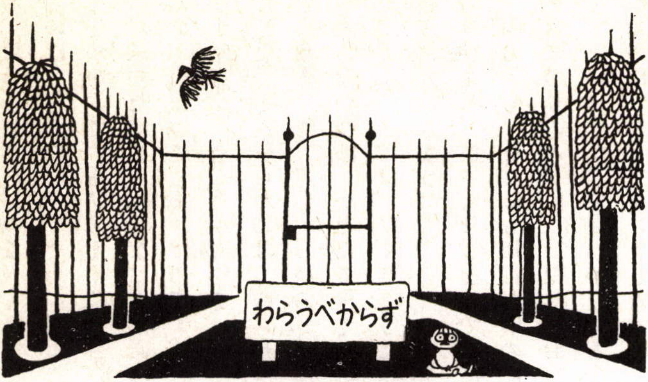
長いことかかって、ちびのミイは、さいほうかごの中にあるものを、みんなしらべると、いくつもあった糸のたばを、みんなばらばらにきりほぐしました。それから、アンゴラ毛糸の中へもぐりこんで、ねむってしまったのです。

さいほうかごは、ぐんぐん流れていって、家が浅瀬にのりあげたのとおなじ入り江に、流れこんだのでした。それからかごは、ゆらりゆらりとあしの葉のあいだへすいこまれて、しまいに、沼地でとまりました。でも、ちびのミイは、目をさましませんでした。

そこへ大きなつりばりがとんできて、さいほうかごにひっかかったときでさえ、まだ目がさめなかったのです。かごは、ぴくりとうごきました。それから、つり糸がぴんと張って、ゆっくりひきよせられていきました。

読者のみなさん。びっくりしないでくださいよ。偶然の一致とは、おもしろいものではありませんか。両方とも、なんにも知らないのに、両方のなりゆきが、ムーミン一家とスナフキンを、ちょうど夏まつりのイブに、ぴたりとおなじ入り江で、ぶつかるようにしてしまったのです。岸にたって、さいほうかごを見つめているのは、ほかでもありません、あのみどり色の古ぼけたぼうしをかぶった、スナフキンでした。

# 第6章




## 公園番へのかたきうち

ちびのミイが、もし、すこしでも大きかったら、きっと、おぼれてしまったにちがいありません。ところが、ちびのミイは、うずまく水の中を、まるであわのようにかるくはねとばされて、また水のおもてへ、ぽいっとはきだされたのでした。ちびのミイは、コルクのようにうかんで、どんどん流されていきました。

「こりゃ、おもしろいぞ。ねえちゃん、さぞびっくりするだろうなあ。」

こういって、ちびのミイは、ひとりでよろこんでいました。すぐ近くには、おかしの箱と、ムーミンママのさいほうかごも流れています。おかし

びました。

「ミイ子！　どこにいるの！　へんじして！」

と、ミムラねえさんが、わめきました。

　でも、ミイ子もこんどばかりは、へんじをしたくても、できなかったのです。ゆかのあげ戸から、黒い水の中へ、ボチャンところげおちてしまっていましたからね。

　そのときだしぬけに、いやなわらい声がきこえました。げらげらわらっているのは、エンマでした。

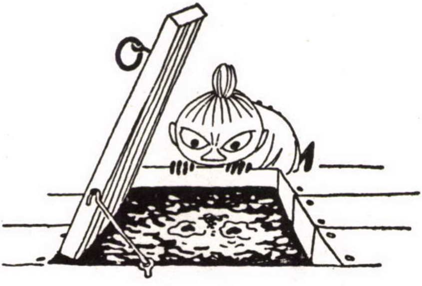
「はっはっはっ。わかったかい。劇場で口ぶえをふくと、こうなるのさ！」



「あの人、病気なのかもしれないね。」
と、ムーミンママがいいました。
「そうじゃないわ！　おさとうを、うんととっていったから、いまはそれたべて生きてるんだわ。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「すまないけどね。あの人が病気かどうか、見てきてちょうだい。」
ムーミンママは、力なくいうのでした。
ミムラねえさんは、すみっこのエンマのねどこへいって、きいてみました。
「ムーミントロールのママが、心配してますよ——おばさんが、ぬすんでいったおさとうのせいで、おなかをいたくしてやしないかって。」
エンマは、ロひげをぜんぶ、ぴんとおったてました。
ところが、なんとも答えられずにいるうちに、家ぜんたいが、ものすごいショックをうけて、ゆかがかたむきました。
おさらや茶わんがなだれおちました。その中をくぐって、ホムサがかけつけました。天じょうの絵が、一どにぜんぶおちてきて、客間をうずめました。
「浅瀬にのりあげたんだ！」
ムーミンパパが、ビロードのカーテンのかげから、はんぶんのどがつまったような声で、さけ

死体(したい)をなげいれるあなじゃないでしょうね?」
こう、ホムサはいいましたが、そのあげ戸に興味(きょうみ)をもつものは、だれもいませんでした。ただ、ちびのミイだけが、はらばいになって、水の中をのぞきこんで、こういっただけでした。
「敵(てき)のにきまってるわ。わるものたちのひみつの入り口よ。まあ、すごい!」
一日じゅう、ちびのミイははらばいになったままで、わるものを見はっていました。でも、ざんねんなことに、わるものはひとりも見えませんでした。

そんなことがあってからは、だれもホムサをとがめなくなりました。
あのできごとがおこったのは、ちょうど夕ごはんのすぐ前でした……。
ところでエンマは、その日は一日じゅう、顔を見せず、夕ごはんのときになっても、あらわれなかったのです。



と、ちびのミイがいいました。
「あっちへ、あそびにいきなさい！　でないと、食後のデザートはあげませんよ！」
と、ミムラねえさんがおこりました。
ミーサは、黒い喪服をきて、すみっこにはいこんで、ひとりでしくしくやっていました。
「ほんとに、あの子たちのことが、そんなにかなしいのかい。」
と、ホムサが同情してたずねました。
「いいえ、ちょっとだけよ。だけど、こんなにないてもいい理由があるときには、いちどきにないておくの。」
と、ミーサはへんじをしました。
「ふうん、なるほど。」
ホムサはそういったけれど、わけがわかりませんでした。そこでホムサは、どうしてこんな事件がおこったのか、考えてみようとしました。かれは、たべものべやの屋根にあいているあなと、客間のゆかを、すみからすみまで、しらべました。でも、ホムサが見つけたものといえば、じゅうたんの下に、あげ戸があることだけでした。そのあげ戸のすぐ下には黒い水が、家の下をひたひたと流れているだけでした。ホムサは、おおいに好奇心をもやしました。
「これはたぶん、ごみをすてるあなですね。それとも、室内プールでしょうか？　まさか、敵の

「ああ、かわいそうな小さい子どもたち！　わたしのかわいいムーミンぼうや！　ひとりだけ、木の上にのこされて！　もう、どうやったって、この家を見つけられっこないわ！　ああ、夜になって、ふくろうが鳴いたら……。」
ホムサが、なぐさめました。
「ふくろうは、八月までは鳴きませんよ。」
「おなじことだわ。いつでも、なにかおそろしいものが、鳴いているもの。」
と、ムーミンママはなきました。
ムーミンパパは、たべものべやの屋根にあいているあなを、かなしそうに見つめました。
「こんなことになったのは、わしの失敗だった。」
「そんなことを、おっしゃらないで！」
と、ムーミンママがいいます。
「あなたのステッキは古いんですもの、中がいたんでいたのですわ。そんなこと、だれにもわかりませんでしたけど。あの子たちは、きっと家を見つけますとも。かならず、ここへもどってきますわ！」
「あの子たちが、たべられちゃわなければね。もう、ありにさされて、オレンジより大きくなっちまってるわよ。」

たわね。そうやってねて見たゆめは、みんな、かなえられるのよ。でも、花をつんでるあいだも、そのあとも、ひとこともしゃべってはいけないんだって。」
「ゆめって、あたる？」
「もちろんよ。いつも、すてきなことが。」
と、スノークのおじょうさんは、答えました。
まわりの森の木が、だんだんまばらになってきたかと思うと、きゅうに目の前に、谷間がひらけました。きれいな夜ぎりが、はちの中のミルクのように、小道にただよっていました。
ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、森のふちで、心ぼそそうにたちどまりました。えんとつのまわりにも、門柱のまわりにも、木の葉のかざりをつけた小さな家が、ぼんやりと見えます。
きりの中から、小さなかねの鳴る音がきこえてきました。いったんしずかになって——それから、また鳴りました。だけど、えんとつからは、けむりがでていませんし、まどからも、あかりはもれていませんでした。
こんなことがおこっているあいだに、水にうかんでいる家では、たいへんかなしい朝をむかえていました。ムーミンママは、ものをたべようともしませんでした。ゆりいすにすわったまま、くりかえしくりかえし、こういうばかりなのです。

いきものたちが、もみの実をころがして火にくべようとしているのが、はっきり見えました。
「あの人たち、夏まつりのたき火をしてるのね。」
と、スノークのおじょうさんが、いいました。
「そうだったなあ。ぼくたち、きょうが、夏まつりのイブだったということを、すっかりわすれてたね。」
ムーミントロールは、もの思いにしずみながら、答えました。
ふたりは、ことさらに家がこいしくなりました。それで、こけの上からこしをあげて、森の中をもっとおくへと歩きだしました。
ムーミン谷のわが家では、いつもこのころに、パパのしゅろ酒が、おいしくなったものでした。夏まつりの火は、かならず海べでたかれて、谷や森にいる小さな虫たちが、みんな見にやってきたものでした。遠くの浜べや島でも、いくつかの火がたかれますが、ムーミン一家の火が、いちばん大きいのです。火のいきおいが、いちばんさかんになったとき、ムーミントロールは、あったかい水の中へはいっていって、波にのってゆられながら、火をながめたものでした。
「家の火は、海にうつっていたっけねえ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「そうだったわ。そして、火がもえつきると、九つの種類の花をつみとって、まくらの下へしい



「うん、それがいい。きみは、おそろしくわめいたけれど、ぼく、とうとう、きみをさらってきたのさ。」

と、ムーミントロールは、上きげんで答えました。

お日さまは、しずんでしまっていましたが、六月のことですから、それほどくらくはありません。夜でもうすあかるくて、まほうのかかったゆめのような世界でした。

おくのほうのもみの木の下で、ぱっと火花がちったかと思うと、火がもえあがりました。それはもみの木の葉やえだをつかった、ちっちゃなたき火でした。小さな

を、木をつたってすすんでいこう。

それから、きみの前がみには、ちょっとくしをいれたらいいぜ。ぼく、きみがきれいにしてるのを、見るのがすきなんだもの！」

ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、一日じゅう、木から木へと、つたって歩きました。夕がたになって、水の底にみどり色のこけが光っているのを、はじめてふたりは見ました。そして、だんだん水があさくなっていき、しまいに、かたい陸地があらわれたのでした。

あらためて土の上にたち、まぎれもないこけの中へ、ふんわりと足をふみいれたのは、ほんとに気持ちのいいものでした。そこは、もみの木の林でした。しずまりかえった夕ぐれの中で、かっこうが鳴いていました。そして、おいしげったもみの木々の下には、かがむらがって、ブンブンやっていました。（ムーミンのひふは、かにさされないほど、ぶあつくできているので、たすかりました。）

ムーミントロールは、こけの上にごろりとねころびました。一日じゅう、流れに流されていくぶきみな水ばかり見てきたので、頭の中までが、ぐらぐらゆれている感じでした。

「わたし、あんたにさらわれたってことにしておくわ。」

スノークのおじょうさんが、小さい声でいいました。

ふたりは、じっと身をよせあったまま、うごこうともしないで、すわっていました。スノークのおじょうさんは、まくらに顔をうずめて、声をもらさずにないていました。

やっと、ムーミントロールはたちあがると、木のえだにつりさげておいた朝ごはんのバスケットを、その気もなしに、手にとりました。

中には、小さなかわいいサンドイッチが、どれも二つずつ、うすい紙につつまれて、いっぱいつまっていました。ムーミントロールは、それをみんなひろげてみました。だけど、どうもたべる気はしません。

ふと、ムーミントロールは気がつきました。ママがサンドイッチのつつみに、なにか書いといてくれたのです。どのつつみにも、それぞれ「チーズ」とか、「バターだけ」とか、「上等のソーセージ」とか、「おはよう」とか書いてありました。「おはよう」というのには、「これは、パパからのです。」とつけくわえてありました。中身はかにのかんづめで、ムーミンパパが、春からのこしておいたものでした。

きゅうに、ムーミントロールには、思えてきました。——こんなことくらい、なんだ。きっと、そうこわいことはないんだぞ、と。

そこで、スノークのおじょうさんに、いいました。

「もうなくのはやめて、サンドイッチでもおあがりよ。きみのぶんをさ。ぼくたち、この森の中

わいい、なんともすばらしい鼻をしているじぶんのゆめを見ていたのです。しかし、どうもねむれませんでした。

するとそのとき、きゅうに感じたのです。——なにかがおかしいわ、と。スノークのおじょうさんは、がばっとはねおきて、あたりを見まわしました。

木ときりと水。ですが、家がありません。家がなくなっていて、じぶんたちだけが、ぽつんととりのこされているのです。しばらくのあいだ、スノークのおじょうさんは、ものもいえずにすわっていました。

それから、かがみこんで、そっとムーミントロールをゆすぶりました。

「たすけて！　ねえ、たすけて！」

スノークのおじょうさんが、こうささやくと、ムーミントロールは、ねむそうにいいました。

「それ、なにかあたらしいあそびかい？」

「いいえ。これ、ほんとうなのよ。」

スノークのおじょうさんはそういって、こわさで目を黒くしながら、ムーミントロールを、じっと見つめました。

ぽとっ、ぽとっと、ふたりの近くで、さびしく、黒い水面へ、つゆがしたたりおちています。花びらは、ゆうべのうちに、すっかりちってしまっていました。おまけに、ひどいさむさです。

# 第 5 章




## 劇場で口ぶえをふくと、どうなるか

スノークのおじょうさんは、さむけがして目をさましました。前がみが、ずぶぬれでした。きりがえんまくのように、木々のあいだにたちこめていて、ちょっとはなれると、なにもかもがかすんで、灰色のかべの中に見えなくなっていました。しっとりとした木のみきは、まっ黒です。けれども、その上にはえているこけなどは、ほんとにあかるい色になって、いたるところに、きれいな花もようをつくっていました。

スノークのおじょうさんは、まくらに顔をおしつけて、いままで見ていたたのしいゆめを、見つづけようとしました。おじょうさんは、とてもか

むって、客間の中は、しずかな夜になったのでした。

おそらく、一時間ほどたったでしょう。

そのとき、ねずみ色のかげが、ゆかの上をしのんでいって、たべものべやのそばにたちどまったのです。それは、エンマでした。年おいた力をふりしぼり、それにじぶんのはらだちをあわせて、かの女は、ムーミンパパのステッキを、たべものべやにあけられたあなから、ひきぬきました。そして、ステッキともやいづなを、思いきり遠く、海の中へなげすてたのです。

「むちゃだよ。プロンプターの箱にさ！」

エンマは、ひとりごとをいいながら、ついでにテーブルの上から、さとう入れをとって、ポケットへおさとうをつめ、すみっこのねどこへもどっていきました。

もやいづなをときはなされて、家は、すぐに流れだしました。青と赤のランプがついた、光りかがやくアーチは、なおしばらく、木のみきのあいだに、またたいていましたが、やがてそれもきえて、森をてらすものは、青白い月の光だけになりました。



きながら、こんなことを考えるのでした。

「どうして、なにもかも、こんなふうになるのかしら。いつも、わたしが、かなしいつまらないめにばかりあうのは、どうしてなんだろう。」

一方、ムーミンママは、その晩ねむれませんでした。

ムーミンママは、横になったままで、ゆか下の水がピチャピチャいっているのを、きいていました。なんだか心配でたまりません。エンマが、ぶつぶついって足をひきずりながら、かべのそばを、うろついているのが、きこえました。森のおくで、なにかえたいのしれないけものが、ほえています。

「パパ。」

と、ムーミンママが、そっとよびました。

「うん。」

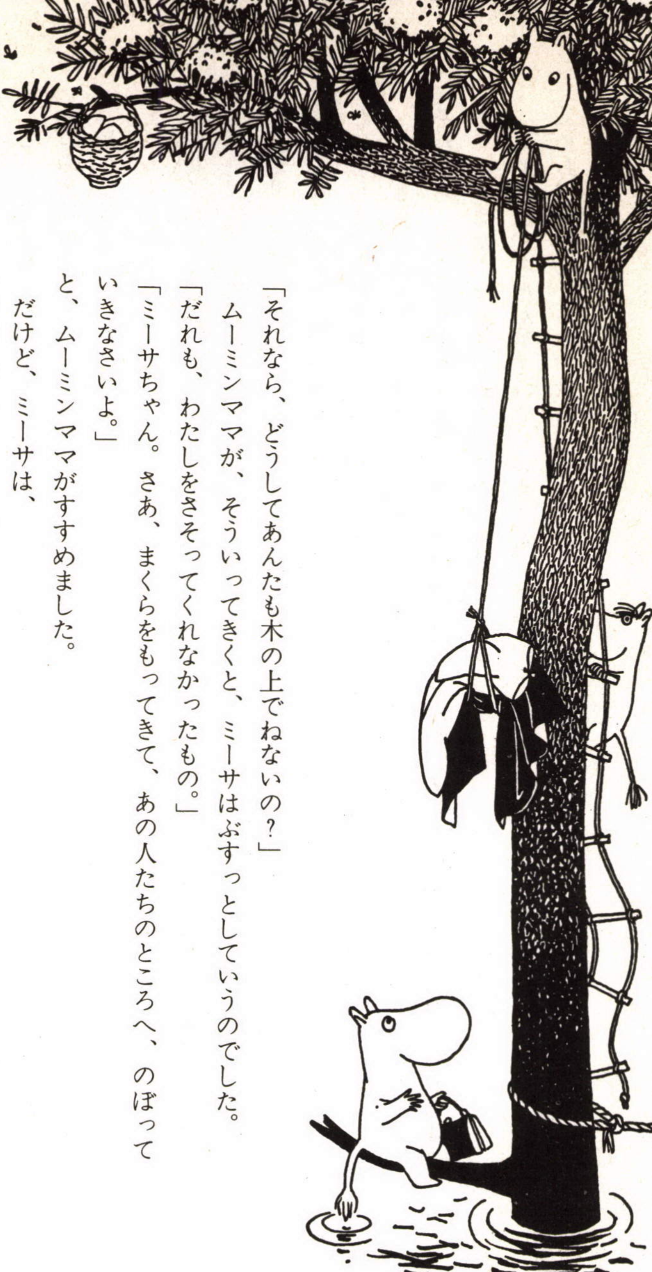
ムーミンパパが、ゆめうつつでへんじをしました。

「わたし、なんだか心配だわ。」

「なにもかも、うまくいってるじゃないか。」

ムーミンパパはむにゃむにゃいいながら、またねむってしまいました。

ムーミンママは、しばらくねむれずに、森のほうを見ていました。けれど、やがてはママもね



「それなら、どうしてあんたも木の上でねないの？」

ムーミンママが、そういってきくと、ミーサはぶすっとしていうのでした。

「だれも、わたしをさそってくれなかったもの。」

「ミーサちゃん。さあ、まくらをもってきて、あの人たちのところへ、のぼっていきなさいよ。」

と、ムーミンママがすすめました。

だけど、ミーサは、

「いいえ、わたしもう、そんなことしたくなくなったわ。」

といって、むこうへいってしまいました。そうして、すみっこへすわりこんでな

を見あげていました。ムーミン谷のわが家にいるような気がします。ムーミントロールは、なわばしごをつくることなんか考えて、いつか口ぶえをふきはじめていました。

と、たちまちエンマが走ってきて、どなりました。

「口ぶえはおよし！」

「どうして。」

と、ムーミントロールはききました。

「劇場で口ぶえをふくのは、しばいがつまらんという意味じゃ。それしきのことも、知らんのか。」

エンマは、ひくい声でいいました。それから、なおもぶつぶつもんくをいいながら、ほうきをふりふり、ものかげのあいだへ、のろのろとかえっていきました。

みんなは、なさけなさそうにエンマを見おくりました。しばらくのあいだは、気色がわるくなってしまったのです。でも、やがてそれも、すっかりわすれました。

ねるときに、ムーミンママは、毛布などを木の上へつるしあげるのを手つだってやりました。それから、ムーミントロールとスノークのおじょうさんが、あしたの朝、あけてたべられるように、ママは朝ごはんをつめたバスケットを、ととのえました。

ミーサが、それを見ていていいました。

「ああ、わたしも一ど、木の上でねたいもんだわ。」

は、小さい人なら、その上でねるのに、ちょうどいいくらいでした。
「ぼく、今夜は、この木の上でねるよ。」
と、ムーミントロールが、とつぜんいいました。
「わたしもよ。」
と、スノークのおじょうさんが、すぐにいいました。
「あたいだって！」
と、ちびのミイが、どなりました。
「わたしたちは、家でねるのよ。」
ミムラねえさんが、きっぱりといいました。
「あそこには、ありがいるかもしれないのよ。さされたら、どうします？　からだがはれあがって、オレンジよりも大きくなっちまうわよ。」
「でも、あたい、大きくなりたいんだ。おっきくなりたい、おっきくなりたあい！」
と、ちびのミイは、さけびました。
「さあ、おとなしくしなさい。でないと、モランにつれていかれるわよ。」
と、ねえさんはいいました。
ムーミントロールは、ずっとたったままで、みどりの屋根(やね)のようにしげっている、木のこずえ

ムーミン一家の興奮ぶりといったらありません。みんなは、エンマのこわいこともわすれてしまい、水ぎわにおりて、ねっしんに話しあいました。身ぶり手ぶりをまじえながら。

それからみんなで、大きななかまどの木に、水にうかんだ家を、つなでくくりつけました。ムーミンパパが、じぶんのステッキに、もやいづな（船をつなぐつな）をしっかりゆわえて、そのステッキを、たべものべやの屋根へ、まっすぐにつきさしたのです。

「プロンプターの箱の屋根を、こわすでないぞ！　これは、劇場なのか、それとも、船つき場なのかい。」

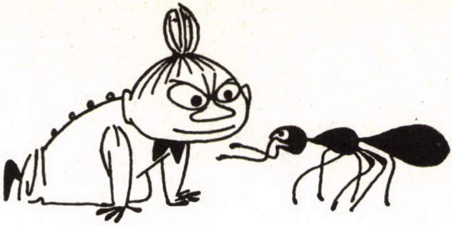
と、エンマがどなりました。

「エンマさんがおっしゃるんだから、劇場でしょう。ですが、われわれの中には、劇場ってどういうものなのか、知ってるものがおらんのですよ。」

と、ムーミンパパは、おとなしく答えました。

エンマは、へんじをせずに、まじまじとムーミンパパの顔を見つめました。そしてくびを横にふり、あきれたようにかたをすくめると、あらい鼻息をたてました。それからまた、そうじをつづけたのでした。

ムーミントロールは、その大きな木を見あげていました。白い花のまわりには、みつばちや花ばちがブンブンうなっています。みきもうつくしくえだをさしのべていて、そのえだのわかれめ



「あそこには、うんと古くなったにしんしかありません。それも、小さいのが一ぴきだけです。」
ホムサが、もどってきて、いいました。
エンマは、ホムサの手からにしんをひったくると、頭はそびやかし、足はひきずって、もとのすみっこへかえっていきました。そこで長いあいだごとごとやっていましたが、とうとう大きなほうきをひっぱりだして、あらっぽくそうじしはじめたのです。
「劇場って、なんですの？」
ムーミンママが、心配そうに、小声でききました。
「わしも、知らんのだ。どうやら知ってないと、いかんことらしいな。」
と、ムーミンパパはいいました。
その晩、なかなかまどの花のかおりが、客間の中までつよくにおってきました。小鳥たちが、天じょうの下のくもをつかまえに、とびこんできました。そして、ちびのミイは、客間のじゅうたんの上で、大きなおそろしいありにであいました。だれも気がつかないうちに、みんなは森の中へ流れついていたのです。

「ホムサさん。エンマさんになにかおいしいものがのこってないか、たべものべやへ走っていってきてちょうだいな。」

ホムサは、走っていきました。

「たべものべやだと！」

エンマが、大声をあげました。

「たべものべや！　おまえさんがたは、プロンプター（役者にそっとせりふを教える人＝かげの声）のかくれるとこを、たべものべやと思うとる！　舞台を客間と思い、書きわりを絵だと思うとる！　どんちょう（芝居の幕）がカーテンで、小道具（芝居で使ういろいろなもの）を、レクビシータという人間だと思うとる！」

エンマは、顔をまっかにして、おでこまでつづくくらい、鼻にしわをよせました。

「わたしゃあ、うれしいよ。舞台監督のフィリフヨンクさんが、おまえさんがたを見ずにすんで、わたしゃあ、うれしいよ！（フィリフヨンクさんよ、お墓でしずかにやすんでください。）おまえさんがたは、芝居のことを、なんにも知らん！　ただ知らんちゅうよりも、もっと知らんのじゃ。知らんということも、知らんのじゃ！」

エンマは、こうさけびました。

ているような――。もし、わたしが世界でいちばんすてきなミーサだったら、すっかりようすがかわるんだけど……。」
と、ミーサは、おさらの中へかがみこんで、ぼそぼそいうのでした。
「そうね。だけど、あんたは、そうじゃないんだから。」
ミムラねえさんはそういって、たべつづけました。
「エンマさんのご家族は、たすかりましたの？」
ムーミンママは、やさしくたずねました。
エンマは、へんじもしないで、じっとチーズを見ています。……そして、いきなり手をのばしたかと思うと、チーズをポケットへつめこみました。それから、だんだん目をうつして、一きれのパンケーキを見つめました。
「それは、あたいたちのよ！」
と、ちびのミイはさけぶと、ぴょんととびあがって、パンケーキの上にすわってしまいました。
「そんな、おぎょうぎのわるいことを！」
と、ミムラねえさんが、きびしい声でいいました。ミムラねえさんは、ちびのミイを下へおろしてパンケーキからごみをはらい、テーブルクロスの下にかくしました。
ムーミンママが、あわてていいました。



と、エンマは答えました。
ムーミンパパがいいました。
「エンマさん、おかけになりませんか？　この家があれているもんで、それで、わたしらは……。」
「家だと！」
エンマは、パパのことばをさえぎって、
「家！　これは、家ではないわい。」
と、せせらわらいました。それから、びっこをひきひき、夕ごはんのテーブルへ近づきましたが、すわりませんでした。
「あの人、わたしにおこってるの？」
ミーサが、そっといいました。
「あんた、なにかしたの。」
と、ミムラねえさんがききました。
「なんにもしやしないわ。ただ、そんな気がするだけなのよ。いつでも、だれかがわたしのことをおこっ

「ママ、あのね……。」
といったまま、きゅうにだまりこくってしまって、ドスンとさとう入れをおとしたのです。
「見てごらん、あれを！」
と、ムーミントロールは、声をひそめました。
みんな、ふりむいて、そっちを見ました。
一つのかげが、うすぐらいすみからでてきていました。なにかねずみ色で、しわくちゃなものが、お日さまの光のまぶしさに目をしばたたきながら、ゆかの上をのそのそ歩いてきたと思うと、口ひげをふるわせて、みんなをうらめしそうにながめたのです。
それは、年とった女の劇場ねずみで、
「わしは、エンマという名まえじゃ。」
と、おもおもしく名のってから、いいました。
「わしは、おかゆがきらいなのを、知らせてやりたいと思うてな。おまえさんらは、これで三日もおかゆをたべとる。」
「あしたは、オートミールにしますわ。」
と、ムーミンママが、おずおずといいました。
「わたしは、オートミールもきらいじゃ。」

「いったい、わたしたちのまえには、どんな人たちがここに住んでたのかしら。千ちゃくものドレス！　ぐるぐるまわるゆかや、天じょうにあるたくさんの絵や、物置べやにおしこんであるがらくた――紙でつくった家具や、おかしな雨や。いったい、どんな人たちだったと思う？」

こう、スノークのおじょうさんがいいました。

ミーサは、あのきれいなまき毛のことを考えてためいきをつきました。

けれども、ミーサとスノークのおじょうさんのうしろ、あの紙のしゅろの木の裏の、ほこりにまみれたがらくたの中には、ゆだんなく光っている、小さな目玉が二つあったのです。その目は、ばかにしたようにふたりをながめ、それから、客間の家具のほうへうごいていって、おかゆをテーブルの上へならべている、ムーミンママの上にとまったのでした。目玉は、いっそう黒くなって、その下の鼻にしわがより、音のない鼻息をもらしました。

「ごはんができましたよ。」

と、ムーミンママがよびました。ママは、おかゆのはいったおさらを一つもっていって、しゅろの木の下の、ゆかの上におきました。

みんな、走ってきて、夕ごはんのテーブルをかこみました。

「ママ。」

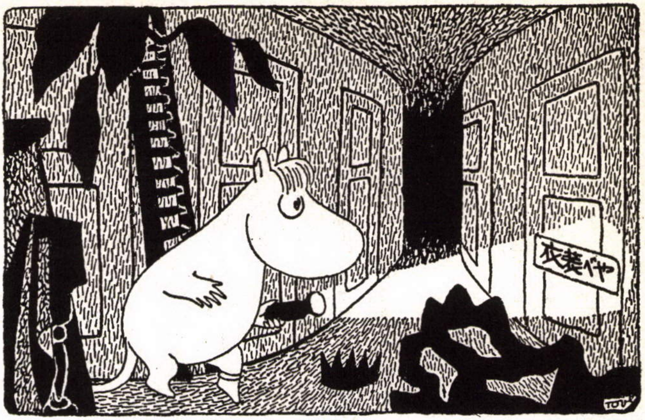
と、ムーミントロールがいって、おさとうのほうへ手をのばしましたが、

と、ミーサは、大きな声をだしました。
「そうよ。へんでしょ？　でも、ドレスがたくさんありすぎたのよ。あれを、ぜんぶきてみることは、とってもできないし、どれがいちばんきれいかも、わたしには、きめられなかったの。ドレスがこわくなったくらいよ。もし、あそこに二ちゃくだけあったのだったら、どっちがきれいだか、すぐにきまったでしょうけどね。」
「そのほうが、ずっとましだったわね。」
と、ミーサもすこしあかるい顔になって、あいづちをうちました。
「だから、わたし、ぜんぶほっぽりだして、にげてきたの。」
スノークのおじょうさんは、こういって話しおわりました。
しばらく、ふたりは口をとじたままで、ムーミンママが、夕ごはんのしたくをしているのをながめていました。



はなすと、ちょっとのあいだ、さかだちしたのです。それからそっとつぶやきました。
「すこし気をおちつけないとね。そうしないと、わたし、しあわせで破裂しちゃうわ。あんまりたくさんありすぎて……。」

夕ごはんのまえ、ミーサは客間のすみにすわりこんで、かなしみにしずんでいました。
「あら、ここにいたのね。」
スノークのおじょうさんは、こういって、となりにこしをおろしました。
ミーサは、流し目で見ただけでへんじもしませんでした。
スノークのおじょうさんが、話しかけました。
「わたし、洋服をさがしにいったの。そしたら、なん百ちゃくも見つかったもので、すごくうれしくなっちゃったわ。」
ミーサは、なんともいえないうなり声をたてました。
「千もあったかもしれないわ！　わたし、うんとうんと見て、うんとうんとからだにあわせてみたのよ。そしたら、だんだんかなしくなっちゃったわ。」
と、スノークのおじょうさんは、つづけました。
「あんたが！」




べられて、なん列も長々とつりさがっているではありませんか。色とりどりのにしきのドレスも、うすぎぬやはくちょうの毛のドレスも、やわらかくふくらんだ、花もようのきぬのドレスもあります。まっ黒なビロードのドレスも、どこもかしこも、きらきら光って、それがつぎからつぎへとさまざまの色にかわる、金ぴかのドレスもありました。

近づいてみると、スノークのおじょうさんは、もうぼうっとなってしまいました。指でドレスにさわってみ、それからうでいっぱいにドレスをかかえて、それを鼻におしつけたり、むねにだきしめたりしました。ドレスはサラサラと鳴って、ほこりと香水のにおいをたてました。やわらかいドレスたちは、スノークのおじょうさんを、ふしぎなゆたかさの中につつみこみました。

ふいにスノークのおじょうさんは、ぜんぶを手から

した。それは、すばらしく黒くて、なみだのように光るこまかい金のつぶをちりばめた、まき毛でした。ミーサは息をとめて、それを頭にかぶりました。それから、じいっとかがみの中のじぶんをながめました。それからまた、のろのろとそのまき毛をぬいで、へなへなとすわりこみ、ゆかに目をふせたのです。

スノークのおじょうさんは、足音をしのばせて、ろうかへひきかえしました。ミーサがひとりきりでいたがっているのが、おじょうさんには、いたいほどわかったからです。

けれども、スノークのおじょうさんは、みんなのいるところへは、もどりませんでした。それというのは、うっとりするようなすてきなにおい、おしろいのにおいがしてきたからなんです。懐中電燈の光にてらしだされるまるい部分が、かべを上へ下へとはいあるき、しまいに、「衣装べや」という文字の上にとまりました。

「きもの！　洋服！」

スノークのおじょうさんは、小さく声にだして、ドアのハンドルをまわすと、中へはいりました。

「あらまあ、すてき！　ほんとに、なんてきれいなんでしょう。」

スノークのおじょうさんは、むねがどきどきしました。

ドレス、ドレス、ドレス。ドレスばかりが、見わたすかぎり、いく百となく、ぎっしりとなら

だけど、ミーサは、へんじをしません。ほそめにあいているドアから、ほそい光のすじがもれているのを、スノークのおじょうさんは見ました。そこで、中をのぞいてみたくなって、小走りにとんでいきました。

中には、ミーサが、すっかり見ちがえるようなかみの毛をつけて、すわっていました。

長くて黄色いらせん形（がた）のまき毛が、ミーサのふさぎこんだ顔を、ふちどっていました。

ミーサは、かがみの中を見て、ためいきをつきました。それからまた、べつのうつくしい、赤くみだれたかみの毛をつけて、前がみを目のところまでたらしました。だけどやっぱり、たのしい顔つきにはなりません。

とうとうミーサは、さいごまでのこしておいた、いちばんすきなまき毛を、ふるえる手でとりあげま



「そう、わたしはきてるわよ。」
と、ミムラねえさんは気にかけないで、
「ねえ、ホムサ。スノークのおじょうさんは、きものがいると思う?」
とききました。
「そうね、さむいと思うんなら。」
と、ホムサがいいました。
「さむくはないわ。そうじゃなくて——。」
スノークのおじょうさんは、いいわけをしました。
ホムサが、ことばをつづけました。
「でなけりゃ、雨がふったときにね。しかし、それなら、レーンコートをかったほうがいいな。」
スノークのおじょうさんは、くびを横にふりました。それからしばらくぐずぐずしていました
が、やがて、
「わたし、ミーサのところへいって、なかなおりしてくるわ。」
というと、懐中電燈をもって、小さいろうかへはいっていきました。
ろうかには、だれもいませんでした。スノークのおじょうさんは、そっと、よんでみました。
「ミーサ? わたしね、やっぱり、まん中でわけたあんたのかみが、すきよ……。」

した。それがいっぱいならんで、どれもみな、かべのほうをむいています。
（もし、あれがこっちをむいたら……。）
ミーサは、思わずうろたえました。
（こっちを見たら、どうしましょう！）
ミーサは、おびえきって、うごくこともできませんでした。ただただ、まほうにかけられたように、目をまんまるに見ひらいて見つめるばかりでした。その頭にくっついている金色のまき毛や、黒いまき毛や、赤いまき毛を……。
そのあいだ、スノークのおじょうさんは、客間にすわって、しずみこんでいました。
「ミーサのことなんか、気にしないこと！　あの人、いつでもすぐにのぼせあがるのよ。」
と、ミムラねえさんがいいました。
「でも、ミーサのいうとおりだわ。」
スノークのおじょうさんは、そうつぶやいて、じぶんのおなかに、目をやりました。
「わたし、洋服をきるべきね。」
「おやおや、ばかなことといわないでよ。」
と、ミムラねえさん。スノークのおじょうさんが、いいかえしました。
「あんたは、洋服をきてるくせに！」

「それとも、小さなまき毛が、いっぱいあればね。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
そのときだしぬけに、ミーサが、ゆかの上で、じだんだをふんだのです。そして、目にいっぱいなみだをためて、さけびました。
「あんたたちの、古ぼけたわた毛が、なんだっていうのよ！　なんでも、知ったかぶりしてさ。スノークのおじょうさんなんか、洋服もきてないじゃないの。わたしは、けっして、けっして、きものをきないでは歩かないわ。きものなしに歩くくらいなら、死んだほうがましよ！」
ミーサはわっとなきだすと、客間を横ぎって、ろうかへかけこみました。なきながら、よろめきすすんでいきましたが、きゅうにこわくなって、ぴたりと足をとめました。あのぶきみなわらい声を、思いだしたのです。
ミーサはなくのをやめて、びくびくしながら、手さぐりでひきかえしてくると、いっしょうけんめいに、客間のドアをさがしました。さがすのが長びくのにつれて、こわさがつのります。やっとドアを見つけて、それをぐっとあけました。
ところが、ミーサがとびこんだのは、客間ではなくて、まるきりべつのへやだったのです。うすぐらいあかりにてらされたへやで、その中に頭ばかりが、ずらりとならんでいるのでした。みんなきりおとされた頭で、おそろしくほそ長いくびに、たくさんのかみの毛が、くっついていま

した。

「ミーサは、かみのスタイルを、かえたほうがいいわ。まん中でわけるのは、にあわないもの。」

と、ミムラねえさんがいいました。

「前がみが、ミーサにはないのよ。」

スノークのおじょうさんはそういって、両耳のあいだのやわらかな毛を、かきあげました。そして、しっぽのふさをかるくととのえて、わた毛がせなかできちんとなっているか見ようと、からだをくねらせたのです。

「すっかり、わた毛になってるって、気持ちのいいこと？」

と、ミムラねえさんがききました。

「とっても！」

スノークのおじょうさんは、きげんよく答えて、

「ミーサ、あんた、わた毛がある？」

とききました。

ミーサは、へんじをしませんでした。

「ミーサにも、わた毛があるといいわね。」

と、ミムラねえさんがいって、まげをつくりはじめました。

ときれいなことでした。思うままに、それを上へつりあげたり、下へつりおろしたりできるのです。みんながいちばんすきなのは、こまかいもようの手すりにかこまれた、ベランダの絵でした。それを見ていると、ムーミン谷を思いだすからなのです。

そんなわけでほんとうはみんな、まったく幸福なはずでした。あのきみのわるいわらい声さえしなかったなら。たのしくおしゃべりしていると、へんなわらい声がそれをじゃまして、そのたびごとに、みんな、ひどくおどかされてしまいます。「ふん。」と、鼻息だけがきこえることもありました。なにものかが、鼻を鳴らしてせせらわらいをしながら、すがたは、けっしてあらわさないのです。

ムーミンママは、ごちそうを一はちべつにとりわけて、あの紙のしゅろの木のあるうすぐらいすみへ、おくことにしました。すると、ごちそうは、いつもきれいにたべつくされてしまうのでした。

「きっと、はずかしがりの人が、ここにいるのね。」

と、ムーミンママはいいました。

「まちぶせしてる人がいるのよ。」

と、ミムラねえさんはいいました。

ある朝、ミーサとミムラねえさんとスノークのおじょうさんが、ならんでくしをつかっていま

# 第4章



## みえっぱりということ、そして木の上でねるのは、きけんであること

なん日か、すぎました。

ムーミン一家も、このおかしな家に、なれてきました。毎晩、日がしずむと、すぐにあのきれいなランプがともりました。

ムーミンパパが、赤いビロードのカーテンを、雨の日にひいたら、いいぐあいなのを見つけました。ゆかの下に、小さなたべものべやがあることも、見つけました。そこの屋根はまるくて、まったく水の下にもぐっていますから、たべものをつめたくしておけました。

けれども、いちばんすごい発見は、天じょうに絵がいっぱいあって、かばの木の絵よりも、もっ

「ええ――お月さまが……。」
ミーサは、よわよわしくいって、鼻をすすりました。
「お月さまと、夜と、なんともいえないかなしさが……。」
「うん、うん。」
と、ホムサはいいました。



こう、ムーミンママは思いました。でもムーミンママは、ふとんにくるまるまえに、いそいでいったのでした。

「なにかおこったら、きっと、おこしてね。」

その晩おそく、ミーサは水ぎわへおりて、ひとり歩きをしました。月がのぼって、さびしく夜空をさんぽしはじめたのが、見えました。

(お月さまって、わたしみたいね。)

と、ミーサはむねをしめつけられる思いで、考えにふけりました。

(ほんとにひとりぼっちで、こんなにまるくて……。)

すると、じぶんがいよいよみじめで、かわいそうに思われ、ミーサは、すこしばかりなみだをこぼさずにはいられませんでした。

「どうして、ないてるの。」

と、ホムサがそばによってきて、たずねました。

「わからないわ。とっても、きれいだからよ。」

と、ミーサは答えました。

ホムサは、なっとくしませんでした。

「だって、人はかなしいときになくものだろ。」

「どうも、ごちそうさまでした。」

と、ホムサがいいました。それからホムサは、客間のはしまで歩いていくと、うすくらがりの中を見つめて、考えました。

（どうも、ここの連中は、ぼくとまるっきりちがうなあ。あいつらは、ものを感じるし、色も見えれば、音もきこえ、あばれまわりもする。ところが、なにを感じたり見たりきいたりしたかも、なぜあばれまわるかも、ぜんぜん気にしちゃいないんだ。）

いまは、お日さまのいちばんはしっこも、海のかなたに見えなくなりました。

すると、それとどうじに、客間の中ぜんたいが、ぱっとてらされたのでした。

ムーミン一家のものたちは、ぎょっとして、それぞれの紅茶茶わんから、顔をあげました。頭の上に、いくつものランプが、にじをかけたように、かがやいていました。赤いのと、青いのとが、かわりばんこに、くみあわされています。それは、夜の星でできたじゅずになって、夕ぐれの海にくっきりと、うつっていたのです。たいそううつくしい、そして、なごやかなながめでした。下のゆかのふちにも、一列にならんだあかりが、ともりました。

（これは、人が海の中へおっこちないようにしてあるのね。人生って、やっぱりちゃんとしたものだわ。でも、あんまりかわったことばかりつづいたので、わたし、すこしつかれてしまったわ。もう、とこにはいりましょうよ。）

その外がわを、鏡台やたんすやらが、いっしょになって、ぐるぐるまわるのです。

ふいに、ぴたりととまりました。はじめもとつぜんでしたが、おわるのも、とつぜんでした。

かみなりも、いなびかりも、雨も風も、やみました。

「ほんとに、ふしぎな世の中だこと！」

ムーミンママは、つぶやきました。

「どこかが、まちがってる！」

と、ホムサが大声をあげました。

「雲なんか、でていなかった。それに、かみなりがたんすに三回もおちたのに、なんにもこわれてませんよ！　しかも、雨も風もきゅうにおこって……。」

「あの人、わたしをわらったんだわ！」

と、ミーサがさけびました。

「だけど、もうなにもかもおわったんだよ。」

と、ムーミントロールはいいました。

「これからは、うんと気をつけることにしよう。この家は、なにがおこるかわからない、おそろしいばけものやしきなんだ。」

ムーミンパパが、そういいました。

といって、パンにバターをぬりはじめました。

チーズをおなじ大きさにきっているさいちゅうに、はげしいにわか雨がふってきました。つよい風がおこって、家のすみずみがかなしそうにうめきました。

みんな、外を見ました。すると、きらきらかがやいている夏の海に、お日さまが、しずかにしずんでいくところでした。

「ここでは、たしかに、なにかがくるってるぞ。」

と、ホムサが興奮して、いいました。

いまは、あらしになりました。遠くの海岸に、大波のくだける音が、きこえます。雨は、どしゃぶりでした。ところが、むこうのほうでは、あいかわらず、いい天気なのです。すると、こんどは、かみなりが鳴りだしました。はじめはゆっくりと、ゴロゴロいっていましたが、だんだん近づいてきて、白いいなびかりが、ぴかっぴかっと客間を走りました。そして、一つ、また一つと、ムーミン一家の頭の上で、とどろきわたるのでした。

それなのにお日さまは、なにごともなく、平和にしずんでいきました。

そのうちに、ゆかがまわりだしたのです。はじめは、ゆっくりでしたが、だんだんスピードがはやくなって、お茶が紅茶茶わんから、こぼれだしました。テーブルも、いすも、家族のみんなも、まるでメリーゴーラウンドにのっかっているみたいに、ぐるぐる、ぐるぐる、まわりました。

と、ムーミンママはいいました。

それからムーミンママは、紅茶茶わんに、お茶をつぎはじめました。

ちょうどそのとき、だれかがわらったのです。

それは、あざけるような、たいそう年とった人のわらい声で、紙のしゅろの木がある、うすぐらいすみから、きこえてきました。

長いあいだ、だまりこんでいたあとで、ムーミンパパがききました。

「なぜ、わらうんだね。」

まえよりも、いっそう長い沈黙が、つづきました。

「あなたも、お茶をおあがりになりません？」

ムーミンママが、あやふやにたずねました。

むこうのすみは、やっぱりしずまりかえっていました。

「きっと、わたしたちよりまえに、ここに住んでいた家族の人ね。どうして、あいさつにでてこないのかしら。」

と、ムーミンママがいいました。

みんな、長いあいだまちましたが、なにもおこりません。そこでムーミンママが、

「みんな、お茶がさめてしまいますよ。」

なものが、天じょうからおちてきたんだわ！」

と、ミーサがさけびました。

「そしたら、きゅうに、客間のまん中にいなかのけしきがでてきたのよ。はじめ、わたしたち、それをほんとのものだと思ったわ。あんたが木立をくぐってでてくるまではね。」

と、スノークのおじょうさんが、話してきかせました。

ミムラねえさんはふりかえって、うしろを見ました。

なるほど、みどりのしたたるかばの木が、青い青いみずうみに、すがたをうつしていました。

安心したホムサの顔が、草の中からつきでました。

「まあまあ、よかったよ。わたしは、カーテンのひもだと思って、ひっぱったんです。そしたら、こんなものが、上からおちてきてね。だれも、ぺしゃんこにならなくて、よかったこと！　マーマレードは見つかりましたか。」

ムーミンママが、そういいました。

「いいえ。」

と、ホムサが答えました。

「まあ、とにかくお茶をのみましょうよ。この絵を見ながらね。すばらしくきれいな絵だわ。ただ、しずかに見せてほしいものね。」



は、布ぎれだったみたいに、ビリビリッと音をたてました。そして、ホムサが思いきって目をひらくと、あなから日の光が見えたのでした。

「あんた、いったい、なにをしたのよ。」

と、ミムラねえさんが、たずねました。

「レクビシータをころしたんです！」

　ホムサは、ふるえながらへんじをしました。

　ミムラねえさんはわらって、そのあなをくぐって客間へはいりました。そして、

「みんな、なにをしでかしたの？」

とききました。

「ママが、つなをひっぱったんだ！」

と、ムーミントロールが、どなりました。

「そしたら、なんだかこわいこわい大き

（ああ、ぼくがもうちょっとかしこいか、もうちょっと年をとってればなあ。）
と、ホムサは思いました。
ミムラねえさんが、いいました。
「わたし、ここがすきだわ。ほんとうに、なんにも意味がないんだもの。」
すると、ちびのミイがききました。
「そんなばかなことがあるの？」
「そうよ。ばかなこと、きかないで！」
ミムラねえさんは、ほがらかにへんじをしました。
そのとたんに、だれかが鼻を鳴らしたのです――大きく、まるでばかにしたように。
三人はびっくりして、顔を見あわせました。
「ぼく、あっちへいきますよ。こんなものばかり見てると、ゆううつになるもの。」
と、ホムサがつぶやきました。
そのとき、客間のほうでドスンと大きな音がして、たなからほこりがまいあがりました。ホムサは、刀をひっつかんで、ろうかへとびだしました。ミーサの悲鳴が、きこえました。
客間はまっくらでした。なにか、大きくてやわらかいものが、ホムサの顔にドサッとおちてきました。ホムサは目をつむって、すがたのない敵に、まっすぐ木の刀をつきたてました。その敵

と、ミムラねえさんは、いってきかせました。
ホムサは、マーマレードをさがしまわりました。
「まあ、ジャムでもいいとしようか。」
こういって、一つのびんを指さしました。
「あれは、せっこう細工よ。」
と、ミムラねえさんがいいました。そして、じぶんはりんごを一つとって、かじったと思ったらさけびました。
「あっ、これは木だわ！」
ねえさんのことばをきいて、ちびのミイはげらげらわらいました。



しかし、ホムサは、気がおもくなりました。まわりにあるのは、見せかけの品ばかりで、きれいな色でだまかすけれど、手でさわってみると、ただの紙だったり、木だったり、せっこうだったりするのです。金のかんむりには、どっしりした重さがありません。花だって紙の造花でした。バイオリンには弦がありませんし、箱には底がないし、本はひらいて見ることができないのです。
じぶんのしょうじきな心をきずつけられて、ホムサは、これはいったいどういうわけなのだろうかと、考えこみました。でも、さっぱりわけがわかりません。

つけました。

ミムラねえさんがくびをのばして、苦労したすえに、やっとドアの標札をよみました。レ、ク、ビ、シ、タと、よめました。「レクビシータ。」これは、ほんとにわるものの名まえです！

ホムサが勇気をだして、ドアをノックしました。三人は、息をころしてまちましたが、レクビシータのやつはるすでした。

そこでミムラねえさんが、ドアをおしあけました。

こんなにたくさんのものを、一どに見たのは、三人ともはじめてでした。そのへやはゆかから天じょうまでたなになっていて、およそたなにのせられるものは、なんでもかでも、それこそごちゃごちゃとならべられていました。くだものをいれた大きなはちが、おもちゃやランプやせとものと、おしくらまんじゅうをしているかと思うと、いくつもの花にはさまって、鉄のよろいやかぶとがあります。なにかの道具も、はくせいの鳥も、本も、電話も、せんすも、バケツも、鉄砲も、地球儀も、ぼうしの箱も、とけいも、手紙はかりも、それから、まだまだならんでいました。

ちびのミイが、ミムラねえさんのかたからたなの上へ、ぴょんととびうつりました。そして、かがみをのぞきこんで、さけびました。

「あれ！　あたい、いつもより小さくなっちゃったよ！　かがみの中に、ちっとも見えない！」

「これは、ほんとうのかがみじゃないの。あんたは、ちゃんといるわよ。」

ちびのミイが、もったいぶっていいました。

「いったい、どこで？」

と、ホムサがききました。

ミムラねえさんが、うすぐらいすみを指さしましたが、そこは天じょうまで、がらくたでうずまっていました。一本のしゅろの木が、かべにもたせかけてあって、紙でこしらえたその葉っぱが、うらがなしくカサカサと音をたてていました。

ちびのミイが、声をひそめていいました。

「わるものよ！　わたしたちを、みなごろしにしようと、まちぶせてるの！」

「まあ、おちついて。」

と、ホムサはいいましたが、のどにひっかかったような声でした。

ホムサは、あいたままの小さなドアのところへすすみよって、そっとにおいをかぎました。のぞいてみると、ろうかが見えて、うすきみわるく、それがまっくらやみの中へつづいています。

「ここのどこかに、たべものべやがあるらしいぞ。」

と、ホムサがいいました。

三人は、はいっていきました。すると、ろうかに小さなドアが、たくさんならんでいるのを見

ホムサは考えました。

「だれか、ぼくをからかってるやつがいるな。しかし、そいつをおもしろいやつだとは思わんぞ。ドアというのは、どこかへはいるためのものだ。階段というのは、どこかへあがるためのものだ。もし、きゅうに、いぬが、さるやきつねやたぬきのまねをしだしたら、世の中はいったい、どんなことになるんだ？」

そこには、いたるところに、がらくたがありました。ボール紙や布や木でつくったふしぎなものが、おかれています。おそらく、まえに住んでいた家族が、つかれてしまって、屋根裏へはこびあげなかったのか、とちゅうでなげだしてしまったものでしょう。

「なにを、さがしにきたの。」

ミムラねえさんが、たなも裏ばりもない戸だなの中から、すがたをあらわしてたずねました。

「マーマレードですよ。」

と、ホムサは答えました。

「ここには、なんでもあるわよ。マーマレードだって、ないはずがないわ。ここには、すごくおかしな家族が住んでいたらしいの。」

と、ミムラねえさんがいいました。

「わたしたち、その中のひとりを見たわよ。見られるのを、いやがってるみたい！」

れてきてしまったのに気づきました。

「ああ、こまった！　ムーミントロールは、お茶とマーマレードをいっしょにたべるのがすきなのに、そのマーマレードを、わすれてきちゃうなんて。」

と、ムーミンママはいいました。

すると、ホムサが、たすけぶねをだしました。

「ここに住んでた人たちも、マーマレードをもっていくのを、わすれたかもしれませんよ。つつむのが、たいへんだったとか、でなければ、びんの中にマーマレードがあんまりのこっていなくて、わざわざもちだすほどじゃなくてね。」

「あの人たちのマーマレードが、いまごろ見つかるでしょうか。」

ムーミンママは、うたがわしそうにいいました。

「わたしがさがしてみます。どこかに、たべものべやがあるはずだと、思うんです。」

こうホムサはいって、暗やみのおくへ、歩いていきました。

ゆかのまん中に、ぽつんと一つドアがあるのです。ホムサは、順序として、まず、それをとおりぬけました。すると、おどろいたことに、そのドアは紙でできていて、裏がわには大きなストーブの絵がかいてあったのです。つぎに、階段をあがってみますと、それは中途までしかありませんでした。


Tove.

みんなは、ゆっくりとムーミン谷を、ただよっていきました。けれども、「おさびし山」への道にはいるときにも、まだ旗が、水の上につきでたあかるい点のように、小さくひるがえっているのが見えました。

ムーミンママは、このあたらしい家で、夕がたのお茶のしたくをしていました。

大きな客間の中では、お茶をのむテーブルが、はじめはなにかぽつんとさびしそうに見えます。まわりを、いすや鏡台やたんすがとりまいていますが、それらのうしろは、暗やみと沈黙とほこりの中に、へやが見えなくなってしまっているのです。そして、おちついたシャンデリアが、赤いふさのふちかざりをつけて、つりさがっているはずの天じょう——その天じょうが、中でもいちばんへんてこでした。

ひみつにつつまれたものかげの中に見えなくなっていて、その上で、なにかがゆれうごいているのです。なんだか大きくてぼやけたものが、水の中にうかんでいる家のうごくのにつれて、ゆらゆらとゆれるのです。

「ここには、わけのわからないことが、いっぱいあるわ。だけど、ほんとうは、なんでもじぶんのなれているとおりにあるんだと思うほうが、おかしいのじゃないかしら？」

こうムーミンママは、ひとりごとをいいました。

テーブルの上にだした紅茶茶わんの数をかぞえていて、ムーミンママは、マーマレードをわす

ママはとてもゆったりした気分になりました。このへんてこなへやも、たちまち、住みごこちがよくなったのです。ムーミンママははればれした気持ちで、ゆりいすにこしかけ、カーテンのことや空色のかべ紙のことを、あれこれとしあんしはじめました。

「もう、あの家には、旗をたてる柱しかのこっていないのだなあ。」

と、ムーミンパパが、顔をくもらせました。ムーミンママは、ムーミンパパの手をかるくたたいて、こういいました。

「あれは、いい家でしたわ。ここより、ずっとよかったですね。だけど、すこしたてば、ここだってなにもかも、ごくあたりまえと思えるようになりますわ。」

（読者のみなさん。ムーミンママは、まったくまちがっていました。この家が、ごくあたりまえのものになることなど、けっしてないでしょうね。なにしろ、こんどうつってきた家は、ふつうのしろものではなかったのですから。また、ここに住んでいた家族だって、およそふつうとはちがう人たちだったのです。いまは、これ以上いわないことにしますけれど。）

「わたしが、旗もとってきましょうか。」

と、ホムサがききました。

「いや、あのままにしておこう。あれはあれで、とてもりっぱに見えるもの。」

ムーミンパパは、そういったのでした。

と、ムーミンママが、心配そうにいいました。
「お気のどくなご家族。どんな人たちだったのかしら。その人たちの家を、こんなふうにとっちゃうなんて、ほんとにおそろしいこと……。」
「ママ、水がふえてくるよ。」
と、ムーミンパパがいいました。
「はい、はい。それじゃ、ひっこしますわ。」
ムーミンママは、あたらしいわが家へはいあがって、あたりを見まわしました。見たところ、住んでいたのは、ちょっとだらしない人たちだったようです。でも、だれだってそうじゃないでしょうか。おまけに、ありとあらゆるがらくたが、あつめてありました。かべがおちてしまっているのは、たしかにざんねんですが、いまは夏のことですから、もちろん、たいしたことではありません。
「客間のテーブルは、どこへおいたらいいの？」
と、ムーミントロールが、ききました。
「ここのまん中がいいわ。」
と、ムーミンママがいいました。
くすんだ赤い色のモヘアやふさのついている、客間のりっぱな家具にかこまれると、ムーミン

「まあ、ひどい！」
ムーミンママは、びっくりしていいました。
だんだん、そのへんなものが、近くまで流れてきました。なにかの家であるにはちがいありません。貝がらの形をした屋根の上に、金でできた顔が、二つついていました。一つはないていて、一つはわらっています。その二つの顔の下に、半月形のへやが、のぞいていました。
そのへやは、まっくらで、くもの巣だらけです。たしかに、洪水が、かべをもぎとってしまったのにちがいありません。ぽっかりと大口をひらいたあなの両がわに、赤いビロードのカーテンがかかっていましたが、それがみじめに、水の中へたれさがっていました。
ムーミンパパは、くびをかしげながら、すみからすみまで、じろじろと見ました。それから用心ぶかく、
「だれか、いますか。」
と、声をかけました。
なんのへんじもありません。ひらいたままのドアが、海のうねりにゆられて、バタンとしまる音が、きこえました。がらんとしたゆかの上を、ほこりが玉になって、いくつもころころと、ころがっています。
「ここの人たちが、あのあらしの中で、うまくたすかっていてくれるといいけどねえ。」

どれも小さすぎました。

きゅうにムーミンパパが、ぼうしをぐっとうしろへずらして、谷の入り口のほうを、するどく見つめました。海から、なにかおかしなものが、やってくるのです。お日さまの光が目にはいって、それがおそろしいものかどうか、ムーミンパパには見わけられませんでした。

でも、大きなものです。客間の家具が十もらくらくとはいって、ムーミン一家よりも、もっと人数の多い大家族が、いっしょにのれるくらいの大きさがあるんです。

はじめ、それは、いまにもしずみそうな、大きなつぼのように見えました。それから、かたむいてたっている貝ににてきました。

ムーミンパパは、家族のほうへむきなおって、いいました。

「どうやら、うまくにげられそうだぞ。」

「もちろん、うまくにげられますとも。わたしはここであたらしい家がくるのを、まっていたんです。ひどいめにあうのは、わるい人たちだけですよ。」

ムーミンママは、そんなへんじをしました。

「そういわないでください！」

と、ホムサが大声をあげました。

「一どもあぶないめにあったことのないわるい人たちを、わたしは知っていますよ。」

れのないベッドだって、あってもうれしくないでしょ?」
と、ムーミンママはぼやきました。
「そのとおりさ。」
と、ムーミンパパもさんせいしました。
「鏡台があると、とてもいいんだけど。朝おきてかがみにむかうのは、たのしいことですものね。」

ムーミンママは、おだやかにいいましたが、
「それから……。」
と、しばらくして、つけくわえました。
「ねいすがあると、いつも、昼から横になって考えごとができるから、いいんですけどねえ。」
「いや、ねいすはだめだ。」

ムーミンパパが、きっぱりといいました。
「じゃ、しかたがありませんわ。」
と、ムーミンママは答えました。

根こそぎにされた草や木が、流れていきました。手おし車やこねばちも、うば車や魚のいけすも、さんばしやさくも、ぷかぷかういていきました。からっぽのもあれば、家をうしなった人たちが、ぎゅうぎゅうづめに、のっているのもありました。けれども、客間の家具をのせるには、

# 第3章



## ばけものやしきに住みつく

　ムーミンママは、ハンドバッグと、さいほうかごと、コーヒーポットと、家族のアルバムをかかえて、屋根の上にすわっていました。ときどき、高いところへうつって、ふえてくる水をよけていました。ムーミンママは、しっぽを水にぬらすのが、きらいなんです。とくに、いまはお客さんもいることですからね。

「こまったことに、客間の家具は、ぜんぶはだせないぞ。」

と、ムーミンパパがいいました。

「あなた、いすのないテーブルや、テーブルのないいすが、なにになります？　それに、シーツ入

だしぬけに、水がチョロチョロと流れる、かすかな音がきこえました。

「ミイ子！」

ミムラねえさんが、きびしい声でいいました。

「わたしじゃないわよ。海が、まどからはいってくるんだい！」

と、ちびのミイがいいました。

まったく、そのとおりでした。また、水かさがましてきたのです。小さな波が一つ、まど台をこえてはいってきました。そして、また一つ。

それから、じゅうたんの上へ、たきのように水がおちてきました。

ミムラねえさんは、あわてて妹をポケットの中へつめこんで、いいました。

「ほんとに、運がいいこと！　ここの家族は、みんなおよぐのがすきで！」

と、ミーサがいいました。
　ホムサはびっくりして、
「ほんとに、そう思うの？」
とききました。
　ミーサは、まっかになってしまいました。
「わたし、うそをいうつもりじゃなかったんです。でも、そういったほうが、きれいにきこえると思って。」
　しばらく、だれもが口をききませんでした。
「ここは、ちょっとせまいんですけど。」
と、ムーミンママが、おずおずといいました。
「でも、かわったことも、いいものですわね。うちの家具が、まるでちがって見えますわ……、とくに、上と下とが反対になってますとね！　それに、水がとってもあたたかくなりましたわ。うちのものは、みんな、およぐのが大すきですの。」
「あら、そうでしたの。」
と、ミーサは、ていねいにいいました。
　また、ことばがとだえました。

と、ムーミンパパがいいました。

「ご紹介(しょうかい)しましょう。これが、わたしの家内(かない)。こっちが、むすこです。それから、こちらはスノークのおじょうさん。ミムラさん。ミイ子ちゃんです。」

「ミーサです。」

と、ミーサがいいました。

「ホムサです。」

と、ホムサがいいました。

「ばかみたい！」

ちびのミイが、つぶやきました。

ミムラねえさんが、いってきかせました。

「これが、紹介(しょうかい)というものなのよ。あんたは、おとなしくしていなくてはだめよ。きちんとしたお客(きゃく)さんなんだから。」

「きょうは、すこしとりちらかしていまして。こまったことに、客間(きゃくま)も水の下になってしまって。」

と、ムーミンママがおわびをいいました。

「あら、どうかおかまいなく。ここは、ほんとにいいながめですわ。それに、お天気もおだやかで、すてきになりましたしね。」

「わたしたち、おじゃましてもかまいませんか？　まだ、はやすぎます？　お昼からにしましょうか。」
「すぐ、いらっしゃいよ！　わたしは、朝のお客さんがすきなのよ。」
と、ムーミンママがいいました。
　ホムサがしばらくまっていると、手ごろな大きさの木が、根っこを水面にだして、流れてきました。ホムサは、それをしっぽでつかまえて、ききました。
「いっしょに、いきませんか？」
「いやだよ。わたしたちにゃ、用はないよ、あんなごたごたした家なんか！」
と、はつかねずみのおかみさんがいいました。
「わたしは、さそってくれないんだよ。」
と、ミーサは口をとがらせました。
　そのミーサの目の前で、ホムサが出発し、木が流れだしたのです。とつぜんミーサは、おきざりにされたという気持ちにかられて、やぶれかぶれにジャンプしてしまいました。そして、木のえだにしがみついたのでした。ホムサは、なにもいわないで、ミーサをたすけあげました。
　ふたりは、ゆっくりとベランダの屋根へついて、まどからもぐりこみました。
「やあ、おいでなさい！」

と、ミーサはいいました。

「いやはや、どうも。」

　ホムサは、しょげかえりました。

　そのあいだに、はつかねずみのおかみさんは、しっぽの毛をちゃんとそろえおわって、いまはムーミンやしきのほうへ、気をとられていました。

　おかみさんは、くびをのばしていいました。

「あの人たち、家具をひっぱりあげてるわ。ソファーのカバーは、だめになっちまったらしいよ。あの人たちは、朝ごはんをたべたんだわ！　ああ、じぶんのことしか考えない人が多いねえ。スノークのおじょうさんは、かみをとかしてるよ。わたしたちは、水びたしだっていうのに。あきれたよ。あの人たち、ソファーを屋根の上へだして、かわかそうとしてるわ。あっ、旗まであげてさ！　ほんとにかってな人が多いねえ。」

　ムーミンママが、バルコニーの手すりからのりだして、

「おはようさん！」

と、大声であいさつしました。

「おはようございます！」

と、ホムサがいっしょうけんめいに、さけびました。

おりなんだから！」
　小さなはい虫が、感心してたずねました。
「この大きな洪水は、みんなミーサをおこらせるためだけだったの？」
「そんなこと、いったんじゃないわ。」
と、ミーサは、なみだ声をだしました。
「だれかが、わたしのことを考えて、わたしのためになにかしてくれたっていいでしょ？　それなのに、この洪水ときたら！」
　ホムサが、たすけぶねをだしました。
「きっと、その木の実は、まつの木からおちてきたのだろ？　まつかさだったろうと思うんだ。そうでなければ、もみの木の実でしょうね。あなたの長ぐつは、もみの実がゆっくりはいるくらい大きいのですか。」
「わたしが大足だってことは、じぶんで知ってるわ。」
　ミーサは、やけっぱちにいいました。
「わたしは、説明しただけなのです。」
と、ホムサがいいました。
「これは、気持ちの問題よ。気持ちは、説明ではなおりません！」



「ちょいと。あんたはなんという名まえ？」
はつかねずみのおかみさんが、話のとちゅうで、口をいれました。
「ホムサです。」
その小さな動物は、おこりもせずに答えました。
「どうしてこういうことになったかを理解できれば、洪水のことだって、きわめて当然に思えるでしょうよ。」
「当然ですって！」
小さくてまるまるとふとったミーサが、声をとがらせていいました。
「ホムサは、わかっちゃいないの！　なにもかもが、わたしにつらくあたるのよ、なにもかもが！　おとといは、わたしの長ぐつにだれかが木の実をいれといて、わたしの足の大きいのを、わらいものにしたの。そして、きのうは一ぴきのヘムルが、うちのまどぎわをとおりかかって、とってもあてつけがましいわらいかたをしていったわ。そして、いまはこのと

「ママの時代には、こんなことなんか一回もおこらなかったよ！」
と、はつかねずみのおかみさんが、はげしくしっぽをふりたててさけびました。
「こんなことが、ゆるされてなるものですか！　でも、いまじゃ、時代もかわったわね。わかいものたちはすきかってなことをするし。」
一ぴきのまじめくさった小さな動物が、いっしょうけんめいにほかの連中に近づいていって、こういいました。
「わたしは、こんな大きな洪水をおこしたのが、わかいものたちだとは思いません。この谷にこれほどの大波をおこすには、わたしたちは小さすぎます。それはもう、まちがいありません。バケツか水たまりか洗面器の中に、波をおこすのがせいぜいです。でなければ、コップの中ぐらいですよ。」
「あんた、わたしをからかうの？」
はつかねずみのおかみさんは、そういってまゆをつりあげました。
「いいえ、けっしてそんなことは。」
と、まじめくさった小さな動物は、つづけていいました。
「わたしは、一晩じゅう、考えに考えたのです。風もないのに、どうしてこんな大波がおこるのか！　おもしろい問題でしょう。わたしが思うに……。」

「すてきなピクニックね。ぼうや、コーヒーポットとお茶わんもとってこれる？」
こんなにスリルのある朝ごはんは、はじめてでした。
みんながきらいだったいすを一つえらびだして、それをたきぎにしてコーヒーをわかしました。おしいことに、おさとうはとけてしまっていましたが、そのかわりにムーミントロールが、シロップを一びん見つけてきました。ムーミンパパは、びんからじかに、マーマレードをたべました。すると、だれもそんなことを気にとめないうちに、ちびのミイはドリルでパンにあなをあけて、その中へもぐりこんだのでした。
ときどき、ムーミントロールはもぐっていって、台所から、なにかいいものをとってきました。そして、けむりだらけのへやじゅうに、水をとびちらすのでした。
「きょうは、おさらをあらわないわ！」
と、ムーミンママはうきうきしていいました。
「だって、これからは、もうおさらあらいをしないことになるかもしれないでしょ？　それはそうと、客間の家具がだめになっちゃわないうちに、みんなではこびあげられないかしら？」
外には、あたたかく日がてっていました。海の潮もおだやかになっていました。たきぎ小屋の屋根の上にいる人たちも、だんだん元気をとりもどして、自然界の気まぐれに、はらをたてはじめました。

ムーミントロールがいいました。
「そんなこと、やめさせて！　ね、ね。」
と、スノークのおじょうさんが、心配そうにたのみました。
「どうして？　だめよ。この子は、いまスリルを感じているんだもの。」
ムーミンママは、そういってくれました。
ムーミントロールは、しばらくじっとたって、呼吸をととのえました。できるだけゆっくり、大きく息をすいこんで、それから台所の中へもぐっていきました。
ムーミントロールは、たべものべやへおよいでいって、ドアをあけました。中の水はミルクで白くなっていて、あちこちにすこしずつ、こけもものジャムもくっついていました。パンのかたまりがいくつか、ムーミントロールのそばをただよっていき、一たばのマカロニも、それにつづいておよいでいきました。
ムーミントロールは、バター入れをひったくって、ついでによさそうなパンを一つつかまえました。つぎには、だんろのたなのほうへまがって、ムーミンママのコーヒーかんをつかんだのでした。それから、天じょうまでうきあがって、うんと息をすいこみました。
「あらっ、ごらんなさいな！　わたし、ちゃんとふたをしめてたわよ！」
と、ムーミンママはうきうきしていいました。


Tove

ました。

たしかに、ムーミンパパも、わが家のゆかをのこぎりできるのは、すこしばかりこわかったのです。けれども、それといっしょに、ふかいまんぞくもおぼえました。

やがて、ムーミンママは、じぶんの台所を、はじめて上からながめることになりました。にぶくてらしだされている、うすみどり色の水そうの中を、ムーミンママはうっとりとのぞきこみました。だんろや、流し台や、くず入れが、水底にぼんやりと見えます。だけど、いすやテーブルは、ぜんぶ天じょうの下にぷかぷかういていたんです。

「まあ、おかしい！」

ムーミンママはこうつぶやいて、わらいだしました。あんまりけろけろわらって、ゆりいすにこしかけねばならないくらいでした。こんなふうにして台所を見たら、すっかり気分がよくなったのです。

「くず入れを、からにしておいてよかったこと！　それに、たきぎをとってくるのをわすれたのもね！」

ムーミンママは、目にたまったなみだをぬぐいながら、そういいました。

「ママ、ぼくもぐってくるよ。」

ムーミンママは、あのいやな水の中にしずんでいる、客間の階段のほうへ、目をやりました。台所のことを考えたのです。だんろのたなにのせてあるコーヒーのかんのことを思いだして、ふたをきっちりしめておいたかどうか、じぶんでじぶんにたずねました。そして、ためいきをつきました。

「ぼくがもぐっていって、コーヒーのかんをとってこようか？」

ムーミントロールがこういったのは、ムーミンママとおなじことを考えていたからでした。

「いい子ね。でもそんなに長く、息をとめてられないのじゃない？」

と、ムーミンママが心配そうにいいました。

ムーミンパパが、ふたりの顔を見て、こういいました。

「わしは、よく思うんだがね。たまには、じぶんの家を、下のゆかからじゃなく、天じょうからながめるべきだよ。」

「ふうん……。」

ムーミントロールが、うれしそうにいいました。

ムーミンパパは、うなずきました。そして、じぶんのへやへいって、手まわしのドリルとのこぎりをもってきました。

パパがしごとをしているあいだ、みんなはそのまわりにあつまって、ねっしんに見まもってい

七時に、目ざましどけいが鳴りました。

ムーミン一家のみんなは、すぐに目をさまして、外を見ようと、まどぎわへかけつけました。ちびのミイを、まど台の上へのっけて、ころげおちないように、ミムラねえさんが妹の服をつかんでいました。外のようすはすっかりかわっていました。

ジャスミンもライラックも、なくなっています。橋も川も、すっかりありません。わずかに、たきぎ小屋のさくが、水の中から頭をだしているだけでした。小屋の屋根のてっぺんには、人々がぶるぶるふるえながら、しがみついていました。きっと、森の人たちなのでしょう。

どの木も、水の中からまっすぐにのびていました。ムーミン谷をとりまく山なみは、ばらばらにきりはなされ、いくつかの島があつまっているように見えました。

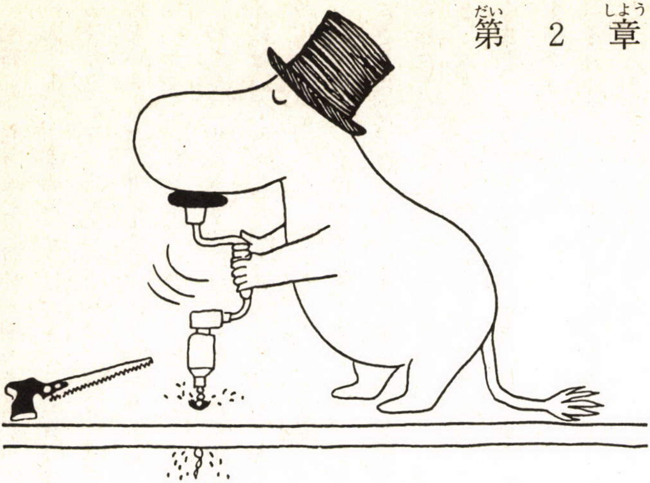
「わたしは、まえのほうがすきだよ。」

と、ムーミンママがいいました。そして、こんなかわりはてた光景の中から、のぼってきたお日さまを、まぶしそうにながめました。夏のおわりごろのお月さまのように、赤くてとても大きなお日さまでした。

「それはそうと、朝のコーヒーがないよ。」

と、ムーミンパパがいいました。

# 第2章



## 朝ごはんをさがしにもぐる

やっと、朝がもどってきました。ほそい一本の光のすじが、あかるくなってきた水平線の上をゆっくりさまよったすえに、高くのぼりました。

おだやかに晴れわたった天気でした。けれども、海の波はたけりくるって、あたらしい浜べにうちよせていました。そこは、きのうまで海とつづいていなかったのですが。

さわぎのもとになった、あの火をふく山は、もうおとなしくなっていました。山はつかれきって、ためいきをつき、ときどき空にむかって、すこし灰をふきあげるだけでした。

「だれか、ハンモックを中へいれたかい？」
だしぬけに、ムーミンパパがききました。
ハンモックをいれることは、だれも気がつきませんでした。
「まあ、いいさ。あれは、いやな色だったからな。」
そう、ムーミンパパがいいました。
家のまわりに、ひたひたとよせる水の音は、みんなのねむけをさそいました。それで、つぎつぎにゆかの上へうずくまって、ねむってしまいました。でも、ムーミンパパは、ろうそくをけす前に、目ざましどけいを七時にあわせたのでした。
ムーミンパパは、外がどうなったか、見たくてたまらなかったからです。

「ママ！」
と、ムーミントロールが、小声でささやきました。
「ぼうや、なあに？」
と、ムーミンママはへんじをしました。
「ぼく、帆前船を、池へわすれてきちゃった。」
「きっと、あしたもそのままありますよ。」
こう、ムーミンママはいいましたが、とつぜん、いすをゆするのをやめて、大声をあげました。
「あら、たいへん！」
「どうしたの。」
スノークのおじょうさんが、びっくりしていいました。
「小型のボートよ。わたし、ボートをわすれたわ。なにかたいせつなものをわすれたと、さっきから思ってたんだけど。」
「もう、水が通風孔のところまできたぞ！」
と、ムーミンパパがつげました。
パパはひっきりなしに客間へおりていって、水のふかさをはかっていたのです。みんな、へやの階段のほうを見て、ぬれてはこまるもののことを、あれこれと考えました。

そのうちに、家具がぷかぷかとへやの中でただよいだしました。それで、みんなは二階へあがって、あらしのすぎさるのをまつことにしました。
「こんな天気は、わしのわかいころからはじめてだな。」
ムーミンパパは元気にこういって、ろうそくに火をつけました。
その夜は、不安でたまりませんでした。かべの外では、ミシミシゴーゴーと音がします。そして、おもい波がまどじきりに、うちよせました。
ムーミンママは、ゆりいすにこしかけたまま、ぼんやりといすを前後にゆすっていました。
「世界が、しずんじゃうの？」
と、ちびのミイがききました。
「そうだわよ。もうすぐわたしたち、天国へいくんだから、あんたもいまのうちに、いい子になるようにしなさい。」
と、ミムラねえさんがいいました。
「天国だって？」
ちびのミイが、くりかえしていいました。
「わたしたち、天国へいかなきゃならないの？　どうやったら、そこからでてこられる？」
なにかおもいものが家にぶつかって、ろうそくの火が、ちかちかとゆれました。

した。

「そう、ちょっときけんだね。」

ムーミンパパは、やさしくいいました。

ムーミントロールは、まんぞくしてこっくりとうなずきました。

大きな音がしたのは、そのときでした。

遠く海のほうから、きこえてきたのです。はじめは、にぶいどよめきでしたが、しだいにつよく、ものすごい音になりました。

あかるい夜の空に、なにかとほうもなく大きなものが、森のてっぺんをこえて、もりあがるのが見えました。それは、どんどん大きくなるばかりで、てっぺんに、白い波がしらをのせていました。

「わたしたち、もうへやの中へはいりましょうよ。」

と、ムーミンママがいいました。

みんなのしっぽが、しきいをこえて中へはいるかはいらないうちに、洪水の大波がムーミン谷におしよせて、すべてのものをまっくらやみの中で、水びたしにしてしまいました。ムーミンやしきが、すこしゆれました。でも、たおれはしませんでした。このやしきは、とってもいい家ですからね。


Tove

おちる音がします。
「ごはんに、するの？」
　ムーミンママが、ねぼけてそういってから、
「いったい、どうしたんです。」
とたずねました。
「なんでもないよ、ママ。火をふく山が、あばれているだけさ。」
と、ムーミンパパがいいました。（じぶんは、溶岩のぶんちんのことを、考えているだけでしたがね。）
　いまは、ミムラねえさんも、おきていました。みんな、ベランダの手すりのわきにたって、ようすを見まもっていました。
「その山は、どこにあるの？」
と、ムーミントロールがききました。
　ムーミンパパが、へんじをしてくれました。
「小さな島の上だよ。黒い小島で、そこじゃ草もはえないのさ。」
「パパ、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけだけど、きけんだと思わない？」
　ムーミントロールは、小さい声でそういって、パパの手の中へ、じぶんの手をさしいれたので

ときました。
ムーミントロールは、われめに鼻をくっつけて、のぞきこみました。
と、そのとき、かるい地ひびきがして、地面がふさがってしまったのです。
「あれは、おろしたてのだったのになあ。青い色で。」
ムーミントロールは、口をとがらせて、まだいっています。
「でも、あんたのしっぽをはさまれなくて、よかったわ！　はさまれてごらん、あんたは一生ずっとここにすわってなきゃならないのよ！」
そういって、スノークのおじょうさんは、なぐさめました。
ムーミントロールは、すばやくたちあがって、いいました。
「おいでよ。ぼくたち、ベランダでねよう。」
家の前にはムーミンパパがたって、あたりのにおいをかいでいました。
庭の中は、ぶきみにざわめいています。鳥たちがゆめをやぶられてとびたち、小さないきものが草の中を、いそいでにげていきました。
ちびのミイが、階段のそばのひまわりの花から顔をだして、うれしそうにさけびました。
「さあ、いよいよはじまるわよ！」
ふいに、足もとでにぶい地なりがしました。台所で、おなべがいくつも、ガチャン、ドスンと

と、スノークのおじょうさんがききました。
「もう、しずまったよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
そのとたんでした。ランプが、草の中にひっくりかえりました。
花ははげしくゆれて、小さなわれめがゆっくりと地面にひろがりました。われめはどんどんのびて、とうとうしきぶとんの下まで、はいってきました。それから、われめのはばがひろがりました。土やすなが、そこへなだれおちだしました。そして、あっというまに、ムーミントロールの歯ブラシが、くらい地面の中へ、まっすぐにすべりおちてしまいました。
「おろしたてだったのに!」
と、ムーミントロールはさけんで、
「きみ、あれが見えるかい?」



ことを思いつきました。
「みんな、お庭でねることにしましょうよ。」
こういってムーミンママは、あちこちの気持ちよさそうな場所に、めいめいのねどこを用意しました。それから、だれもひとりぼっちのさびしい思いをしないようにと、どのねどこのそばにも、小さいランプをおきました。
ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、ジャスミンのしげみの下にまるまりました。でも、ふたりともねつけません。
いつもの夜とちがうのです。なにか、うすきみわるいほどしずかでした。
「あつくてたまらないわ。あたし、ねがえりばっかりしているの。シーツは気持ちがわるいし、おまけにすぐにかなしいことを考えちゃうんだもの！」
と、スノークのおじょうさんが、なげきました。
「ぼくも、そっくりおなじなんだ。」
こう、ムーミントロールはいっておきあがると、庭の中を見ました。ほかのものたちは、ねむっているようです。ねどこのそばで、ランプがしずかにもえていました。
とつぜん、ジャスミンのしげみが、はげしくゆれました。
「あれは？」

ムーミントロールは、やさしくあいてをしましたが、声はいくらかまのぬけたひびきをもっていました。
「いっしょにあそばない？」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
「わたしがすごくきれいで、あんたがわたしをさらってしまうというあそびをしない？」
「ぼく、あそびたいのかどうか、じぶんでもよくわからないんだよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
スノークのおじょうさんは、がっかりして耳をたらしました。ムーミントロールは、あわててじぶんの鼻をおじょうさんの鼻にこすりつけて、いいました。
「きみがすごくきれいだ、なんてことは、あそびにしなくていいんだよ。きみは、いまだって、ちゃんときれいなんだもの。ぼく、たいていきみをさらっちゃうよ。あしただけどさ。」

六月の長い日もすぎていって、夕ぐれになりました。
でも、やっぱりあついことでした。
かわいた、もえるような空気が、すすをいっぱいただよわせていました。そして、ムーミン一家のだれもが、元気なくだまりこくって、ふさいでいました。しまいに、ムーミンママが、いい

（モランもいるし、こわいおまわりさんだって、たくさんいるんだ。ふかい谷底に、ころげおちることもあるし、こごえ死ぬことも、空へふきとばされることも、海へおちることも、のどにほねがつきささることも……、ほかにもいっぱいあるぞ。

ひろい世の中って、おそろしいよ。あそこじゃ、だれもひとのことなんか知らないんだ。だれはなにがすきで、なにがこわいのか――それもわからない。いま、スナフキンは、その世の中を歩いてるんだ。あのみどり色の古ぼけたぼうしをかぶって……、そして、あそこには、スナフキンの手ごわいかたきの公園番がいる。おそろしい、おそろしい敵だ……。）

ムーミントロールは、橋のところでたちどまり、しょんぼりした顔で、じっと水の流れを見おろしました。そのとき、かたにそっと手がおかれたのです。ムーミントロールは、びくっとしてふりかえりました。

「なんだ、きみかい！」

「わたし、すごくたいくつなの。」

スノークのおじょうさんがそういって、前がみの下からうったえるように、ムーミントロールを見つめました。

スノークのおじょうさんは、すみれの花たばを耳につけていました。午前中、ずっとつまらなくすごしたのでした。

なって、そこにはだれもすんでいなかったみたいです。

ムーミントロールは、まちつづけていました。だけど、もうそれほどいっしょうけんめいにではありません。気をわるくしていましたし、すこしまちくたびれてもいました。

いつだったか、夕ごはんのときスノークのおじょうさんが、その話をもちだしたことがあります。

「ことしは、スナフキンのかえりがおそいわね。」

といったのです。

「もうかえってこないのかもしれないわね。」

と、ミムラねえさんがいいました。

すると、ちびのミイが大声をあげました。

「きっと、モランにたべられちゃったんだ！　でなけりゃ、あなにおっこちて、ぺしゃんこになってるんだわ！」

するとムーミンママが、いそいでいいましたっけ。

「おだまり、おだまり！　スナフキンさんは、いつでもじょうずにきりぬけますよ。」

（だけどなあ、やっぱり。）

と、ムーミントロールは川にそってゆっくり歩きながら、考えました。

てそうなるのですが、このときも、スナフキンに会いたくなってきたのです。

スナフキンは、ムーミントロールのいちばんのなかよしでした。いうまでもありませんが、ムーミントロールは、スノークのおじょうさんも大すきです。だけど、おじょうさんは女の子なのですから、それとこれとが、そっくりおなじというわけはありません。

スナフキンは、おちついていて、なんでもよく知っています。けれども、じぶんの知識をひけらかすようなことはしません。スナフキンから旅の話をきかせてもらえることがあると、じぶんもひみつの同盟にいれてもらったような気がして、だれでもとくいに思うのでした。

さいしょの雪がふると、ムーミントロールは、ほかのみんなといっしょに、いつも冬眠にはいります。ところが、スナフキンは南のほうへでかけていって、春がきてから、はじめてムーミン谷へもどってくるのです。

ことしの春は、スナフキンはまだ、かえってきていませんでした。

ムーミントロールは、冬眠からさめると、すぐにスナフキンのかえりを、心まちにしはじめました。――だれにもそんなことはいいませんでしたけれど。鳥たちがきれいにならんで、ムーミン谷の上をわたり、北山の雪もきえてしまうと、ムーミントロールは、がまんできなくなりました。スナフキンのかえりが、こんなにおそくなったことはなかったのです。そのうちに夏になりました。スナフキンがテントをはっていた川ばたの土地には、草がしげりました。みどりがこく

ムーミンママは、はあはあと息（いき）をきらせてベランダへあがり、たちどまって朝ごはんのテーブルをながめました。テーブルクロスが、すっかりすすでよごれています。

「まあまあ、なんてあついんでしょ！　おまけに、すすだらけね。火をふく山には、ほんとにはらがたつわ。」

と、ムーミンママがいいました。

「あれが、もうちょっと近くにあったら、ほんものの溶岩（ようがん）のぶんちんくらいは、手にはいるんだがなあ。」

ムーミンパパは、さもざんねんそうにいうのでした。

ほんとうに、あつい日でした。

ムーミントロールは、池のそばにねころんだまま、空を見あげていました。空はまっ白で、まるで銀紙（ぎんがみ）でできているように見えます。下の浜（はま）べで、海鳥たちが、たがいによびかわしている声が、きこえました。

「夕だちがくるぞ。」

と、ムーミントロールは、うとうとしながら思いました。そして、むっくりとこけの上にたちあがりました。空もようがかわるとか、夕ぐれになるとか、へんな光が見えるとかすると、きまっ

と、ムーミンパパがゆりいすから声をかけました。

ミムラねえさんは、むずかしい顔をしていいました。

「わたしは、じぶんの気がすむように、どなってるだけよ。おかあさんがでていくときに、いったのです。もう、妹のことは、あんたの手にまかせますよ。あんたがしつけてやれなかったら、ほかにはできる人がありませんからね。おかあさんでも、はじめからすぐにあきらめたくらいだもの、って。」

「ほう、よくわかったよ。気がすむものなら、せいぜいどなることさ。」

ムーミンパパはそういって、朝ごはんのテーブルからビスケットを一つつまむと、ゆっくりあたりを見まわして、クリーム入れの中へそれをひたしました。

食事のしたくは、五人ぶんでした。六つめのおさらは、ベランダのテーブルの下にあります。それというのは、ミムラねえさんが、そこのほうがきらくでいい、といいはったからなのです。ちびのミイのおさらは、もちろん、とても小さいものです。そして、テーブルのまん中におかれた花びんの、かげにかくれていました。

そこへムーミンママが、いそぎ足で庭の小道をかけつけてきました。

「ママ、あわてなくていいよ。われわれは、たべものおき場でちょっとつまんだからね。」

と、ムーミンパパがいいました。

ムーミンママは、こっくりとうなずきました。それから、水のおもてに鼻をくっつけて、底をのぞきこみながらいいました。

「あそこに、なにか光ってるものがあるよ。」

「あれは、ママの金のうでわだよ。それから、スノークのおじょうさんのくるぶしかざりさ。いい思いつきじゃない？」

と、ムーミントロールがいいました。

「とっても、いいわ。これからはいつでも、かざりにつけるものは、茶色の井戸水の中へいれておきましょうね。そうしたほうが、ずっときれいだわ。」

こう、ムーミンママはいいました。

ところで、ムーミンやしきの階段の上では、ミムラねえさんが声をからしてさけんでいました。ちびのミイは、かぞえきれないほどもある、かくれ場所のどこかに、にやにやしながらすっこんでいるのです。それは、ミムラねえさんも知っていました。

（ねえさんったら、わたしをはちみつでおびきだせばいいのに。そして、でてきてから、わたしをぶてばいいんだわ。）

と、ちびのミイは思っていました。

「なあ、ミムラねえさんや。あんたが、そう大声をだしてちゃ、あの子はぜったいにでてこんよ。」

きました。
ムーミントロールは、じぶんの鼻をムーミンママのに、やさしくすりよせて、いいました。
「これ、ママがいままでにつくった中で、いちばんすてきだね。」
って。
ムーミンママの鼻は、白いビロードで顔をなでるような感じがするんです。
ふたりは、こけの上にならんですわり、帆前船が池を横ぎって、一まいの葉っぱのそばに到着するのを見ていました。
遠く家のほうから、ミムラねえさんが大声で妹をよんでいるのが、きこえました。
「ミイ子！　ミイ子！　いたずらなおちびさん！　ミイイイ子！　かえってこないと、あんたのかみの毛をひっぱるわよ！」
こんなふうに、さけんでいるのです。
「ミイ子が、またどこかへかくれてしまったんだね。ママ、おぼえてる？　あの子はママのハンドバッグの中に、かくれてたことがあったでしょ？」
と、ムーミントロールがいいました。



ら、いっしょうけんめいに水の中をのぞいて、よろこんでいました。ムーミントロールは、こんなことを考えていたのです。

（あれは、ぼくのだぞ。きっと、ぼくにくれるんだ。ママは、いつでも夏になると、木の皮の船をこしらえて、ママのいちばんすきな人にあげるんだもの。そんなことしたのを、ほかの人がかなしまないように、あとでわからないようにしてしまうけどさ。

そうだ、あのみずすましが、もしか東へいったら、小さなボートはあきらめるとしよう。もしか西へいったら、ボートはぼくのだぞ。きっと手でつかんだら、つぶれそうなくらい小さい船だよ。）

みずすましは、ゆっくりと東のほうへすべっていきました。ムーミントロールの目には、なみだがうかびました。

そのとき、草がガサガサうごいて、草むらのあいだから、ムーミンママの顔があらわれたのです。

「ぼうや、いいものをもってきてあげましたよ。」

ムーミンママは、あの帆前船をそっと水にうかべました。帆前船はじぶんのかげの上にちゃんとうかんで、まるでいつもそうしていたみたいに、ひとりですすみはじめました。

ムーミンママが小型のボートをわすれてしまっていることに、ムーミントロールはすぐ気がつ



うごきまわっています。もっと下のほうには、かえるの目が金色に光っていました。いちばん下のどろの中にすんでいる、かえるの親類みたいなおかしないきものが、ちらりとすがたを見せることもありました。

ムーミントロールは、いつもあそびにいく場所にねころんでいました。（それとも、そういう場所の一つに、といったほうがいいでしょうか。）みどり色のまじった黄色いこけの上にまるまり、しっぽをからだの下へそっとさしこんで、横になっていたのです。

はちの羽音や、ねむたそうにブンブンいっているうなり声をききなが

ずっとおとなしくしてたのに、いまになってさ。せんたくものを、すっかり外へほしたとたんに、また山がくしゃみをしだしたのよ。みんな、まっ黒になっちゃう……。」

ムーミンママは、こう説明してきかせました。

「みんな、もえちゃうのね！　どこのおうちも、お庭も、おもちゃも。それから、小さい弟や妹たちも、その子たちのおもちゃも、ぜんぶもえちゃうんだ！」

ちびのミイは、はしゃいで大声をあげました。

「ばかな子だよ。」

ムーミンママは、やさしくいって、鼻の頭からすすをはらいおとしたのでした。

それから、ムーミントロールをさがしにいきました。

ムーミンパパのハンモックをかける木のすぐ右に、坂があります。坂の下には、大きなくぼみがあって、茶色そのものという色をした水が、いっぱいたまっていました。ミムラねえさんが、いつもいうところでは、この池のまん中は底なしのふかさなのだそうです。たぶん、そのとおりなのでしょうよ。

池のまわりには、すべすべしたつやのある、ひろい葉っぱがしげっていて、とんぼやみずすましが、その上にのってやすんでいました。水面の下では、いろんな小さい虫たちが、ゆうゆうと

ちびのミイが、さいほうかごの中から、さけびました。
「いいですよ。」
と、ムーミンママはいいました。ムーミンママは、じぶんのつくった帆前船を、まんぞくそうにながめながら、
（なにか、つけるのをわすれたものはないかしら？）
と、しあんしていたのです。ムーミンママが、帆前船を両手でもっているところへ、いきなり黒い大きなすすがおちてきて、甲板のまん中にくっつきました。
「あら、まあ！」
と、ムーミンママはいって、すすをふきとばしました。すぐに、またすすのこながとんできて、ママの鼻にとまりました。そこらじゅうに、いっぱいすすがとんできます。
ムーミンママはたちあがって、ためいきをつきながら、いいました。
「あの火をふく山って、ほんとにはらがたつよ。」
すると、ちびのミイがさいほうかごの中から顔をだして、
「火をふく山だって？」
と、おもしろそうにききました。
「そうよ。この近くの山が、火をふきだしはじめたの。すすもね。わたしが結婚してからは、

「ミイ子！　でてきなさい、すぐに！」

ミムラねえさんは、こわい声でいって、毛糸のたばの中から、妹をつまみだそうとしました。だけど、ちびのミイは、さいほうかごのおくへもぐりこむばかりで、毛糸の中へすっかりかくれてしまったのでした。

「あの子が、こんなに小さく生まれついてしまったので、ほんとにこまるわ。」

と、ミムラねえさんは、ぶつぶついって、

「どこにいるのやら、わかったためしがないの。おばさん、あの子にも木の皮のお船を、一つつくってやってくれない？　そしたら、水おけの中でのりまわしているでしょうから、あの子がどこにいるか、わたしにもわかるようになるもの。」

とたのみました。

ムーミンママは、にっこりわらって、ハンドバッグから、木の皮を一つとりだしました。

「ミイ子ちゃんは、これにのれるかしら？」

ムーミンママは、そうたずねました。

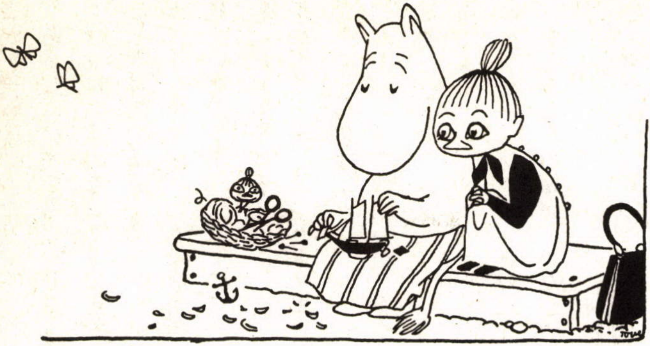
「だいじょうぶよ。でも木の皮でちっちゃい安全ベルトもこしらえてやってね。」

と、ミムラねえさんがいいました。

「毛糸の玉を、きっちゃってもいい？」

なはしっこが、甲板にぴったりとくっつきました。
「これで、あらしになってもだいじょうぶだわ。」
ムーミンママは、そんなひとりごとをいって、うれしそうにほっと息をつきました。
階段にこしかけているムーミンママのそばに、ミムラねえさんがしゃがみこんで、のぞいていました。ムーミンママが、いろんな色のガラスの頭がついたまちばりで、ささえのつなをとめているのを見ていたのです。マストのてっぺんには、どれにも赤くて長い旗がつけられました。
「このお船、だれにあげるの。」
と、ミムラねえさんが、そっとききました。
「ムーミントロールによ。」
と答えて、ムーミンママは、いかりをつけるつなに、よいものはないかと、さいほうかごの中をさがしました。
「おさないでよ！」
ほんとに小さなさけび声が、さいほうかごの中からきこえました。
「あらっ、またあんたの妹が、わたしのさいほうかごの中にいるわ。そのうちに、はりでけがしちゃうよ。」
と、ムーミンママはいいました。

# 第1章



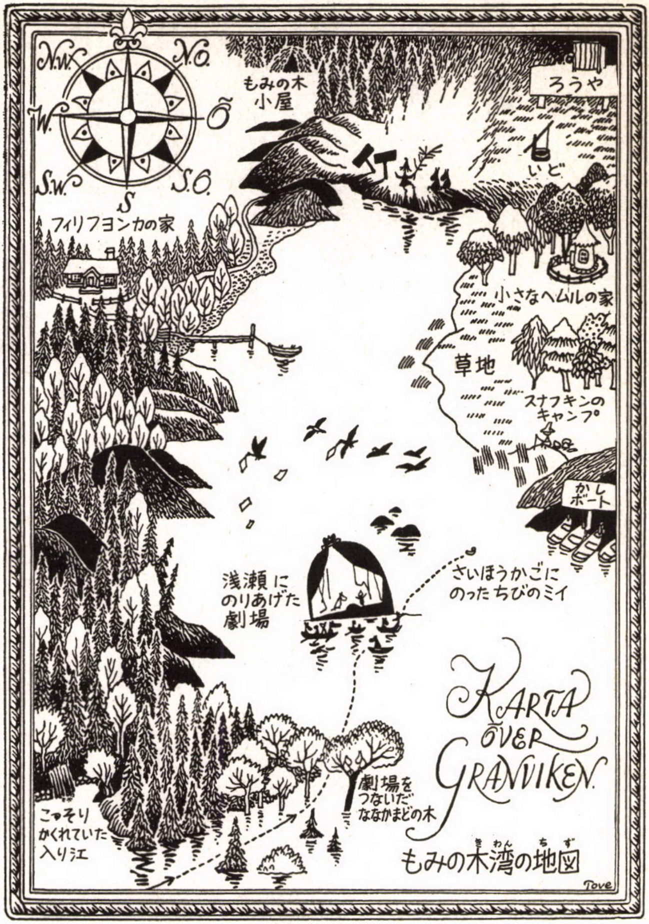
## 木の皮の船と火をふく山と

　ムーミンママは、玄関の階段にこしかけて、お日さまの光をあびながら、木の皮の船をこしらえていました。

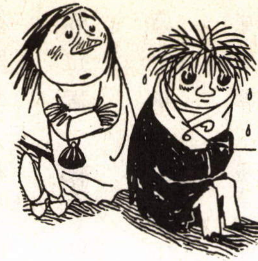
（たしか、小型の帆前船には、うしろに大きな帆が二つあって、前のやりだしに小さな三角形のが、たくさんついていたと思うんだけどねえ。）

と、ムーミンママは考えました。

　かじをつくるのは、いちばんやっかいでしたが、貨物をいれるへやをつくるのは、とてもたのしいことでした。ムーミンママは、木の皮で、すごく小さなふたをこしらえておきました。それをかぶせてみると、きっちりはまって、うすっぺら


N.W.
N.O.
W.
Ö
S.W.
S.O.
S
もみの木
小屋
ろうや
いど
フィリフヨンカの家
小さなヘムルの家
草地
スナフキンの
キャンプ
かし
ボート
浅瀬に
のりあげた
劇場
さいほうかごに
のったちびのミイ
KARTA
ÖVER
GRANVIKEN.
劇場を
つないだ
ななかまどの木
こっそり
かくれていた
入り江
もみの木湾の地図
Tove

# もくじ



**●ホムサとミーサ**

大水でミーサと流され、
劇場で生活する気のいいホムサ。
プリマドンナになって、
すばらしい幸福感にひたるミーサ。

**●エンマ**

劇のことばかり
いつも考えている劇場ねずみのおばあさん。



**●フィリフヨンカ**

夏まつりのイブに、
おじとおばをまつさびしいむすめ。




**●小さなヘムル**

みんなをたすけるために、
「するべからず」を五千回書く。



**●スノークのおじょうさん**

ムーミントロールとなかよし。
前がみがとてもよくにあう。



**●ミムラねえさん**

ちびのミイのねえさん。
とても妹思い。



**●スナフキン**

ムーミントロールの親友で旅(たび)が大すき。

**●森の子どもたち**

二十四人もいて、
みんなスナフキンをしたっている。





**●ちびのミイ**

おしゃまで、ひにくやで、
きかんぼう。
しかし、あたたかい心ももっている。

## おもな登場人物



**●ムーミントロール**

ムーミン家のひとりむすこ。
勇気があり、やさしい心をもつ。

**●ムーミンママ**

お客さまをもてなすのが大すき。
人のいい、やさしいママ。



**●ムーミンパパ**

「ライオンの花よめたち」
という悲劇を書く。



FARLIG MIDSOMMAR

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

1954

# ムーミン谷の夏まつり



トーベ=ヤンソン／作・絵
下村隆一／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

# ムーミン谷の夏まつり

トーベ＝ヤンソン/作・絵
下村隆一/訳